
アジとサンマとクローバー

仲村 歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アジとサンマとクローバー

【Zコード】

N1172Y

【作者名】

仲村 歩

【あらすじ】

突然の兄の訃報を母から受けて小笠原に行くと
幼い女の子が泣きながら抱き着いてきた
それが全ての始まりだった

プロローグ

「しかし、暑いな……」

それが正直な気持ちだった。

東京では心地良い秋風がそろそろと吹こうかと言つゝ9月の終わりなのに、ここは未だ夏の名残と言つよりは……

竹芝桟橋から船で揺られる事25時間半。

船はゆっくりと港に接岸しようとしている。

港には人や荷物を待ちわびた人が集まりにぎわっている。

6日に一度しか船は来ない。

どんな僻地かと思うかもしれないが住所的には東京都となっている。ため息を漏らしタラップを重い足取りで降りていく。

「パパ！」

少し離れた所から小さな女の子の声が桟橋に響き女の子が走り出した。

単身赴任か仕事の都合で離ればなれになつていてる父親との再会だらう。

辺りを見渡すと沢山の観光客に交じり見るからに仕事関係の人だらうと思える姿の人を見て取れる。

小さな女の子の声が泣き声に変わり。

足に小さな衝撃を受ける。

驚いて見下ろすと花柄のノースリーブの白いワンピースを着た女の子が俺の脚にしがみついて泣きじゃくっている。

潮風が吹き抜け女の子の色素の薄い肩まで伸びている髪が風に舞つた。

それはお袋からの一本の電話から始まった。

俺は一応アパレル関係の会社で営業の仕事をしている。

一応と言うのは俗にいう窓際族なんて呼ばれている部類に含まれているからだ。

人件費削減や経費削減が叫ばれている中で、営業成績も下から数えられた方が早く定時に出勤して定時に退社する様な俺が会社に残つて이라는のが自分自身でも不思議に思う。が、決して転職なんて考えた事は無い。

就職難のご時世にぬるま湯に浸かつていられる幸せを噛み締めていたいからだ。

「お～い、沢渡。沢渡典彰君、2番に電話だよ

「すいません」

上司である水野課長に言われ机の上有る電話の受話器を取り点滅している2の番号を押すと沈んだ様なお袋の声がした。

「ノリちゃん？」

「お袋、会社でノリちゃんは止めてくれ。何か用か？」

本来なら携帯に掛けてくれば用は済む事だが、俺が実家からの電話に殆ど出ない事を見越して会社に掛けて来たのだろう。そしてお袋の口から信じられない言葉が発せられた。

「宗ちゃんが死んだ」

「はあ？ 何の冗談だ。昨日の夜に電話で喋つたばかりだぞ」「修理中のアンテナの資材が落ちてきて宗ちゃんに……」

「おい、お袋！」

受話器の向こうでお袋は泣き崩れてしまった。

これ以上お袋から事情を聞くのは無理だと判断し、一旦通話を止めて昨夜掛つてきた履歴から宗一の携帯を呼び出す。

すると機械的な声で電源が入っていないか電波の届かないと告げら

れた。

堪らず営業部を飛び出して唯一テレビのある社員食堂に駆け出して
いた。

廊下を重い足取りで営業部に戻る。

握りしめた携帯が着信を知らせ友人や知人から宗の事を告げられ、
真実を受け入れる前に何度も再認識させられた。

営業部に戻り課長に事の次第を告げる。

「沢渡君、急に如何したんだ？」

「すいません。取り乱して実は仕事中の事故で兄が亡くなりました」
「何と言えば良いか。こっちの事は任せて早く帰りなさい、総務には
は忌引の手続きをしておくから。確か君のお兄さんは小笠原で」

「はい」

「それじゃ時間が掛るだろ？ 戻ってきてから有給の手続きが出来
るよう取り計らっておくから」

「ありがとうございます。それじゃ失礼します」

自分のデスクに戻り同僚に頭を下げて営業部を後にする。

昨夜の宗一からの電話は突然の物だった、虫の知らせと言つやつか。
電話では何か煮え切らない奥歯に物が挟まつた様な感じで、何かを
俺に相談したかったのかもしれないが今はもう聞く事すら出来ない。
後ろから同僚が課長に抗議している声が聞こえてきた。

「課長、何で沢渡を庇うんですか？ あんな営業部のお荷物なんて」

「それじゃ、君は沢渡君が作った記録を塗り替える事が出来るのか
な？」

「それは…… それにそんな記録さえ本当か」

「四の五言わずにそれを越えようとする事がひいては当社の成長を
促すのでは？」

「判りました。あんな記録無理だろ？、勝ち逃げ野郎が」

会社から直で兄の家に向かう。

兄の家は新興住宅地の中にある小奇麗な一戸建てだった。

表札に能登島の名前がある。

インターフォンを鳴らすと兄の愛娘である可奈ちゃんドアを開けてくれた。

「ああ、ノリだ。ママ、お婆ちゃん、ノリが来たよ」
姪の可奈ちゃんの声でお袋が迎えてくれた。

「意外と早かったのね」

「あんな、電話口で泣き崩れたお袋が言つ言葉か
リビングに行くと兄の奥さんである一歳上の美紀さん^{みのり}が放心状態
でソファーに座っていた。

「今、お茶でも」

「冷たいのをくれよ、喉がカラカラだ」

「はいはい」

こんな時にはなんて声を掛ければいいのだろう30年生きて来ても
戸惑つてしまう。

大丈夫の筈も無ければしつかりしてとも言えずだんまりを決め込む
しか出来なかつた。

全く現実味が無く平坦な時間が流れている。

それはあまりにも遠い場所で起きた事だからだろうか。

ニュー Yorkまで1~2時間ちょいハワイまでなら7時間で着いてしまつ。

それなのに兄貴がいる場所は日本国内なのに2~5時間以上かかってしまう。

「ノリは何時まで居るの?」

「可奈ちゃん……」

「はい、冷たい麦茶」

「サンキュー」

お袋が持つてきてくれた麦茶を一気に喉に流しじむ。
可奈ちゃんは何も判らずに俺の横に座り嬉しそうに足をブランブランさ

せていた。

お袋と俺が遊びに来たと思つてゐるのだらう。確かに6歳の子どもに父親が死んだなんて理解できないだらうし、ましてや父親と毎日顔を合わせていた訳じやない。単身赴任先で死んでしまつて死に顔さえ見る事は不可能だったのだから。

「典彰君、来ててくれたんだ」

「義姉さん、当たり前でしょ」

「そうだよね。何だか実感が無くて悪い夢を見ているみたいで」

「ここにも夫の死を受け入れられない人がいる。

理由は可奈ちゃんと同じ様なものだらう。

「お袋、義姉さんの両親は？」

俺の問いにお袋は何も言わずに首を横に振つた。
美紀さん方の家族とはほぼ絶縁状態になつてゐる。

時々美紀さんが近況を電話で報告していると聞いた事はあるけど年下の兄と結婚話が持ち上がつた時に反対され、美紀さんが半ば強引に兄の所に転がり込むように結婚してしまつた。

その事に責任を感じた兄は能登島の姓を受け継いだ。

「ノリ、あんたが島に行つてきなさい」

「はあ？ お袋は何を言つてゐるんだ？ 会社は？」

「忌引と有給を引つ付ければ良いじゃない。あんたが行かなきゃ誰が宗ちゃんを迎えるに行くの」

「典彰さん、私からもお願ひします」

「美紀さん……」

美紀さんは極度の乗り物酔いをするので一度だけ島に可奈ちゃんを連れて行つた時には大騒ぎになつた。

お袋が親父がと思ったが美紀さんがこの状態じやお袋は無理だし、親父は……も無理か。

押し切られる様に自宅に戻り準備を始め、パソコンで島までの経路を調べてみる。

「船つて6日に1便……」

慌てて船会社に電話して俺は船上の人になつた。

「これ、昴！ その人は……」

俺の脚にしがみついた女の子の後を慌てて数人の作業着姿や近所の人だろうかが追いかけてきている。

「あんたが宗一さんのかい？ それにしても昴が勘違いするのも仕方がないか」

「能登島宗一の弟の沢渡典彰です」

「あら、苗字が違うね」

「兄は婿養子に行つたので」

「で、単身赴任かい？」

「まあ、兄は大好きな仕事に着けたのですから本望だと思いますよ」

職場の人や近所の人に連れられて兄が暮らしていた家に向かう。

兄は荼毘に付され葬儀は滞りなく職場の同僚達の手によって執り行われた後だった。

近くに兄の家族が居ないのが現状でましてや船は週一しかないのだから、いつ家族が来られるか判断しようが無かつたのだろう。仕方がないで片づけたくはないが今は飲み込むしかなかつた。

そして俺の脚にしがみ付いていた女の子は片時も俺から離れようとしなかつた。

「あの、つかぬ事を聞きますがこの子は？」

「何を言つているんだい。宗一さんの娘さんの昴ちゃんじゃないか」「はああ？」

思わずその場から逃げ出したくなつた。

人の死なんていつ訪れるか誰にも判らないしこの世の中に終らないものなんて無いと思つていてる俺ですら兄の死以上に受け入れがたい言葉だつた。

「しかし、見れば見るほど宗一さんにそっくりだね。だけど宗一さ

んの方が優しそうだけだ

「まあ、一卵性の双子ですし良くある話で出来た兄と出来の悪い弟でしたから」

兄は出来過ぎるくらいだった。

頭も良いし誰かれなく優しく出来る人間で、唯一と言えば人が良すぎる所が今の世知辛い世の中じゃ欠点なのかもしれない。

それに対して俺はと言うと若干兄より運動が得意なだけで常に兄と比べられた。

それに嫌気がさして兄がしない様な悪さは全てやつてきた気がする。

タバコ、酒、喧嘩 etc

自慢できる事じゃないが補導や前科が無いのが唯一の自慢かもしれない。

お蔭で一応大学も卒業出来て今の会社に入る事も出来た。

大学に行つたのは親のたつての願いだったからで俺自身が行きたかったかと言えば嘘になる。

現にバイトや遊びに明け暮れて単位もギリで卒業を切り抜けた。

一方の兄は成績も優秀、推薦で自ら望む大学に行き自分のやりたい事に打ち込んで、希望通り国立天文台の技師になり念願のオレンジペペで仕事が出来るようになった。

俺たちが高校の頃から兄貴と美紀さんは付き合つていて、兄貴が大学を卒業と同時に結婚して可奈ちゃんが生まれ幸せな家庭だと思つていた。

そんな兄に可奈ちゃんと同じ年の隠し子が居たなんて青天の霹靂だつた。

そして彼女の名前の昴も星や月が大好きだった兄なら頷ける。

近所の人に聞いても娘だと信じて疑わず、俺自身も言い出せなる雰囲気じやなかつた。

「宗さんが島に来た時には奥さんも一緒にたけど時々フラと居なくなることが多くてね、もともと不思議な感じの人だつたけどね。

ある日、フラツと帰つて来なくなつたんだよ
そんな事を兄の仕事中に昴の面倒を見ていた近所の人が話してくれた。

集落から少し離れた町明りがあまり届かない様な場所に兄が暮らしていたコンクリート造りの平屋建ての小さな家があつた。

玄関の前で小さな何かが動いている。

「何だ、このチビつこいの」

「チビちがう。サン」

「どう見てもチビだろう」

昴が名前を教えてくれた子犬は生意氣な事に俺に向かつて全身で威嚇していつちよ前に牙を剥いている。

「小さいのに生意氣だぞ」

俺がしゃがみ込んで斑な狼の様な毛色の子犬に手を出そうとすると近所の人止められてしまつた。

「やめときな、沢渡さん。その子犬は昴にしか懐かないんだ。宗一さんでも梃子摺つていたんだから」

「余所者の俺じや駄目ですかね。やつぱり」

「多分、狛犬の血が入つているから主人以外には攻撃的なんだと思うよ」

「へえ、狛犬ね」

子犬の前にしゃがみ込むと背中の毛を立てて今にも飛び掛かろうとしていた。

狛犬らしく俺の目をジッと睨みつけている。

俺が目を逸らした瞬間を逃さない為だろう。

目を逸らさずに静かに掌を犬の前に差し出す。

「沢渡さん、危ないよ」

「大丈夫」

静かに子犬の鼻先に指先を近づけた。

周りでは固唾を呑んで見守つてゐるのだろう、昴は怖いのか俺の背

中に隠れる様にしている。

子犬とは言え指先を噛まれればそれなりの怪我をしてしまうだろう。静かに息を吐き出すと子犬が唸るのを止めた。

そして俺の指先の匂いを嗅ぎ始めると周りから驚きの声が上がる。子犬が俺の指先を舐めていた。

「お前が昴を守っていたんだな、よしよし」

子犬の口を掴むと前足で俺の手を退けようとしている。

今度は首元に手を入れ子犬をひっくり返すと甘噛みをしてジャレついて来た。

俺に対しての警戒心はもう何処にも無いようだ。

「サン！」

昴が子犬の名前を呼ぶが遊ぶのに気を取られて反応しなかつた。

「サン、ご主人様が呼んでるぞ」

俺がそう言つとクルンと体を起こして顔を上げてお座りをした。

「良い子だ」

「いいこ、いいこ」

昴がサンの頭をなでるとクンクンと鼻を鳴らし始めた。

近所の人の話ではサンは桟橋で観光客などに噛みついたりして危険だと言う事で捕獲される事がきまり島の人気が捕まえようとしたらしい。

子犬が桟橋に居ると言うのを聞いて兄貴と見に来ていた昴は追い詰められたサンを見て突然駆け出してサンを抱きしめてそれ以来兄貴が責任を持つて飼う事になつたと話してくれた。

昴に子犬、どれだけ兄貴は優しいと言つかお人よしと言つか。で、自分はあつという間に空に昇つて尻切れ蜻蛉かよ。

兄の暮らしていた家で帰りの日まで寝泊りする事にした。

その方が荷物の片づけや何かと都合が良いからで、昴はと言つと近所の人が『しばらくは、おばちゃんの家でね』と言つ言葉にがんと首を縦に振らなかつた。

今は兄の前で静かに寝息を立てている。

その横でタバコを吸う訳にもいかず表に出て星空を眺めながら一服していた。

「いくら星が好きだからって自分が星になつてどうするんだよ、馬鹿兄貴」

頭の上には満点の降る様な星空が広がつていて。

子どもの頃に兄貴が嬉しそうに星々の名前や星座の由来を教えてくれたのを思い出す。

すると俺らと同い年くらいの男性が声を掛けってきた。

「こんばんは、沢渡さん」

「あなたは確か天文台の」

「安曇^{あづみ}つて言います。能登島とは同期で」

「そうですか。で、こんな夜更けに何か？」

「いえ、近くを通つたら姿が見えたので少し話がしたいと」

「もしかして、昂の事ですか？」

思つていた事をそのままぶつけてみた。

「ええ、どうしてそれを」

「近所の人は知らないようですが天文台の職員が知らない訳はないだろうと思つていましたから」

「そうですか、そうですよね普通。実は能登島から周囲に話さないようになつてました。僕ら自身も本当の事は良く知らないでただ現実を見ると昂ちゃんの母親は行方知れずで能登島しか昂ちゃんを守れる奴が居なくて」

安曇さんの話は昂が兄貴の本当の子どもかまでは知らず、ただ東京に奥さんと娘がいる筈なのにと思つていたらしい。

兄貴から話すなと言つてはいたならば仕方がない事だし、仲間としては不要な噂が小さな島で広がるのを恐れたのだろう。

そんな事になれば島を去らざる負えなくなる事態になるかもしれないからだ。

昂が能登島の姓だと言う事は兄貴の籍に入っているのだろう事が容易に想像つくが、美紀さんやお袋にどうやって話すか考えるのは容易な事ではなかつた。

だが判つてゐる事は昂を連れて帰る以外に選択肢が無い事、そこから先は話し合いで決めるか最悪は施設に預ける事になるだろ。つ。そしてもう一つ。

昂は兄貴が生きてゐると思つてゐるのかもしないと告げられた。アンテナの修理中に足場の鉄骨が崩れ兄貴の頭部に直撃し即死の状態で昂に合わせられる状態ではなくそれ故に兄貴が船で帰つてくると思つていたらし。

そこに兄貴とそつくりな俺が船から降りてくれればあの状況も頷くしかなくそれが本当の話なのだらつ。

翌日からサンの散歩と荷物の整理を始める。

昂は兄貴が帰つてきたと勘違ひしているのか泣く様な事も無く近所の子どもと遊びに行つてしまつた。

荷物の整理をしながら俺は昂の母親の手掛かりを探す事になるが、殆ど見つけ出す事は出来ずに時間だけが過ぎていく。

状況を知りたいお袋から電話が掛つてきた。

「ノリ、そつちはどうなの？」

「兄貴の荷物を毎日片づけているよ。まあ几帳面な兄貴だから手間は取らないけど帰りの船はまだ数日先だからね。とりあえず兄貴だけでも連れて帰るよ」

「そう、お願ひね。それと宗の事だから浮氣なんかしてなかつたと思つけど」

「ばーか。真面目を絵に描いた様な兄貴に隠し子でも居て見る腰を抜かすだろ。が。でも子犬が居たけどな」

「あんたと違つて手の掛らない子だつたからね。でも犬は駄目よ怖いし苦手だから」

「判つてゐるよ」

「冗談交じつにワンクッシュョン入れておく。

帰りの船を翌日に控え片付けは大方終わっていた。

仕事の資料などは天文台の方に引き渡し兄貴が使っていたパソコンや必要だと思われる物を段ボールに詰め昂の着替えも少しだけ俺のバックに詰め込んで残つたものは処分してもらう様に頼んだ。

「昂、そのカメラを取つてくれないかなあ」

「……」

昂の近くにあつたカメラを取つても「おう」と声を掛けると昂が俯いて首を横に振つていて。

出会つて間もない所為か少しは慣れていたつもりなのに昂との距離を感じてしまつ。

仕方なく立ち上がり自分で取に行き梱包する。

小さな島だけに家電などは直ぐに引き取り手が決まつたよつだ。

「おはよつ、荷物は片付いたかい？」

「どうも。おはよつ、おまえこます。おかげで面倒をまでもつくり出来ました」

「今日はどうするんだい？」

「殆ど島を見ていないので島内を見て回るとかと」

「そつかり。じゃバイクを貸してあげるから昂ちゃんに案内してもらひな。昂！ おじちゃんのバイクの鍵を持つてきな。沢渡さんに島を見せてあげるんだよ」

「はーーー！」

威勢のいい近所のおばさんに圧倒せられる。

昂が元気よく返事をして近くの民家に飛び込んでいく、それを見計らつておばさんが話しかけてきた。

「こんな事を私が言つのは変かもしぬけど、本当のところ宗さんには本土に家族が居るんだろ。お願ひだから昂ちゃんを泣かせる様な事はしないでおくれ。私達も薄々は気づいていたんだよ、でも昂ちゃんには宗さんしか居ないんだから、本当にお願ひだよ。あん

な良い子の泣き顔なんて2度と見たくないんだ」

「自分に出来る事なら精一杯しますよ。ただ今言えるのはこれだけです。でも、昴の事を一番に考えてやりたいと思います」

「そうだね。そうだよね。家族が居るのな難しいよね」

そこに満面の笑顔でぶかぶかのヘルメットをかぶりバイクの鍵を差し出している昴が駆け寄ってきた。

「ほら、あそこのバイクで行つてきな。遠慮なんかしたら承知しないよ」

「それじゃ遠慮なくお借りします。昴、行くぞ」

「うん!」

昴からヘルメットを受け取り頭に乗せてバイクのエンジンをかける。「ヘルメットのひもはちゃんとしないといけないんだよ」

「はいはい

「もう、おへんじは1回でしょ。それとサンもいっしょ

「へいよ」

注意する時の昴の口調は几帳面で生真面目な兄貴そのものだった。昴がサンを連れて來たので片手で掴んで持ち上げサンの顔を見た。「しかし、子犬の癖に田つきの悪い犬だな」

「かわいいの」

「はいはい

サンをバイクの前に付いているが、に入れリードを手に巻きつけてハンドルを握る。
「乗れ、行くぞ」
「うん」
俺の後ろに乗るのかと思えば昴が俺の腕をぐぐりステップに立ちハンドルに手を置いた。

「いかないの?」
「行きますか」

道なりに進んでいると昴が進むべき方向を示してくれた。

一言で言うと海と山しかない島で僅かな海岸線に集落がへばり付く
よつに点在している。

手付かずの自然と言う物なのだろうか。

流石、小笠原ブルーと絶賛している海は澄んで綺麗だつた。

半日もバイクで走ると島中を見て回れてしまつほど小さな島でのん
びりするには良い所なのかもしれないし、一度来てしまえば1週間
は帰れない島なのだから。

眼下に広がる海に太陽が沈んでいく。

見晴らしのいい展望台には心地良い風が吹いていた。

サンはと言えば大人しく昂の横で伏せている。

珍しい事にサンが鳴いたのを聞いたことが一度も無かつた。

「昂、島に残りたいか？」

「わかんない。でも、おじさんはパパににているけどパパじゃない
んでしょ」

「どうしてそう思つんだ？」

「タバコのにおいがするから」

「そうか、一緒に東京に行つてみるか」

「うん。とうきょうつてこりよりつたのしい？」

「昂、次第かな」

情けない事に6歳の女の子にそんな返答しか出来なかつた。

とりあえず東京に戻りこれから先の事を考えてやらなければならな
いのは確かだけど俺だけで決める事も出来ず。

荷物を後日送つてもうつ為の段取りを決めて俺の連絡先と住所を告
げて島を離れた。

サンは連れて行く訳にも行かず近所の人々が預かつてくれる事になつ
た。

いざ島を船が離れていくと昂に気付いたサンがキュンキュンと必死
に鼻を鳴らしてましたが昂は泣き出す事もなくジッとサンの姿を見つ
めて何かに耐えている様だつた。

毎過ぎに島を出て翌日夕方に竹芝桟橋に到着する。

お袋の話では美紀さんが落ち着いてから葬儀をすると言つ事になつていて兄貴を家に連れ帰るのが最優先だからと言われていた。

昂は船の中でも旅行を楽しむかのようにはしゃぎ回っていたが能登島の表札がある兄貴の家の前に来ると俺のズボンを掴んで俯いてしまつた。

この場に連れて来るべきか迷つたが俺には昂を預かつてもらひるような場所など思いつかないし昂自身もそれを望まないだろつと思つた。

「戻つたぞ」

「「」苦労様。大変だつたでしょ」

「まあな、色々と疲れたよ」

「典ノリ、その子は?」

「とりあえず座らせてくれ。お袋、美紀さんは?」

「奥よ、大分落ち着いたわ。こればかかりはね」

「そつか。行くぞ、昂」

落ち着いたと言つより実感が無さ過ぎてどうして良いのか判りず數日が過ぎてしまったのだろう。

離れて暮らしていた家族にはあまりに突然でなんとも酷な事だと思つ。

すると幼馴染で従妹の春菜がひょっこり顔を出した。

春菜もショックを受けているに違ひないのに普段と変わらないように見えるのは気を張つている所為なのだろう。

「お帰り、典兄」

「春菜か、久しぶりだな」

「まあね。その子つて典兄の彼女の訳ないわよね」

「あのな、俺にはそんな趣味はねえよ。丁度いいや、春菜。可奈と

上で遊んでいてくれないか美紀さんとお袋に大事な話があるんだ

「うん、判つた。可奈ちゃん、お姉ちゃんと上で遊ぼう」

「はーー」

春菜が手伝いに来てくれていて丁度良かつた。
可奈と春菜が階段を上がつていいくのを確認して昴の手を取り美紀さんが待つていてあるうごビングに向かつた。

「兄貴を連れて帰つてきたよ」

「ありがとう、典彰君」

美紀さんに兄貴を手渡すと愛しそうに奥の部屋に運んで行つた。

その間にお袋が冷たい麦茶を入れてくれた。
何から話せば良いのか戸惑つがここまで来たら話すしかない事で、
包み隠さず俺が知りつる」とをきちんと伝えてこれから道筋を立てるしかない。

ソファーに腰を下ろすと昴が俺の横に座り俺のシャツを掴んで俯いている。

「典彰君、その子は誰なの？」

「美紀さん、お袋。」の子は島で兄貴と暮らしていた能登島 昴だよ

よ

「の、典はこんな状況の時に何を言つているか判つて言つているの？」

?

「こんな時じやなきや何時話せば良いんだよ」

「あんたつて子はどうしてそんな子を何の相談も無しに連れて帰つてきたの？」

「それじゃ、どうすれば良いんだよ。昴は兄貴と2人暮らしだったんだぞ」

「だからって何も。美紀さん、大丈夫？」

お袋が心配そうに美紀さんを気遣つている。

「典彰君、それは本当なの？」

「昴が能登島の姓を名乗つていると言つ事はそういう事です。でも、

本当の事は現状では兄貴以外に知る人はいません

「宗と2人暮らしつてこの子の母親はどうしたの？ 可奈と同一年ぐらいの子を置いていくなんてどうせ口クな母親じゃないでしょうけど」

「お袋、昂の前でそんな事を言つのは止めてくれないか。何も判らない今はそんな事は問題じやないだろ」

「何で典彰君がこの子を庇うの？ この子は私と可奈が知らない所で一緒に暮らしていたんでしょ！ 私と可奈がどんなに寂しい思いをしてきたか…… そんな時にこの子は！」

無意識に隣に座っている昂の頭を抱える様に抱きかかえていた。

グラスが割れる音がしてテーブルに真っ赤な血が数滴落ちて白いレースのクロスに沁み込み赤く染めていく。

それはダムが決壊するかのように美紀さんが堪えていた感情を爆発させた瞬間だった。

『この子は』に続く言葉は感情に呑まれて何を言つてているのか判らなかつた。

昂は俺のシャツを握りしめてジッと何かに耐えている。

流れ出る血が左目に入り目を開けていられない。

美紀さんの声とグラスの割れる音に驚いて春菜が2階から駆け下りてきて、俺を見るなり直ぐにタオルを持ってくれた。

「可奈ちゃんは上に居なさい。降りてきちゃダメよ。典兄、大丈夫そうじやないわよね」

「平気だ、ただのかすり傷だよ。夜だし切つた場所が場所だけに血が止まりづらいだけだ」

「とりあえず病院にね」

「そうだな、昂は……」

俺の腕の中に居る昂を見ると小さく怯えながら首を横に振つていてこの場に置いていくのは難しそうだ。

美紀さんはお袋に抱きかかえられて泣き崩れている。

「典、……」

「おふくろ、俺の事は気にしなくていい。義姉さんを頼む。泣きた
いだけ泣かせてやれば少しは落ち着くだろ。一応病院に行つてこ
こに戻つてくるから」

「判つたわよ、勝手に帰るのは無しよ」

春菜が持つてきてくれたタオルで傷口を押さえタクシーで病院に向
かう。

「お大事に」

目の上、丁度眉毛の辺りを切り4針縫われてしまった。

驚いた事に消毒も無ければガーゼも傷口に当てず、流水で傷口を綺
麗にして麻酔をして縫合したらファイルムの様な物を張られ『いらな
いと思うけど』と一言付で包帯を巻いてくれた。

更に驚いたのは風呂に入つて髪の毛を洗つても良いらしい。
医療の進歩と言つ奴なのだろう。

診察室に入ろうとした時に昂が俺から離れずに愚図り看護師さんが
宥め賺してくれた。

治療を終えて診察室を出ると看護師さんが昂に付ききりで居てくれ
たようだ。

「有難うございます。お手数をおかけしました。ほら、昂。看護婦
さんにお礼を言って」

「ね、パパが戻つてきたよ。もう大丈夫だからね」

看護師さんのお姉さんが優しく声を掛けたのに昂の瞳からは大粒の
涙がこぼれた。

「ノンも、 shinjya うの？ あたまからいつぱい血がでしんじや
うの？ いなくなちゃうの？」

昂がしゃくり上げながら泣きじやくつている。

迂闊だつた病院に連れて來た事をこの時ほど後悔した事は無い。
無理にでも春菜に預けて來るべきだった。

もしかして昂は事故現場か事故後の兄貴の姿を見ていたのかもしが

ない。

「大丈夫、パパは死んじゃつたりしないからね」

「だつて！ パパはあたまからいつぱい血をだしていなくなつちゃつたんだもん！」

看護師さんが昴を安心させようと声を掛け、昴の言葉に事情を知らない看護師さんは動搖を隠せないで俺と昴の間を視線が泳いでいる。ゆつくりとしゃがみ込み昴の涙を指で拭う。

「昴、俺は死なないよ」

「ほんとう？」

「ああ、死なない。それと絶対に昴を置いていなくならない、約束する」

「やくそく？」

昴の小さく細い小指を俺の小指に絡める。

「ゆびきりげんまん 嘘ついたら絶対はりせんばん全部飲んでやるゆび切つた」

指切りをした瞬間に昴の小さな体が両手を広げて俺の中に飛び込んできた。

薄暗い病院の廊下に昴の泣き声だけが響き渡った。

こんな小さな体にどれ程の哀しみを押し込めていたのだろう。

突然、目の前からいなくなってしまった父親。

可愛がっていたサンとの別れ。

そして大好きな島の人がない孤独。

昴を抱きしめる手に力が籠つた。

兄貴の家に戻ると美紀さんと可奈は既に泣き疲れて床に入っていた。

そして昴も俺の背中で泣き疲れぐつすりと眠つていた。

昴をリビングのソファーに寝かせその横に腰を下ろす。

目の前には思案顔のお袋が暗い影を落としている。

「で、ノリは昴ちゃんをどうするの？ 可哀想だけど施設に入れた

方が」

「いや、俺が昂と暮らす」

「そんなに簡単に決められる事じゃないでしょ?」

「簡単だよ。昂と約束したんだ、俺は何処にも行かないって」

「あんた、子育てをなんだと思つてているの? 簡単な物じゃないのよ」

「やつてみなきや判らないだろ」

「やつてみて駄目だからなんて訳には行かないのよ」

「それじゃ、お袋が預かってくれるのか?」

「む、無理に決まつているでしょ」

「絶対に施設なんかに渡さないし、昂の母親を探してみる」

「あんたね」

「おばさん。こつなつた典兄は梃子でも動かないわよ」

春菜が俺とお袋の間に入ってくれる。

昔から春菜はこんな感じの役柄だつた。

「典兄は直觀重視の結果オーライの野生児で宗兄は何事も計算ずくで結果を導き出す学者肌だつたからね」

「俺は猛獸か何かか?」

「だつて何とかなるつて思つてているんでしょ? それに典兄の頭の中には保育園なんて頭にないでしょ。典兄が仕事の時に昂ちゃんはどうするの?」

春菜の言葉に返す言葉も無い。

「これから探すさ」

「あきれた。それで良く昂ちゃんを育てるなんて言えるわね

お袋が叩き込みにかかつてくる。

ぐづの音も出ない俺に春菜が何かをプリントアウトした紙を俺の目の前に突き出した。

「どうせそんな事だらうと思つていたわよ。はいこれ、とりあえず典兄の近くの緊急一時保育をしている所だよ。それと私に約束して。きちんと役所に相談に行って保育園を決める事。出来る?」

「ありがとう。悪いないつも」

「素直で宜しい。『ありがとう』って直ぐに言えるのは典兄の良い所だからね」

「しょうの無い子だね。何かあつたら必ず連絡するんだよ」

何も変わらない昔からの構図がそこにあった。

緊急一時保育は保護者の都合つまり出産や病気などで保育できない時に一時的に預かってくれるシステムらしい。

とりあえず一時保育で昂の面倒を見てもうつてている間に正規の保育所を探さなければならない手の掛らない宗一に比べ俺は周りに迷惑ばかりかけて生きてきた。

でも、春菜はどんな時でも手を差し伸べてくれてお袋も嫌な顔をしながらでも必ず助けてくれた。

朝、目が覚めてあんな事があつた家にいる事が判れば昂は怖がるだろしその状態では美紀さんの精神的にも好ましくないだろう。心根は本当に優しい人だから時間だけが何とかしてくれるだろうが兄貴の葬儀が一段落するまでは無理だと思つ。

昂を一番に考えてやる事しか俺には出来ない。だから俺の家に昂を連れて帰る事にした。

アジ、アジ。サンマ～

「ノン、おきて。おなかがすいた」「ノンってばあ」

小さな手で誰かが俺の体を揺り動かしている。

「ん？ 昇か？ おはよつ」

「ノン、おなかすいた」

「あのな、昇。最初が肝心だから言つておくけど俺は典彰とこう名前でお袋たちからは『ノリ』って呼ばれてるけど『ノン』じゃなく『ノリ』だ」

「だつて。ノンとゆびきりした！」

昇が口を尖らせ顔がぞんざく寂しげに見える。

「ん、そんな顔をするな。好きなように呼べ。もうノンで良いから」

「うん！」

一気に昇の顔が明るくなり、内心わざわざつっこむのかと思つてしまつた。

嫌いじゃないが基本的に子どもが苦手で、女なんて何を考えているのか判らない生き物だと思つていて。

そんな俺の隣には最強な生き物が居るのかもしね。

「朝飯か、何にもないな」

1週間ほど家を空けて小笠原から帰つてきた翌日に冷蔵庫の中の食材が生きている筈もなく、どうするか考えてしまつ。

近くのコンビニかそれとも駅前の朝食営業しているファーストフードか……

時計を確認すると10時を回つてゐる。

俺も昇も余程疲れていたのだろう。

昇はそんな事はものともせずに俺の家の中を探検し始めた。

「うわあ、きの家だ。ん〜ん、ノンひらかなによ」

「ほいほい」

縁側にある大きなガラス戸を小さな昂が必死になつて開けようとしていた。

俺の住んでる家と言つのは、今は亡き爺ちゃんが晩年暮らしていきた家で木造平屋建ての一応庭付きの一軒家になつていて。

間取りは2DKと言つた所だらうか独り暮らしには十分な広さだった。

手直しをしながら暮らしているので所々にコツと言つ物が必要になつていた。

鍵を開け窓の桟を持つて軽く持ち上げるようにして開けると軋みながら窓が開き朝とも昼ともいえない太陽が顔を出している。

「うわあ、パパのお家みたいにわがある」

「まあ、猫の額ほどだけだ」

「あれはなあに？ プロツクじゃないの？」

「ああ、生垣だよ。ここじゃ小笠原みたいに年に何度も台風が来ないからな。それに生垣の方が風通し良くて涼しんだよ」

「ふうん。あ、ノンけいちなつてるよ」

「おう」

携帯を手に取り見ると春菜からだつた。

寝起きの頭にハイテンションな春菜の声が響く。

「典兄、おはよー。久しぶりにデートしよう」

「デート？ あのな、彼氏の海自のタフガイはどうした？」

「昨日から訓練でしばらく会えないんだもん。もう駅前で待ってるから」

「はあ？ おい！ 切りやがつた」

昂を着替えさせ俺もジーパンにパークーを着てと思つてると昂がきちんと正座をして何かを見ていた。

「ノン、これなあに？」

「それは音楽を聴く機械だよ。俺の爺ちゃんが大切にしていたレコ

「一ノ瀬を聞くんだよ」

「ノンのおじいちゃんのせい？」

「やう、だから触るなよ」

「うん」

興味津々で正座までして昴が見ていたのは真空管アンプとレコードプレーヤーだった。

それにも昴はきちんととしているとまづかともしつかりしている。

兄貴と暮らしていた所為だらうか。

駅前に着くと春菜がトレーナーにサブリナパンツ姿で手を振っている。

そしてあらう事か春菜に隠れるよひに可奈が一緒だった。

「春菜、何を考えているんだ、頭が痛くなってきたぞ」

「ええ、典兄を買物に誘つておばさんに言つたら可奈ちゃんも連れてきて。どうせ遅かれ早かれ顔を合わすんだからって、悪いのは宗兄で子どもたちに罪はないからって」

「どう説明するんだよ。腹違いの姉妹なんだぞ」

春菜に小声で言つと直ぐに切つて返してきた。

「典兄に任す」

「丸投げかよ！」

「とりあえず、可奈ちゃんも私も朝ご飯未だなんだよね」

「せつくりそのままお返しするよ」

「どうせ典兄の事だから近くのコンビニか朝マックで済ませる所だつたんでしょ。食べるなら可愛い女の子に囲まれてた方が美味しいでしょ」

「俺、女苦手だしつて。痛つ！」

春菜と昴に絶妙なタイミングで脛を蹴られた、それを見て可奈が笑っていた。

早朝から開いているファーストフードで朝飯にする事にした。
駅前の立ち食いソバを押してみたが3人に速攻で却下されてしまった。

まあ、弱冠1名興味を示した小さい奴が居たけど春菜に丸め込まれた様だつた。

事情を知らない可奈が同じ年ぐらいの昴の事が気になるらしい。

「ノリ、その子つて一緒に可奈のおうちにきた子でしょ」

「そうだよ、可奈。可奈とは凄く近い親せきになるかな。同じ年だから双子の姉妹みたいな感じかもな。苗字も同じだし」

「そうなんだ。私、可奈。よろしくね」

「うん、私は昴だよ」

「へえ、変わったなまえだね」

「星のなまえなんだよ」

「ふうん」

昴はとても感が良く頭の良い子だつた。

昨日の時点で何かを感じ取つていたのかもしれない。

子どもは難しい事を説明する言葉は知らないけれど噛み碎いて教える事できちんと理解してくれる。

俺ら大人が考えている以上に色々な事に気づき考へているのだろうと昴と一緒に過ごした僅かな時間ですらそんな事を感じ取る事が出来た。

島育ちの昴が恐らく初めて見るマフィンサンドを不思議そうな顔をして見ていると可奈がお姉さんぽく食べ方を教えていた。子どもつてつづく凄いと思つてしまつ。

「で、買い物データーなのか？ 子連れ同士で」

「それじゃ典兄は昴ちゃんの洋服のサイズを知つているの？」

「宜しくお願ひいたします。春菜様」

「苦しゅうない、良きに計らえ」

「まあ、たまには春菜の服でも買つてやるよ。それが本命なんだろ」

「やつたー」

従妹の春菜は宗一と俺にとつて幼馴染だつたがそれ以上に妹の様な存在だつた。

そんな兄と慕つていた片割れの宗一が未だ30にしてこの世を立てしまつた、春菜も寂しくないはずがないのは俺が一番判る事だつた。

4人で駅前にある大型衣料品店に向かつ。

仕事柄で言えば敵に塩を送る様な感じになるが背に腹は代えられず俺が普段着にしているのも殆どがこの系列会社のカジュアルウエアだつた。

「春菜、洗濯が面倒だか多めに選んでくれよ」

「はーい」

春菜・昴・可奈が楽しそうに洋服を取つ替え引っ替え選んではかごに入れている。

実際問題としては昴と2人で来ていればこいつはならなかつただろう。昴と可奈は本当に姉妹の様にはしゃぎ回つてゐる。

大きくなつて本当の事を知つても仲良くなつていてくれる事をただ願うしか今は出来なかつた。

春菜にワンピースを買つてやり女の子が好きそうなカフェに來ていた。

昴と可奈は楽しそうにお喋りしている。

都会を殆ど知らない昴にあれこれと教えてあげていると言ひ感じだが本当に姉妹の様だつた。

「凄いね、子どもつて」

「そうだな、だけど本当の事を知つた時にはどうなるのかな」

「それは私達次第じやない。まあ、美紀さんによる所が大きいと思うけど」

「それは心配ないと思つた」

「何で典兄がそんな事を言いきれるの?」

「あん? だつて宗一が選んだ嫁さんだぞ」

「そつか、そうだね」

「しかし、居づれーなここは」

「うふふ、ノンちゃんんだもんね」

「つるせえ」

まあ、後日何で俺がノンなのかなんとなく判るのだが……
パステルカラーで統一されたような店内で春菜とチビ2人は問題ないが体の大きな俺が浮きまくっていた。

「そう言えば昴ちゃんはお家で何をして遊んでいるの？」

「んど、えほんをよんだりぬいぐるみであそぶの」

「へえ、本が好きなんだ」

「うん」

俺の殺風景だつた部屋には昴の荷物として送つた本や小物が彩りを添えはじめていた。

春菜と可奈と別れて昴の布団を買つてとりあえず自宅に戻り荷物を部屋に放り込む。

「疲れた」

「ノン、おなががすいた」

「つて、お~い。昴。さつきあんなにパフェやら何やら食べてただ

るつ

「だつてあればご飯じゃないもん」

「判つたよ、そんな顔するな。冷蔵庫には何もないから買い物に行

くぞ」

「うん！」

駅前まで再び出る事になつた。

家から出ると昴が俺の手を掴んだ、何でも外は危ないからと春菜に教わつたらしい。

俺が危ないのか？

駅前のスーパーでとりあえず野菜などをかごに入れる。

「なあ、昴は何が食べたいんだ？」

「おさかな」

「へえ？ 魚？ ハンバーグとか鶏のから揚げとかじゃなくて」

「うん、おさかながいい」

昂のリクエストに答えて鮮魚コーナーに行くと旬の魚からお刺身まで色々と綺麗にパック詰めされて並んでいる。

「どれが良いんだ？」

この時期で言えばサンマか、アジの開きなんかも良いかもしない。しばらく昂がショーケースの中を覗き込んで少し残念そうな顔をした。

「いらない」

「はあ？ 魚が良いんだろ」

何も言わずに昂が小さく頷いた。

仕方なく今日のメインになるであろう魚以外の買い物を済ませて駅前通りにある商店街に向う。

確かにここに魚屋があつたはずだ。

ガラスのショーケースの前に発泡スチロールに氷が入れられ沢山の魚と値札が付い並んでいる。

それを見た途端に昂の目が輝き始めた。

それは決してスーパーの鮮魚がどうと言つ意味ではなく。多分、島ではこんな感じの新鮮な魚を食べていたのだ。

「どれにする？」

「え？ わたしがえらんでいいの？」

「良いよ、昂が食べたいんだから」

昂が魚を覗き込むように見ていると店主らしき人が出でた。

「らつしゃい。へえ、お嬢ちゃんが日利きをするのかい？ 今日は良いサンマが入ってるよ

昂が俺と同い年くらいの店主の声なんか耳に入らないくらいの勢いで魚を覗き込んでいる。

「これが良い」

「へえ、感心するね」

「だつてこのこたちが一番きれいだもん」

「よつしや、とつておきの天日干しのアジの開きなんかどうだいつて、お嬢ちゃんが買つ祝じやないか」

店主がバツの悪そうに頭を搔いて俺の方を伺つていた。

「それじや、昂が選んだサンマを2尾とお燶めのアジの開きを2枚お燶めなんですね」

「当然でしょ。こんな田利きのできるお嬢ちゃんに嘘はつけないよ。脂がのつていてサンマもアジも最高だよ」

「それじや、帰つてから七輪で焼こうか」

「へえ～ 今時七輪なんて風情があるね」

「サンマは七輪でしょ。まあ、死んだ爺さんの受け売りだけじね」

魚屋の店主が腕組みをしてしきりに感心していた。

だいぶ日が傾いてきたので早めに帰る事にする。

「アジ、アジ。サンマ～サンマ、サンマ。アジ～」

「そんなに魚が好きなのか」

「うん、おさかなはね たべるとあたまがよくなるんだよ」

「そりなんだ。まあ、何事もバランスが肝心だからな」

「ふうん」

「昂はサンマの苦い所とか大丈夫なのか?」

「うつ、ちゅうときらいだけどおばさんやパパがちゃんと食べなさ

いって」

「そつか、じや今日は苦いの抜きで。俺も苦手だし」

「ほんとう～」

「本当、本当」

家に着くまで昂はアジとサンマの歌が何かをずっと口ずんでいた。

爺さんが使つていた七輪を縁側にひっぱり出してきて炭に火をつけ
てみる。

まだ、現役でバリバリに使えそうだった。

俺が台所で食事の支度をし始めると昴が隣から覗き込んでいる。

今まででは時々だが独りで作っていたので何だか昴の視線が「こそばゆい。

サンマの頭の所にぐるりと切り込みを入れ、中骨を切りエラの下も切つておく。

そしてお尻の穴の手前にも切り込みを入れて頭を引っ張ると頭と一緒に内臓が綺麗に出てきた。

「うわあ、すごい」

昴が驚いた様に感心している。

たしか何とか家の食卓か何かでやつていた裏ワザだか何だかだと思う。

「昴も手伝つてみるか？」

「ええ、いいの？ パパはまだ小さいからダメだつて」

「まあ、包丁や火は危ないから駄目だけどそれ以外なら大丈夫だろ」

「うん！」

物置に七輪と一緒に置いてあつた踏み台を持ってきてサラダ用のレタスを千切つてもうう。

「できた」

「それじゃ、トマトとキューリを洗つて」

「うん」

今は俺に出来る事を最大限してやるしか無いようだ。

これからは昴が居るのだし食事もきちんとしたもの食べさせてやりたい。

お袋がたまに顔を出してその度にきちんと食べなさいと、乾物や日持ちのするカボチャやジャガイモなどの野菜を置いていくので取り敢えず鍋で出汁なんかを取つてみる。

「昴。焦げでないか？」

「うん、だいじょうぶ」

昴は縁側でサンマの番をしている。

七輪には少量の炭しか入れてないので脂がたれて火がついてもサンマが焦げる様な事は無いはずだし、昂にも絶対に覗き込むなど教えである。

「ちゃんと見ておかないとザザエさんのがになつちやうからな」「うん」

「どれ。おお、良い感じに焼けてるじゃんか」「おいしそうだね」

「絶対に美味しいぞ」

晩飯はメインがサンマの塩焼きでかぼちゃの煮物とサラダ。それに味噌汁とご飯になった。

「「いただきます」」

「ああ、ノンはちゃんと手をあわせないとダメなんだよ」「はい、すんません。まるでお袋みたいだな」

「ひじもつにちやダメ」

「重ね重ね、すんません」

子どもの頃を思い出す。

宗一と暮らしていた昂を見る限り宗一はお袋の言ひつけを忠実に守つて生きてきたようだ。

それに対しても反対して俺は反抗し続けてきた。

そんな俺が昂を育てていけるのか一抹の不安が過つた。

サンマの身を開いて小骨と中骨を取り除いてやると昂は器用に箸でサンマを小さな口に運んでいる。

昂は凄くしつかりしている子なんだと実感した。

昂と風呂に入り髪の毛を乾かしてやつて寝かしつける。

自分の布団がよほど嬉しいのかはしゃいでいたが横になると遊び疲れのまま寝たのか直ぐに小さな可愛らしげな寝息をたて始めた。

昂が寝たのを確認してパソコンで春菜からもらった紙を見ながら緊急一時保育を行っている所を調べ始める。

はつきり言つと少ないし迷つてしまつ。

近くの場所は時間がきつちりしていて融通があまり聞かず。融通が利く場所は職場から遠回りになる場所だった。

しかし、現時点では俺は残業が殆どないと言つかしないので近くの保育所にお願いする事にした。

その方が昂にも俺にも良いだろう。

あの出勤ラッシュに昂を巻き込むことを考えただけでぞっとしてしまつ。

「ノン、おきて。おくれちゃう」

「ふあい、ありがと」

いつもより一時間早い朝だ。寝ぼけ眼を擦りながら洗面所に向い顔を洗う。

「昴？ 何しているんだ？」

「おにぎり…」

「ふえ？」

台所を覗くと昴が小さな手で形は色々で大きさも図々だけど一升懸命におにぎりを作っている。

「あのね、島のおばさんがおしえてくれたの」

「そつか、じや卵でも焼くか。玉玉焼きと卵焼きせどしが良いく？」

「たまご焼き」

昨夜の残りの味噌汁を温めなおして卵を割りほぐして卵焼きを作る。これからはこれが日常になつていいくのかななんて思つてしまつ。

そんな事を考えながら朝飯を食べてスースに着替える。

昴は既に着替えが済んでいた。

「なあ、昴。お前ちゃんと自分の布団で寝てた？」

「ねてたよ」

「おかしいな、子猫かなんかと寝ている夢を見たよ」

「ねてたもん。おくれちゃう」

急に怒りだして体を上下にゆすって早くと体で表現していく。

「はいはい」

「返事は一回…」

急いで連絡を入れておいた保育所に向かう。

保育所に近づくにつれて子ども連れのお母さんの方の姿が田につく。田の当たりにすると異世界に迷い込んだような感覚に陥る。

俺が知る筈も無い世界の雰囲気に呑み込まれて途方に暮れそうになつた。

「ノン、おくれちゃうよ」

「ああ、やうだな」

すると若い保育士の女の子が声を掛けて来てくれた。

「おはよひじやこます。能登島 昇ちゃんですよね」

「あ、はい。宜しくお願ひします」

「じゃ、昇ちゃん。お部屋に行こつか」

「う、うん」

昇が不安そうな顔をして俺の顔を見上げている。

「そんな顔をするな。時間には迎えに来るから。約束したろ」「うん！ ノン、いつてらっしゃい」

「じゃな」

昇の頭をなでてやると嬉しそうに手を振つて見送つてくれた。何だか新鮮な気持ちにさせてくれる。

その反面、不安が過る。

皆と仲良くできるのか？

苛められたりしないだらうか？

泣いたりしないよな……

仕事中も昇の事が頭から離れなかつた。

今日は朝一で営業ミーティングがある日だつた。

「沢渡君、大丈夫かね」

「ご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした」

「まあ、その分は営業成績でカバーしてもらえばいいから」

「はい」

直ぐに営業成績の報告書を各自が提出して部長が目を通していく。俺に対する視線は相変わらず冷ややかで営業成績ですら今回も冷ややかな結果になつてゐるに違ひない。

「野田と沢渡は何とかならないのか？」 野田は新卒とは言え半年が

過ぎようとしているんだぞ。それと沢渡。お前も相変わらずだな
周りから失笑が漏れている。

野田は今年の大卒の新入社員で営業成績が伸び悩んでいる。
下手をすればこのまま辞めてしまうかもしれない状況なのは俺が見
ても判る状態だった。

午前中はお得意様回りをして会社に戻り社員食堂で昼飯を食べ、喫煙
コーナーでコーヒーを飲みながら煙草を吸うのが習慣になっていた。
煙草を咥えライターを手に取ると昂の顔が浮かんできた。

昂の事を考えると俺がこんな体たらくで良い訳がない。
が、成績を上げようとすれば必然的に仕事量が増え相手先との付き
合いも増える事になる。

そうなれば残業をし時間外で接待せざるおえなくなる。
子育てと仕事の両立がこんなにも大変だなんて考えた事すらなかっ
た。

皆どうやって生活しているんだ?

「パパとは匂いが違うか……」

昂の言葉が脳裏をかすめる。

咥えた煙草を口から外し残りの煙草と一緒に捻りつぶしてゴミ箱に
投げ捨てコーヒーを口にする。

「どうしたの? 沢渡君。煙草なんて捨てちゃって」

「ああ、熊谷さん。俺、煙草を止めようかと」

「ええ! 本気なの? お兄さんの事でかな?」

「まあ、それもありますけど。事情があつて6歳の女の子と暮らす
事になつたんですよ」

「ええ! それって沢渡君が育てるって事?」

「まあ……」

熊谷さんは俺ら営業の先輩にあたる女性で、小柄な体に似合はず女
なんて感じさせないくらい男に負けじと営業に駆けずり回り俺ら後
輩の面倒も良く見てくれた。

でも、子どもが生まれたのを機に営業から外れ今は契約社員として営業部のサポートとして事務処理などをしてくれている。

熊谷さんが営業部を離れる時には結構な騒ぎになり。

サポートならと条件付きで契約社員として復帰してくれた。

俺も入社したての頃には良く尻を叩かれたもんだった。

「で、いきなり壁に突き当たつたって顔をしているよ」

「熊谷さんには敵わないな。一緒に暮らす事になつた子は昴つて言うんですけど。昴の事を考えるとこのままじゃいけない気がするんだけど、営業をがんばれば残業や接待が増えてくるわけだし。そうすると昴に寂しい思いをさせる事になるしあ互いに何かを我慢して犠牲にしなきゃいけないのかなんて」

「そうだね。でもそれじゃ子育てなんて出来ないと思つよ。我慢や犠牲を続けたらお互いにつぶれてしまつと思つ。その為にはパートナーが必要なんじゃない？」

「パートナーですか……熊谷さんは知らない訳じゃないですよね」

「うん、知つているよ。沢渡君の成績が芳しくない理由も恋人も作らうとした理由もね」

「じゃあ」

「だから仕事のパートナーを作りなさい」

「仕事ですか？」

「そう、居るでしょ。入社したてのあなたにそつくりな男が。あなたが変わられたのは誰のおかげなの？」

「それは中田先輩が俺を」

「でしょ、中田君はもういないけどその思いや考え方はず渡君が受け継いでいるんじゃないの？ 周りを変える事は難しい、でも自分を少しづつ変える事は出来る。そうすれば自然に周りも変わってくると思うけどな」

「少し考えてみます」

「悩んでも何も変わらないぞ。行動あるのみそれが沢渡典彰の信条じゃないの。頑張れ！ 私はいつでも君の味方だからね」

「ありがとうございます。それこれからも相談に乗ってください。
子育ての事とか」

「あはは、任せなさい」

熊谷さんが腕を腰にあてて豪快に笑っている彼女には凄く安心感がある。

それは公私ともに充実しているからなのだろうか。

定時に上がろうとすると声を掛けられた。

「沢渡さん。飲みに行きませんか？」

「今日もか？ 悪いがしばらく飲みに行くのは無理だな」

「ええ、断る事を知らない沢渡さんが飲みを断るなんて」

営業なんて仕事は目に見える成績で優劣がつけられてしまつ。
ある意味学校と同じような場所だと思つ。

そして学校と同じように成績が良いだけで人を見下す奴もいればそうでない奴もいる。

成績が冷ややかな俺にでも成績を抜きに付き合つてくれる仲間がいる。

「そう言えばお前の所つて2人目が産まれるんじゃないのか？」

「ええ、もう直ですよ。だから母ちゃんに尻を叩かれまくりですよ。
成績を上げろつて、生命保険やらなんやら結構大変すから」

「生命保険か」

「それに学資保険もね」

「それって進学の時とかについて奴か？ まだ小さいのに」

「あのね、沢渡さん。小さい時からじやなきや意味がないんですよ」

「大変だな、パパになるのも」

「でもね、子どもの笑った顔を見るとそんな事なんて一発で吹き飛びますよ」

「そつか、悪いが先に帰るぞ」

「お疲れ様です。飲むときは声を掛けしてくださいよ」

「おう」

嬉しそうに田を細めて子どもの事を話す同僚の笑顔が頭に残った。
そんなあいづからは我慢や犠牲なんて全くと言つて良いほど関係ない言葉に思えた。

保育園に昴を迎えて行くと直ぐに昴が飛び出してきた。

「大人しそうだから少し心配していたけど良い子でしたよ。でも、

お父さんと一緒にいる時の笑顔が一番だね」

「昴、帰ろうか」

「うん！」

若い女の保育士さんの言葉が何だかむず痒かった。

翌日、思い切つて水野課長に声を掛けた。

「課長、野田を俺に預からせてください」

「おいおい、どう云う風の吹き回しだ」

「実は……」

昴の事もこの際だから全て話しておいた方が良いと判断した。
会社には昴を扶養家族として既に届を提出してある。

遅かれ早かれ聞かれるはずで早いうちに聞いておいてもらつた方が
何かと都合が良いし、水野課長は俺が一番信頼している上司だし今
まで俺の事を庇い続けてくれた人の1人だ。

「どうか、そんな事が

「はい」

「本気なんだな」

「中途半端な気持ちで一つを育てようなんて思つていません」

「どうか、部長には俺から事情を説明しておくれよ」

「ありがとうございます」

「でも、これだけは言つておく。今まで沢渡がしてきた事に対して
営業部内に反感を持つている奴も少なくない。直ぐに協力なんてしま
てくれないだろ？ それだけは肝に銘じておいてくれ」

「判りました」

俺は野田を連れて営業に回つた。

朝のミーティングで営業部内に俺が野田と組むことが全員に伝達さ
れた。

課長の言葉通り良い感情を持つている奴は殆ど居ないようだ。
それも当然の事と言えばそうに違いない。

窓際の俺と新人の野田は営業成績ではワーストワンかツーを行き來
していたのだから、そんな2人が組んで今更どうするくらいにしか

思えないのは仕方がないのか。

そんな営業部の中でも課長だけはこんな2人にも期待をしている様だった。

野田に聞かれた質問には答えるけど何かを教える様な事はしない。中田先輩も同じように俺を営業に連れ回し、先輩の全てを曝け出してくれた。

そこから何を学ぶかは本人次第だ。

野田の事も分け隔てなくバックアップしていた熊谷さんの言葉が俺を後押しする。

そしてそろそろ昴の保育所を決めなきゃいけない日が近づいてきた。何故だか昴が朝から俺にべつたりと纏わりついていた。

「昴、早く支度しろよ」

「うん」

「どうしたんだ？ 何処か具合でも悪いのか？」

俺の問いに昴は首を横に振った。何処となく昴の瞳が潤んでいて顔が少し赤くなっているのを朝の忙しさで見落としてしまった。

午後からの営業回りの予定を野田に説明している時に携帯が鳴った。

「沢渡先輩、どうしたんですか？」

「保育所からだ」

「へえ？ 保育所？ 先輩つて子持ちだったんですか？ たしか独

身じや」

そんな野田の言葉が吹き飛んだ。

昴が熱を出したらしい。

子どもの平熱は基本高いほうで午後になると更に高くなるので少し様子を見ると伝えられ、更に熱が上がれば直ぐに連絡するとの事だつた。

心配で仕方なく仕事に身が入らない、営業にとつてそれは一番いけない事なのだが流し仕事しか出来ていないのを自分自身が一番感じた。

野田には申し訳ないが事情を説明している余裕なんて今の俺には何処にも無かつた。

定時に帰社して翌日の予定は連絡するからと報告書を野田に丸投げして保育所に向かつた。

「遅くなりました。昴は」

「ああ、昴ちゃんのお父さん。少し熱が下がったみたいなので連絡はしませんでしたけれど一応病院にお願いしますね」

「判りました。昴、帰ろうな」

「うん」

昴が力なく俺の脚にしがみ付いた。

「子どもは体調を崩すと普段甘えない子でも甘える事がありますので見逃さないで上げてくださいね」

「すいませんでした」

「昴ちゃん、またね」

「うん、バイバイ」

病院に昴を連れていくと軽い風邪だらうと医者に言われ薬を受け取つて家に戻つてきた。

消化に良い物をと思つてウドンと昴が好きな魚をと思いカレイの煮つけを作つたけれど箸が進まないようだつた。

「ゴメンね、このへんがへんで…… ゲホ

いきなり昴が喉の辺りを触り食べた物を吐き出してしまつた。

慌てて汗を拭いていたタオルで受け止め慌てて風呂場から洗面器を持つてきた。

「ノン……」

「気にしなくても大丈夫だよ。薬、飲めるかな?」

「のみたくない」

「でも、少し飲んだら楽になるからね」

「うん」

医者が出してくれた飲み薬を飲ませるが直ぐに戻してしまつ。

どうしていいものか困り果ててお袋に電話すると何でもうと早く連絡しないのかと激怒されてしまった。

それでも子どもの頃の俺たちにしていた事を教えてくれた。

「薬はジューースに混ぜたらあんた達は飲んでくれたわよ。それと温かくして寝かせなさい」

「判ったよ」

やつとの事で薬を飲ませ昂を寝かしつける。

顔は赤くなり息苦しそうに呼吸をしている。

冷やしたタオルで顔を拭いてやるくらいしか出来ない自分が情けなかつた。

久しぶりの本格的な営業回りを始めたばかりで俺自身も疲れていた様で、気づかない間に昂の横で寝てしまったようだ。

どれだけ時間が過ぎたのだろう。

まるでストーブや焼けた炭を抱いているような感じがして目が覚めた。

目の前の昂がとても苦しそうにしていて呼吸は浅くそして早い。体を触ると信じられないくらいに熱くなつていてべつたりとして力が無い。

掛け布団で昂の体を包み込み、氣付くと家を飛び出していた。

携帯でタクシーでも呼べば数分で来てくれるだらうが気が動転してパニックになり、大通りに向かつて走つていた。

大通りまであと少しと言つ所で前方の暗がりで男の罵声と女の叫ぶ声が聞こえてきた。

「金だよ、金をよこせ」

「駄目よ、これは大事なお金だから」

「つるせ！ 旦那が渡せと言つてているんだ。サッサと渡しやがれ！ 犬も食わない夫婦喧嘩なんかに係わりあつてている暇はない。昂を病院に連れて行くのが最優先だ。

通り過ぎようとした瞬間に男が拳を振り上げた。

女の体が俺の方に倒れる様に崩れ、思わず女の体に手を回して支えてしまつた。

すると殴つた男が俺の顔を見て顔を引き攣らせている。

「な、なんだ貴様。ただの夫婦喧嘩だよ」

そう言つて後ずさりをしながら路地に走りだして姿が見えなくなつてしまつた。

俺が支えている女の格好は流石にここ数日の晩は冷えると言つて薄手の紺色のワンピース姿だつた。

泣きつ面に蜂とも言つべきか右手には苦しそうな昂が、そして左手には氣を失つてゐる見ず知らずの女が……

途方に暮れそうになると大通りから空車のランプをつけたタクシーが俺たちのいる路地に入ってきた。

大通りで客をおろしターンしようとしていたのかもしれないが女を引き摺るようにしてタクシーに縋り付いた。

「どちらまで

運転手が怪訝そうな顔でミラー越しに俺を伺いながら声を掛けた。

当然と言えば至極当然の事だつ。

夜遅くに意識の無い女と布団に包まれた子どもを抱いてタクシーに乘ろうとしている人間なんて世界広しと言え映画の世界じゃあるまいしあり得ないのだから。

行先を告げようとした時に女が気づいた様だつた。

女の顔を覗き込み俺は息をのみ胸の奥が締め付けられるような感覚になるが、直ぐに腕の中の熱が俺を現実に戻してくれた。

「あの、大丈夫ですか？」

「あなたは誰？ 私を何処に連れて行く気なの？」

「勘違いするな、俺はただ」

女と目が合うと狭い車内で女が後ずさりをして逃げ出そうと慌てだした。

すると運転手が強張った顔で無線機を手にした。

ここで警察なんかに連絡されたらとんでもない事になつてしまつ。そんな状況で俺が大声を上げれば收拾が付かなくなるのが目に見えた。

「頼むから病院に行つてくれ。その後なら警察なり何処にでも行く。頼む」

「病院？」

懇願するしかなかつた。

俺の言葉に女が直ぐに反応して俺の腕の中で苦しそうにしている昂に気付き昂の首筋に手を当てた。

「凄い熱じやないの、直ぐに病院に。運転手さん早く」

病院に着くと女が俺の腕を掴んで病院の緊急窓口に行き子どもの急患だと告げる。

診察室に入れられ状態と経過を説明させられた。

軽い脱水症状があり直ぐに点滴が投与され、体を冷やすために腋の下や首筋にタオルで包まれた氷嚢が当てられている。何もかも初めての事で戸惑いどうして良いのか判らず落ち着いていける事なんて出来ない。

しばらくすると昂がうつすらと目を開けた。

「昂、大丈夫か？」

俺の声が聞こえた為ではなく投与されている薬が効いてきているのだろう。

力なく再び目を閉じてしまった。

呼吸はいくらか楽になつたのか小さな寝息が聞こえる。

それだけで全身が脱力してしまつ。

「ちょっと、来なさい」

「な、何を」

女が俺の腕を掴み昂が寝てている処置室からひんやりとした廊下に引張り出されてしまった。

「あなたがあの子の親なんでしょう」

「まあ、一応」

「一応つてあなたね！」

「それぞれの家には事情つてもんがあるんですよ。あなたが旦那に殴られたように」

頭に血が上つていたのに彼女の顔を見てクールダウンして一気にマイナスの世界まで落ちてしまった。

「すんません、言い過ぎました。それこそ事情つて奴ですね」

哀しそうな彼女の顔が少し落ち着きを取り戻している。

「私こそごめんなさい。でも伝えておきたい事があつて。子どもに何かあつた時は大人が狼狽えちゃいけないんです。落ち着いて大丈夫だからつて言つてあげないと」

「無理す。あんな昂を見たのは初めてで」

「大丈夫、出来ます。子どもは本能的に誰が助けてくれるか判るんです。これは弱い子どもが生き抜くために持つてている力だと思います。昂ちやんでしたつけ、昂ちゃんはあなたに助けを求めているんです。そんなあなたが狼狽えていたら昂ちゃんは不安になるばかりじゃないですか。違いますか」

「はい」

「私もあなたの家庭の事も事情はよく知りません。でもあなたが昂ちゃんを病院に連れてきたと言う事はそう言う事なのでしょう。だったら尚更です、昂ちゃんにはあなたが付いていてあげれば大丈夫なんですね」

「ありがとうございます」

「それともう一つ。熱が体にこもつて何も受け付けない時はスポーツドリンクを凍らせて小さく碎いて食べさせてあげると良いですよ。ただし体が驚いてしまうので少しずつね」

彼女が言う所の俺が昂を病院にと言つるのは恐らく母親がいないと言う事をさすのだろう。

しかし、見れば見るほど彼女は彼女に似ていた。

すると看護師さんが彼女に声を掛けた。

「さあ、次はあなたの順番よ」

「え、私は別にどこも悪くないです」

「その顔の傷はどうしたのかしら?」

「これは、その」

彼女が思わず口ごもってしまった。

看護師や医者に『不注意でぶつけた』と言い訳しても直ぐに見破られてしまう事を知っているのだろう。

すると看護師の矛先が俺に向いた。

「まさか、つて事は無いわよね」

看護師の冷たい視線が俺に突き刺さる。

思わずホールドアップして首を横に振るしか出来なかつた。

「彼はただの行きすりの人よ。旦那に殴られたところを助けてくれたの。この際だから診てもらつて診断書でも証拠にもらつとくわ」
彼女が静かにそう言いながら看護師さんと診察室に入つていく後姿を見送つた。

家に帰つて来る頃には日付が変わつていた。

教わつた通りにスポーツドリンクを製氷皿に半分くらい流し込んで凍らせる。

「ノン」

「台所だよ」

昴が弱弱しい声で俺を呼ぶ声が聞こえて部屋に行くと薬が効いて少し眠れたのか顔の赤みも少し冷めている様だつた。

布団の横に腰を下ろすと昴が小さな両手を広げて俺の顔を伺つていい。横になると昴が抱き着いてきた。

「ノンがつめたくてきもちいい」

「うわあ、俺つてこのまま……」

今更ながらスエットにTシャツ姿で夜中に駆けずり回つていた事に

気が付いて凹んでしまう。

そりや、タクシーの運転手があんな顔をする訳が理解できる。

昴の体は心なしか熱が取れて温かく感じる。

それでも波の様に何度も熱が上がり水分を補給した為か汗をかいてその度に洋服を着替えさせ凍らせたスポーツドリンクを『える。そんな事を一晩中繰り返した。

熱を出しただけで小さな子どもの体力はあつと『う間に消耗してしまう。

そんな昴を見るたびにどうして俺じゃないんだと辛くなる。

翌日になると口数も増え食欲も出て来たようだ。

心配性のお袋に連絡を入れると食欲が出ていたら安心だけど油断は禁物だと釘を刺された。

おかゆや消化に良い物を食べさせ薬を飲ませて昴と共に横になる。すると昴が俺の左目の上にある傷跡を触つてきた。

「いたい？」

「もう治ったから痛くないよ。それにこれは昴の所為じゃないだろ」「でも」

「でももへつたくれもないの。この傷は誰も悪くないの。いいね」「昴と兄貴を連れ帰った日にグラスで出来た傷は思つたより早く抜糸が出来て、その後は消毒すら必要ないからと言われた。

新しい傷の所為か時々痒くなる時がある、当然の事だけど痛むことは無かった。

会社にはもう一日休む事を告げて野田には何かあればいつでも連絡する様に伝えてある。

まだ覚束ないが大丈夫だと思つ、これからが俺も野田も正念場だと思いなおす。

流石に寝不足が続き、いつの間にか寝入つてしまつたようだ。

昴の声が遠くから聞こえる。

「ノン、あせだよ。おくれちやつよ」

「ふえい？ 鼻、大丈夫なのか？」

「うん」

「どれどれ」

鼻のおでこを触り首筋に手を入れて体温を感じよいつとすると鼻が怒り出した。

「もう、そんなにさわらないで。お腹がすいたのー。」

「じめんな」

「ノン、はやくじはん」

「はいは一回だな」

「うん」

こんな小さくても女の子は女の子なんだと実感する。

ベタベタと男の俺に触られるのが恥ずかしかったのだりつ。

「ノンのかお。きたない」

「き、汚い？」

「うん、おひげがはえてる」

手で顎を触ると無精髭が伸びている。

鼻に汚いと言われ衝撃を受けながら洗面所に行くと鏡の中に濃いおつさんの顔があつた。

「ノン、朝じはん」

「はいはい」

「もう、はこは一回でいいの」

ふおつとケーキ

一時緊急保育の期限内に何とか保育園が見つかり昴と実家に向かっていった。

「ノン、パンケーキが食べたい」

「パンケーキ?」

「うん、みつちゃんがおやつに食べてみたいしかつたって」

「みつちゃんつて保育園の?」

「うん」

みつちゃんは保育園で仲良くなつた女の子のじゅくとの会話の中で時々名前が出てきた。

「パンケーキってホットケーキの事だぞ」

「ふおつとけーき?」

「そつ」

確かにホットケーキを綺麗に焼くにはフライパンを温めてから濡れ布巾に置いて一度温度を下げて焼くのがコツだつたはずだ。ホットプレートがあれば楽なのが家にそんな物は存在しなかつた。実家か兄貴の家にならあるのを憶えてい。

お袋がたまには帰つて来いといつたのを思い出し実家に向かう事にした。

島育ちの昴は電車が珍しいのか電車に乗るのを楽しみにしてる節がある。

兄貴と昴を島から連れて帰つてきた時も確かそつだつた。

今も俺の隣で窓の外を流れる景色を楽しそうに見てい。

「なあ、昴。保育園用のお弁当箱とかを買わないといけないのだけどあの熊のキャラクターで良いのか?」

「くまじゃないもん、ねこだもん」

「ええ、その昴が持つているぬいぐるみつて猫なの? どう見ても

田つきの悪い熊にしか見えないぞ

「ねこのマノンだもん」

「ま、マノン?」

「うん、くわねこのマノン」

「じゃあ、俺は?」

「ノン」

「そいつは?」

「マノン」

「それって可愛いのか微妙だな

「かわいいの。ほら」

昴がマノンを俺の顔の前に突き出すのではなく顔の横に見比べる様に突き出した。

子どもつて純粹で残酷な生き物だ。

俺と田つきの悪い熊のぬいぐるみと一緒にしないでくれ。そしてある共通点に気が付いた。

昴が大好きなぬいぐるみは田つきの悪い猫のマノン。

昴が可愛いがっていた田つきの悪い犬がサン。

昴が懐いたのが田つきの悪い俺、ノン?

本気で凹む……

「ただいま。昴を連れて來たぞ」

「電話くらこすれば車で迎えに行つたのに。昴ちゃん、いらっしゃい」

実家の玄関をくぐるとお袋が出迎えてくれた。

するとそれまでまじめに回っていた昴が俺の後ろに隠れてズボンを掴んでいる。

「ここのくらいの距離なんて島育ちの昴ならなんて事は無いよ。ほら、昴。俺の母ちゃんが挨拶くらいいし」

「こちには」

昴の声は蚊の鳴く様な声だった。

「あらあら、緊張してゐるのかしら?」

「お袋、親父は?」

「ボウリングに行つたわよ」

「ボウリングつて玉を転がしてピンを倒すあれ?」

「そうよ、最近はサークルに入つて暇さえあればボウリング場通いよ」

親父の奴、逃げやがつた。

昔から面倒事が嫌いな親父は事ある毎にお袋に問題を丸投げして行方を晦ます悪癖があつた。

「さあさあ、上がって。お菓子も買つてあるのよ」

「昴、ほれ」

「う、うん」

居間に行くとお袋が俺にはお茶を昴にはオレンジジュースとお菓子を出してくれた。

昴は俺の服を掴んだまま俯いている、そんな昴を見てお袋が声を掛けてくれる。

「どうしたのかな? お菓子は嫌い?」

お袋の問い合わせにも昴は小さく首を振るだけだつた。

そんな状況を打破するかのように玄関から春菜の声が聞こえてきた。

「おばさん、昴ちゃん達来てる? ああ、昴ちゃんの靴を発見!」

ドタドタと板張りの廊下を走る音がして襖が勢いよく開いた。

「昴ちゃん、おひさー」

「あんな、春菜。俺に挨拶は? それと何で昴達なんだよ」

「もう、細かい事を気にすると大物になれないよ」

「あんな、お前こそそんなに大雑把だとタフガイに嫌われるぞ」

「大丈夫だよ。彼は私にぞつこんだから彼女すら出来ない典兄なんて言われたくないよーだ。昴ちゃん、お庭で遊ぼうか」

「うん」

春菜が昴に手を差し出すと嬉しそうに昴が春菜の手を握つて2人で庭に飛び出して行つた。

「ノリ、昂ちゃんは普段からあんな感じなの？」

「いや、島育ちで色んな人の中で育つてているから物怖じしない方だと思つ。ここに来るまでは俺の家族に会えるのを楽しみにしていたみたいだけど、こざ来てみたらあんな事があつた時に居た人が居た訳だ。春菜もあの場に居はしたけど後で一緒に買い物したりしたからな。これで美紀さんでも居たらもっと怖がるかもしないけどな」「美紀さんも可奈ちゃんと後から来るわよ。昂ちゃんが来ることを話したら可奈ちゃんが昂ちゃんに会いたがつて」

胃の辺りがキュンと締め上げられる。

親父がケツを捲る筈だ。

可奈は春菜と一緒に昂と買い物に行つて楽しかつたのでまた遊びにかつたのだろう。

「時期尚早なんじやないのか」

「遅かれ早かれの問題でしょ。絡まつた糸は早い時期に解いてしまつた方が良いのよ。無駄に時間が経つと解けるものも解けなくなってしまう時があるの」

「時間だけが解決する事だつてあるだろ」

「一応、四十九日も終わつたんだし良い時期だと思つの」

「そうだな、兄貴が見始めた美紀さんだもんな。だけど」

「お母さんだつて判つているわよ。昂ちゃんの事を一番にでしょ」

兄貴を連れ帰つてしまらくして葬儀が執り行われた。

それは美紀さんの達ての願いで、離ればなれで暮らしていたのだから最後の時は家族だけでと内々で執り行われた。

俺自身も参列すべきだつたが昂が混乱しないように何事も無かつたかのようになつた。

兄貴なら絶対に判つてくれると信じているから。

そして四十九日の法要で分骨され本骨は美紀さんの元に、兄貴が焦がれた星が降る小笠原に分骨は埋骨される事になり天文台の同僚に託された。

今日、美紀さんと可奈が実家に来るのは可奈が昂に会いたがつてい

ただけじゃないのが俺には判つた。

それは俺自身が美紀さんに頼んでいた事があるからだらつ。

「昴、買い物に行くぞ」

「え?」

「ホットケーキの材料を買いに行こ」

「うん!」

「典兄、私も」

昴と春菜の3人で実家の近くにあるスーパーに歩いて向かう。昴は見慣れない場所だからなのか春菜と手をつないでキョロキョロしながら歩いている。

「ノン、あそこの山みたいなのは、なに?」

「あれは土手だよ。あの向こうに大きな河が流れてるんだ」

実家の側には大きな河が流れていて土手の向こうの河川敷は公園や野球場になっている。

小笠原にも川はあるが大きな河は無く河口から1キロも遡上すると川幅も2~3メートルになりそれ以上カヌーですら遡上できなくなってしまう。

昴とバイクで島を回った時に見たところ所々手が加えられ護岸で整備されていたけれど木々が水際まで生い茂りまるでアマゾンの源流の様な様相だつたのを憶えている。

「行つてみるか?」

「いかない、はやくおかしいものしぃ」

昴なりに気を使っている気がしてならない、子どもは素直で無邪気な物だと勝手に思い込んでいたようだ。

春菜と顔を見合わせると春菜自身も気が付いているようだ。

「よし、河原まで競争だ」

「典兄なんかに負けないから。よーい、ドンー」

フライング気味に春菜が駆け出す。

キヨトンとした昴を抱き上げ肩車をして後を追いかける。

「ちゃんと掴まつてやる」

「うん！」

春菜の背中がどんどん近づいてくる。

「ノン、もつとはやく！」

「よし！」

更に加速して土手の階段を2段抜かしで一気に駆け上ると広い河川敷とゆっくりと流れる河が見渡せ、心地良い風が吹き抜けている。

「うわあ、おおきな川だね」

「気持ち良いこな」

春菜が息を切らして土手を上ってきた。

「やつぱり典兄には敵わないや」

「まだまだ、負ける気がしないよ」

「そんなつよがりを言つて、本当は息も切れ切れの癖に」

「まあな」

「昴ちゃん、下に行つてみよつ」

「うん」

土手の斜面に体を投げ出すと抜ける様な秋空に雲がゆっくりと流れている。

冷たくなつてきている風が頬をすり抜け気持ちが良い。

昴は春菜と土手の下でしゃがみ込んで何かを探している様だった。しばらく風に吹かれていると昴の嬉しそうな声が聞こえてきた。

「あつた！ はるなお姉ちゃんあつたよ」

「本當だ、凄いね」

「えへへ、それもふたつ。おおきいのとちこといやつ」

ゆっくりと土手を下りてしゃがんでいる春菜と昴を覗き込む。

「へえ、シロツメクサか」

「えつ、ノン。クローバーだよ」

「クローバーはシロツメクサの別名なの」

「わかんない」

「で、何を見つけたんだ？」

「えへへ、よつばのクローバー」

昴が満面の笑顔で両手に大きな四葉のクローバーと小さな四葉のクローバーを俺の目の前に差し出した。

「はるなお姉ちゃんがおしえてくれたんだよ。しあわせになれるんだって」

「そつか

「もう、典兄は素つ気ないんだから」

「買い物に行くぞ。可奈たちが来るつて言つてからな」

「えつ、可奈ちゃんが来るの」

「そうだ、だから早く買い物をしてホットケーキを作りつ」

「うん！」

「典兄、それじゃ美紀さんも」

「大丈夫だよ」

春菜が心配そうに俺の顔を見る。

確信はないが俺は兄貴と同じように美紀さんの事を信じている。

あの時は仕方がなかつたんだ、そう言い聞かせて。

クローバー

買い物を済ませて実家に戻ると玄関にパンバスと小さな靴が綺麗に並べられていた。

どうやら美紀さんと可奈が来ているようだ。

玄関の引き戸を閉めると可奈が嬉しそうに居間から飛び出してきた。

「昂ちゃん！」

「ああ、可奈ちゃんだあ」

昂と可奈が両手をつないで嬉しそうに飛び跳ねている。

まるで双子の姉妹の様だ。

双子ではないが異母姉妹には違ひなかつた。

そこに美紀さんが申し訳なさそうに顔を出すと美紀さんの顔を見た瞬間に昂の動きが止まつた。

すると美紀さんから血の氣が引いていくのが見て取れた。

春菜がこの場に居れば何とか助け船を出してくれるかもしれないが、昂が見つけた四葉のクローバーを持つて自分の家に戻つてしまつている。

「可奈、昂と台所にこの荷物を持つて行つてくれないか

「うん、昂ちゃん行こ」

「うん」

可奈に言われて昂がスーパーの手提げ袋の片方を持つて2人で走り出した。

「卵が入つてゐるからな」

「「はーい」」

2人の姿が見えなくなると美紀さんが深々と頭を下げた。
俺に怪我を負わせてしまつた事を気に病んでいるのだろう。

「典彰君、本当にごめんなさい」

「あんな物、高校の時の俺にすればただのかすり傷だよ。気にすん

な

「でも」

「でももへつたくれもねえの。義姉さんがそんなんじや、可奈も昂も氣にするだろうが」

「まだ、義姉さんつて呼んでくれるんだ」

「たりめえだら、ばーか」

高校時代からの付き合いで兄貴と美紀さんの3人での頃は良く遊びに出かけた。

俺が道を外れそうになると必ず美紀さんは叱つてくれて本当の姉の様な存在だった。

それでも俺は兄貴とは正反対の道に落ちていった。

親であるお袋と親父ですら手を焼いていたのに、そんな俺を美紀さんは見捨てないでいてくれた。

無意識に美紀さんの頭に手を置いて髪の毛をくしゃつとしていた。すると、美紀さんの瞳から涙がこぼれた。

「泣くな。可奈が居るんだぞ」

「うん、ありがとう。典彰君は優しいね

「そんなんじやねえよ」

「昔から優しい子だつたよ。宗一さんは包み込んでくれる優しさで、典彰君はしつかり繋ぎとめてくれる優しさ。だから昂ちゃんも典彰君をあんなに信頼しているんだね」

「で、どうするんだ?」

「ちゃんと可奈には話す。2人が異母姉妹だつて」

「そうか判つた。俺もそれに従つよ」

「ありがとう」

「ノリ!」

「ノン! 早く!」

「今、行くよ」

居間ではお袋がホットプレートを準備していくれた。

美紀さんと一緒に居間に行くと微妙な空気が流れた。するとお袋が動き出した。

「やうだ。昴ちゃんと可奈ちゃんに良い物をあげる」「ええ、なあに？」お婆ちゃん

可奈は直ぐに反応するが昴は可奈の後ろで様子を伺っている。

そんな事を気にせずにお袋は2人に小さなエプロンをつけた。

昴のエプロンは薄い黄色で黒猫のアップリケが付いていて名前が刺繡されている。

可奈の方はピンク色で可奈の好きなティベアのアップリケが付いて名前が同じように刺繡されていた。

「これっておばちゃんが作ったの？」

「そうよ、可愛いでしょ」

「うん、ありがといづ」

「嬉しいわ、昴ちゃんが喜んでくれて」

昴が照れているのを見てお袋は目を細めて喜んでいる。

俺にはどう見ても黒猫とティベアの違いが良く判らない、するとお袋に睨まれてしまった。

台所に向かうとエプロン姿の昴と可奈がまめまめしくお手伝いをしてくれた。

そんな所に逃げ出していた親父がボウリングから帰ってきた。

可奈がいち早く気づき玄関に向かつて走り出した。

「みてみて、お爺ちゃんにもらつちやつた」

「つて、親父。まだ2人には早くないか？」

可奈が持っているのはカラフルな箱に入つた子ども用の包丁だった。親父を睨むと親父はバツが悪そうに頭を搔いている。

「そ、そうかなあ。2人ともお手伝いが好きだつて聞いたから」「ありがとうございます。お義父さん」

「美紀さん、そんなに気を使わないでおくれ家族なんだから」「はい」

今の俺達に出来る事は自然にふるまう事だけだ。

「テレビでも小さな子が料理をしているんだから昴ちゃんも可奈ちゃんもやってみたいよね」

「「うん…」」

お袋の一言で居間のテーブルに小さなまな板を置いて昴と可奈の料理教室が始まっている。

2人は恐る恐る半分に切られたリンゴを切ろうとしている。俺と親父はハラハラしながら見てているがベテラン主婦のお袋と美紀さんがついていれば安心だらう。

2人の嬉しそうな声がぎこちなかつた空気を解していく。

ホットケーキを焼きはじめると春菜が再びやってきた。

「うわあ、典兄のホットケーキなんて久しぶり」

「あのな、誰が作つてもミックス粉で作るんだから同じだろ?」

「それが全然違うんだな典兄が作つてくれたホットケーキは世界一美味しいんだよ。そうだ昴ちゃん、これ。可奈ちゃんにはこっちね」春菜が昴と可奈に渡したのは本に挟む栞だった。

昴の栞には昴が見つけた大小の四葉のクローバーと黒猫のマノンやきらきら光るハートや星がラミネートされ穴があけられシンプルなリボンが付いている。

可奈の方にはティベアと董か何かの押し花がラミネートされ同じようにきらきらと光つている。

「ありがとう、はるなお姉ちゃん。たいせつにするね」

「ママ、みてみて」

「綺麗だね、春菜ちゃんありがと!」

昴は大切そうに栞を胸に抱きしめ、可奈は嬉しそうに美紀さんに見せている。

お袋も親父もそして春菜も昴や可奈の事を気にかけてくれているのがとても嬉しく感じた。

高々ホットケーキを昴が食べたいと言つただけで大騒ぎになつてゐる。

ホットプレートで俺が小ぶりのホットケーキを焼き上げると端から春菜・可奈・昴の3人が持つて行き、定番のメイプルシロップやバターにチョコレートソースをかけて口に運んでいく。

そして用意した生クリームや缶詰のフルーツを使って楽しそうにコレーションしている。

「ノン、リングはどうするの？」

「そのままで良いけどこうしてホットプレートで焼くんだよ」
昴と可奈が切つて芯を取り除いたリングをホットプレートで焼くとしんなりして焼きリングになっていく。

砂糖を加えなくても旬のリングは酸味と甘みが良い感じで生クリームやメイプルシロップとの組み合わせも抜群だつた。

「でも、典兄って何処でこんな事を知つているの？」

「あのね、春菜ちゃん。実は宗一さんの代わりに時々可奈に焼いて食べさせてくれてたの。でね」

「ああ、義姉さんは余計な事を言つなよ」

「良いじやない。可奈の喜ぶ顔が見たかつたんでしょ」

「まあ、放蕩兄貴があんなどからな。時々は俺が兄貴の代わりに遊んでやらないとな。俺なりに考えて必死だつたんだよ」

「そうだったんだ。でも宗兄も典兄に『放蕩』なんて言われたくな

いと思うけどな」

「あのはな」

居間から笑い声が絶えない。

そんな雰囲気の中、昴からはすっかり固さが取れ美紀さんとの距離も少しだけ近づいた様に感じていた。

「疲れた」

「はい、お疲れ様」

お袋が缶ビールを持つてきてくれて、つまみを作りに台所に戻つて行つた。

昴は可奈ちゃんと一緒に美紀さんが寝かしつけてくれている。

可奈が昂とお風呂に入りたがつたが流石にそこまで昂は美紀さんに心を開いてなくて、いつもの様に俺が風呂に入れて髪の毛を乾かしてやつた。

今は春菜が泊まる気満々で風呂に入っている。
久しぶりに俺が実家に帰ってきたのでゆっくり秋の夜長に募る話でもしたいのだろう。

すると親父が口を開いた。

「典彰、お前。最近営業回りしているらしいじゃないか」

「まあ、思う所があつてな」

「大丈夫なのか？ 母さんが心配してたぞ。昔のお前は夜遅くまで接待や挨拶回りをしていたじゃないか」

「一応、ちゃんと考えているよ。後輩をつけてもらって仕事を教える途中だよ。だから後輩に接待なんかは任せてあるし何かあれば俺がケツを拭くよ」

「そうかお前は偉いな」

「普通だろ」

そこに春菜が風呂から出てきた。

「やつぱり、ここのお風呂は広くて気持ちが良いや」

「古いだけだよ」

「もう、うちのシステムバスなんかと比べて風情があつて良いじゃん」

「古いタイル張りの風呂なんて掃除が大変なんだぞ」

「そつか、典兄の家もシステムバスじゃないんだつけ。そう言えれば煙草吸わないね」

「止めたんだ、煙草」

春菜と親父は俺の言葉を聞いて瞬間冷凍されたマグロの様になり、お袋が炎つたスルメを驚いて床に落としそうになった。

「そんなに驚く事じやないだろ」

「驚くわよ。ノリ、あんた熱でもあるんじやないの？」

「あるか！ 僕は至つて健康だ」

「大きな声を出さないの。昴ちゃんと可奈ちゃんが起きあがやうでしょ」

「お袋が変な事を言つからだ」

「本当に驚きぱなしよ。昴ちゃんと暮らすなんて言い出すし。仕事も再始動したんでしょうに。その上にあれほど止められなかつた煙草を止めたなんて信じられる訳ないじやい」

「俺、昴と暮らし始めて今のもじや駄目だつて思つたんだ。俺自身がちゃんとしていないといけないんだつて。だつて俺が駄目駄目なら昴が笑われるだる、そんな事は俺自身が許せない。まあ、朝は昴に起こされるしままだだけだ」

「あきれた。相変わらず手の掛る子なのね」

「でも、昴の事なら俺は何でもできるし腹をくくれると思つんだ。だから昴が俺と居るのが嫌だと言つまで離れる気はないし離れるつもりはない」

「大丈夫よ。昴ちゃんが典彰君を嫌う訳ないじやない。あんなに信頼しているのに」

「義姉さん。2人は？」

「手をつないで寝たわよ」

昴と可奈を寝かしつけた美紀さんが居間に顔を出した。

静かな時間が流れる。

庭で鳴いている秋の虫の声だけが聞こえる。

俺が缶ビールを煽るとお袋が静かに話し始めた。

「どうするの？ 可奈ちゃんと昴ちゃんの事」

「義姉さんは覚悟が出来ているんだる。なら本当の事を話すだけだよ」

「ノリ、大丈夫なの？ 2人はまだ6歳なのよ」

「だから余計だろ。大きくなつて関係が拗れれば修復は難しくなる。そう言つたのはお袋だぞ。幸いと言うべきか可奈と昴は打ち解けて仲が良い。アルバムなんかを見れば何れお互いの関係に気付く。そ

の時じや遅いんだよ。俺が明日、2人に話すけど良いかな？ 皆の了承が欲しいんだ」

「典彰の思う様にして見なさい。僕らは家族なんだから」

親父の言葉に美紀さんもお袋も頷いた。

春菜に至つては涙を零していた。

「春菜は相変わらず泣き虫春菜だな」

「馬鹿っ」

俺は美紀さんに頼んでおいたことを聞いてみた。

「義姉さん、例の方はどうだつた？」

「何も見つからなかつたわ」

「そりゃ」

「ノリ、あんた何を美紀さんに頼んだの？」

「ああ、昂の母親の手掛けりが兄貴の荷物の中にはいか探してみてくれつて頼んだんだ。やつぱり見つからなかつたか」

兄貴の遺品とも言つべき荷物はいつたん俺の家に届いたが俺が開けて良いものではなく、そのまま美紀さんの元に送り届けた。

荷物自体は俺自身が梱包したのだから何が入つていたのか知つてゐる訳だけど全てを調べた訳ではなくそんな時間も無かつた。

その為に改めて美紀さんには酷かもしれないが美紀さん以外に頼める人はいないのが現状だつた。

「本なんかも全部見てみたけど何も、でも宗一さんの使つていたノートパソコンだけは宗一さんが勝手に触られるのを嫌つていてから怖くて触つてないの」

「で、そのパソコンは？」

「（）に持つてきてみたわ。典彰君が調べてもうえないかしら。それと昂ちゃんのアルバムも、これは流石に持つているのが辛いから」「判つた、預かってパソコンは中を見てみるよ。アルバム、ありが」と「（）」

もしかしたらと言つ気持ちも多少あつたが昂のアルバムは処分される事は無かつたようだ。

翌朝、春菜は一旦自宅に戻り直ぐに俺の実家に顔を出した。

すると可奈と昴が春菜を誘つて土手に行つて四葉のクローバーを探すこと言いだした。

昴を俺が、そして可奈を美紀さんが居間に連れて行くと居間には親父とお袋が神妙な顔をして気まずそうに座つてゐる。

春菜がケツの座りが悪いのか立ち上がりうとしたのを俺が止めた。可奈と昴は場の空氣を感じとり不安そうな顔をしてゐる。

そんな2人の前にしゃがみ込んで2人の頭に手を置きゆっくりと2人に判る言葉で話し始めた。

「昴と可奈に大事な話があるんだ」

「今は全部判らなくても良いから俺の言う事をきちんと聞いて欲しい。良いかな」

「うん」

昴と可奈が小さく頷いてくれた。

一息ついて昴と可奈を真つ直ぐに見て2人に同時に同じ事を聞いた。

「2人のお父さんの名前を教えて欲しい」

「のじま そういち」

「えつ?」「あれ?」

昴と可奈が驚いて顔を見合はせている。

「お父さんの顔つてどんな顔だった?」

2人が同時に俺の顔を指さし再び顔を見合はせた。

「あのね、実は昴と可奈は本当の姉妹なんだ。父親は俺の兄さんの能登島 宗一。でも、2人のお母さんは別の人だけどね。可奈が7月生まれで昴が9月生まれだから可奈が少しだけお姉さんかな」「昴ちゃんはわたしの妹なの?」

「同じ年だから。俺と兄貴みたいに双子つて感じかな」

「ノン、ほんとうなの?」

「俺が昴に嘘をついた事があるかな? 無いだろ」「うん」

昴と可奈が手をつないで照れくさそうに笑っているがそれは姉妹だと言われて嬉しかったのだろう。

恐らくそれがどんな意味なのかなんて6歳では理解できないだろう。

「昴ちゃんのママってどこにいるの？」

可奈の言葉にその場に居た全員が凍りついた。

そこまで考えが及ばないと言うかまだ何処の誰かさえ判らない状況で名前すら判っていない。

思わず心中で頭を抱え込んで『しくつた！』と絶叫している俺が居た。

親父とお袋それに春菜まで俺に冷たい視線を浴びせている。

昨夜の親父の『家族なんだから』と言つ言葉に頷いていたのは嘘だつたのかと思つてしまつ。

「わたし、ママなんて居ないよ。パパだけだもん」

昴の真つ直ぐな言葉で凍りついた空気がゆっくりと動き出した。

「昴ちゃんってパパとママと暮らしていたんじゃないの？」

「判らない。パパだけだもん」

それだけを言つと昴は俯いてしまつた。

美紀さんが昴に聞いた質問は俺には怖くて昴に聞けなかつた事だ。今まで聞けなかつた事を後悔しても仕方がないがもつと早いうちに聞いておけばよかつたと思つ。

それに小笠原の兄貴の家で見たアルバムには兄貴と昴の写真はあつたが昴の母親らしき影は何処にも無かつた。

それはアルバムを見たであろう美紀さんと同じ認識で間違つていないだろう。

「昴ちゃん。ママがいなくてさみしくないの？」

「えつ、へいきだよ。だつてわたしにはノンがいるもん」

可奈の直球に再び凍りつきそうになるが、そこには昴の嬉しそうな笑顔があつた。

昴と可奈の前にしゃがんでいた俺は腰が抜けた様にその場に座り込んだ。

心の底から笑いが止めどもなく笑いが込み上げてきて腹を抱えて笑つていて。

そして目からは熱いものがこぼれていた。

昴の母親の手掛かりを探すために実家から帰ってきたその日のうちにパソコンを調べる事にした。

もちろんそんな事は昴の目の前で出来る訳もなく昴を先に寝かしつけてから。

まあ、危うく俺も一緒に寝てしまう所だったが。

兄貴のパソコンは俺が梱包した時と同じようにパソコンケースに入つたままだった。

パソコンをケースから取り出すと手帳か何かがパソコンの間から落ちた、手に取るとそれは昴の母子手帳だった。

そして同時に昴の母親の名前が判つた瞬間だった。

「しくつた。何で島に居る間にパソコンを出して見なかつたんだ」

後悔先に立たずとは正しくこの事だ。

母子手帳を開けて見ると健診の結果や昴の予防接種の履歴などが書き込まれ。

昴の成長の様子が綺麗な字で細かく書き込まれている。

その履歴は初めてのうちは都内の病院になつていていたのに途中から小笠原の診療所に変わつていて小笠原で暮らしていく事が見受けられる。そして生まれたばかりの昴の写真があつた。

眠っている時の口元がそつくりで自然に笑みがこぼれた。

「鳴海 涼子ってどこかで聞いたか見た覚えがあるな」

それが昴の母親の名前だった。

パソコンの電源を入れて立ち上げる。

しばらくすると画面にパスワードの文字が浮かび上がつた。

兄貴と美紀さんの誕生日・携帯番号・昴や可奈の誕生日や名前を組み合わせ。

自分が思いつくだけのパスワードを入力するがロックは解除できな

い。

時間だけが無意味に過ぎていき畳の上に体を投げ出して伸びをする。「駄目だ。一卵性双生児の兄貴の事だから大概は判ると思っていたのに。それに電話して来た時にパスワードくらい教えておけよ。こんな事になるんなら今更だらうが。パスワード、暗号か……合言葉？まさか」

それは俺と兄貴の2人にしか通じない言葉だった。

言葉と言つてしまつて良いものかと思うような子どもの頃に発していた音の羅列だった。

起き上がり音の羅列を口ずさみながら入力するとロックが解除された。

デスクトップにあるファイルを見てみるとどれも星の画像や天体観測や天体ショーの記録ばかりだった。

「まさか隠しファイルに」

オプションを開くと隠しファイル及び隠しフォルダーを表示しないにチェックがついている。

それを全てのファイルとフォルダーを表示するにチェックをして念のために再起動させる。

すると隠れていたファイルが姿を現した。

『『プレアデスについて』』と言うファイルをクリックする。

昴と言うのはカタカナで書くと外来語の様な感じがするが牡牛座の中にあるプレアデス星団の和名の事だ。

そのファイルの中には昴と昴の母親である鳴海涼子について書かれていた。

涼子とは小笠原に転勤になつた時に知り合つた。

妊娠の所為か小笠原に着いた時にトラブルを起こし俺が身元を引き受ける事になつた。

「つて、おいおい」

涼子は昴に対して愛情がなかつた訳ではなく表現の仕方が不器用だ

つただけで、それについては俺自身も彼女の性格に時々困惑する事がある。

その為か昴自身も涼子に対して心を開かなかつた。

そして涼子と言う人は何度も小笠原と都内を行き来して都内で昴を産んでしばらくは都内で暮らしていらっしゃい。

それは母子手帳からも判る事だつた。

その後の文章は殆どが昴についての事だつた。
パツと見たまでも昴の母親の連絡先などは一切書かれておらず判るのは名前だけだつた。

「結局、判つたのは名前だけか。ん？ 待てよ」

涼子は写真を撮られる事を心底嫌がつていたが写真を撮る事は好きなようでコンテストなどには時々応募していたようだ。

そしてある日、涼子にかかってきた電話を境に涼子は昴の前から姿を消してしまつた。

これを読んでいるのは恐らく典彰だらう。
どうか昴の事を頼む。

「馬鹿野郎！」

思わず時間を気にせずにテーブルに拳を叩きつけ叫んでしまつ。すると昴が起きてきてしまつた。

「ノン、どうしたの？」

「起こしてしまって、ゴメンな、寝ような

「うん」

昴を隣の部屋に連れて行き寝かしつける。

自分の布団があるにもかかわらず昴は俺の体にぴったりと寄り添うに寝るよつになつてしまつた。

子どもの体温は高くかなり温かい。

まあ、これから時期はお互いに寒くなくていいかもしないがだ。

それにも昴の母親の鳴海涼子つて……

写真？ カメラ？

そこで兄貴の荷物を整理している時に見かけた写真集が浮かんでき

た。

その[写真]しゅうは沖縄の風景や町の人の何気ない普段の表情や笑い顔を撮影したものだつたと思う。

[写真]集にあつた名前が鳴海涼子だつた気がする。

昴が再び寝付くのを待つて美紀さんに電話をしてしまつた。

「義姉さん、こんなに夜遅く「ゴメン。探しももらいたいものがあるんだ」

「典彰君の頼みなら私は何時でも構わないけど、どうしたの? そ

んなに慌てて」

「兄貴の荷物の中に[写真]集があつたよね。その[写真]集を探してほし

いんだ」

「ちょっと待つてちょうどいね。宗一さんの部屋に止づけたばかりだから直ぐに取つて来るわ」

「頼む」

電話口の向こうから美紀さんが動く気配がして小さなものの音だけが聞こえてくる。

そして『あつた』と言つ美紀さんの声が聞こえてきた。

「あつたわよ、鳴海涼子さんつて人が撮つた[写真]集みたいだけど

「やつぱり

「典彰君まさか昴ちゃんの?」

「うん、多分間違いないと思う。それとこれは美紀さんの胸の内にしまつておいて欲しいんだ。実は……」

「そう、判つたわ。ありがと」

自分のノートパソコンでネットを開いて鳴海涼子を検索すると都内のギャラリーでしばらく個展を開いている様だつた。

どうすれば一番いいのか判らないが一つだけ言える事がある。

彼女が昴の母親かも知れないが俺は昴を置いて行つた彼女の事を許す事をとうてい出来ないと言つ事だつた。

昴を保育所に送り届けて会社に行く途中でお袋に電話した。

「お袋か、実は昴の母親の事が判つた」

「ええ、本当なの？ で、あんたどうする気なの？」

「あのな、殴り込みに行くとでも思つてゐるのか？ 何をしているのかが判つただけで連絡先なんかはこれから調べるんだ。週末に実家によつて昴を預けてからだな」

「判つたわ、ちゃんと報告しなさいよ」

「ああ、それじゃな」

お袋にそう言つたものの俺自身の中では踏ん切りがつかないままだつたし、仮に個展に行つてもそこに必ず彼女が居るとは限らないからだ。

仕事モードに切り替え野田を連れ回つて定時過ぎに退社して昴を迎えて行く。

最近では昴が何をしているのか気になりだして完全に親目線にシフトしてきている自分が怖い。

最近は日が沈むのが早くなつていて

急いで昴を迎えに行く。

「昴ちゃん。お迎えが来たよ」

「はーい、バイバイ」

最初のうちは俺の事をなんて呼んでいいのか保育士さん達も困惑気味だつた。

『お父さん』『おじさん』『能登島さん』『沢渡さん』

どれもしつくりせず最近では大人の対応らしくお迎えが来たとか言わないようになつていて

周りに気を使わせているのが良く判るが現段階では現状維持でいるしかないのも確かだつた。

「それじゃ、また明日ね」

「先生、バイバイ」

「失礼します」

昂と手をつないで保育所を後にす。

「昂、友達は出来たか？」

「うん。あっちゃんとまみちゃんとせいじくん」

「おお、せいじくんって男の子か」

「うん、ちょっとらんぱりだけど、ましるのがはやいんだよ」

「へえ、そなんだ」

平静を装つけど乱暴な事をされていないかが凄く気になる。
まあ、何かあれば保育士さんから連絡がある訳だし気にするほどの事じゃないのかもしねない。

「あのね、せいじくん。おとうさんの事がきらいなんだって」

「どうしてだ？」

「よつぱりつてぶつつてじつてた」

世の中には女子どもに手を上げる男が居るのは事実だ。

だけどそれは家庭の事情つてやつで俺みたいな部外者が首を突っ込んで良い問題じゃない。

許しがたい行為だけど他人には全くの無力な世の中だつた。
昂の母親を確かめに行くべきか悩んでいた間に週末は田前に迫つていた

「昂ちゃんつていつもパパがお迎えに来るよね。ママは？」

「ママはいないよ。それにノンはパパじゃないもん」

「ええ？ ジヤだれなの？」

「ノンはパパのおとうとで。でもママは知らないけどパパがおなじお姉ちゃんがいるよ」

「ええ、どういうことなの？ パパもママもひとりだよ」

「ほんとうだもん」

そこに男の子が近づいてきた。

「ばーか、俺なんかとーちゃんいらねえもん」

「せいじくん、そんな事をいっちゃダメなんだよ」

「うるせ！ 昂いくぞ」

「え、せいじくんつてば」

そこに保育士さんが宥めに入るが保育所の庭は喧々囂々として收拾がつかなくなり保育士さんが頭を抱えていた。

「せいじくん、なんでパパなんかいらないの？」

「だつてあいつは俺もかーちゃんもなぐるんだぞ」

「いつもなの？」

「ときどきだけだ。だからきらいだ」

パートナーの野田の失敗をフォローしていく普段より少しだけ昂のお迎えが遅れてしまった。

「はあ、はあ。昂、ゴメン。遅れた」

「おそいよ！」

「すいませんでした」

保育士さんに頭を下げると笑顔で迎えてくれる。

子どもが苦手な俺からすればまるで天使の様な人達だと思つ時がある。

「まだ、聖司君のお迎えがまだなので、それにまだ時間内ですか
「ありがとうございます。昴、帰る？」

「うん」

俺達が帰ろうとした時に入れ違いでグレーのスカートスースの上に
ベージュのコートを羽織った小柄な女人が走り込んできた。

「すいません、遅くなりました」

「聖司君、お母さんがお迎えに來たよ」

「おせえよ、かーちゃん」

「ゴメンね」

「昴、いつしょにかえろうぜ」

「ノン、良いでしょ」

やんちゃ そうな男の子の手を引いている女人の顔を見て固まつて
しまつた。

彼女も俺の顔を見て顔を強張らせている。

俺が見間違えるはずがないし彼女の反応からも間違いないだろ。昴が熱を出した時に旦那に殴られて氣を失つて一緒に病院に行つた
彼女だつた。

「ああ！」

「ええつ、あの時の？」

氣まずい雰囲気が俺と彼女の間を漂つていて。

昴と聖司は手をつないでお喋りをしながら俺達の前を歩いていた。

「あの治療費とタクシー代はお返ししますから」

「えつと、別に良いですよ」

「良くありません。私は物乞いじやありませんから」

「別にそういう訳じや」

逃げ出したい、それが本心だつた。

あの時は2度と会う事なんてないと思つていてた。

それに大事なお金を旦那に持ち去られたのを俺はこの目で見ていて
ので治療費と僅かなタクシー代を会計係の人へ託した。

そんな2度と会わないと思つていた彼女に昴が通う保育所で再会してしまったなんて。

それにどうやら彼女の息子の聖司君と昴は仲が良いらしい。ドラマなら運命的な出会いなんて言つんだがこれから俺はどの顔で会えば良いんだ?

「でも、聖司がいつも楽しそうに話す昴ひやんのお父さんがあなただったなんて思つませんでした」

「まあ、俺は父親ですらないですから。昴は兄貴の子供もですか」「えつ? お兄さんの?」

「ええ、9月に事故で他界しました」

「9月つてこの間じやないですか」

「まあ、そうですね」

「それであんなに慌てていたんですね」

「あ、あの時は本当にあつがとうございました。何だかお礼を言いそびれちゃつて」

氣まずい雰囲氣の中、立ち止まって誠心誠意頭を下げる。

「ノン、おこでいくよ」

「先に行け、昴なんかに置いて行かれるほど遅くないよ」

「なあ、昴。なんでノンなんだ? あいつ」

「あれ? ノンつてなまえなんだっけ?」

「あんな、昴。俺の名前を忘れた訳じゃないよな」

「えへへ、ノンのなまえは『さわたりのりあき』だよー。」

昴の言葉で今度は彼女が立ち止まって俺の顔をまじまじと見上げていた。

「あの、俺の顔に何か付いていますか?」

「え、だって昴ちゃんの苗字つて確か能登島じや」

「ええ、兄貴は婿養子と書つ形で結婚して姓が変わりましたから。元は俺と同じ沢渡ですよ」

「やうじやなくて。あつそれで私の顔を見たとき驚いていたんですね

「はあ？」

「加賀谷 早苗」

彼女の口から飛び出した名前を聞いて俺の思考も体も止まってしまった。

そして2度と思い出したくない悪夢がフリッシュバックする。彼女の口調が途端に硬くなつた。

「な、なんでその名前を？」

「私の旧姓は入江です」

「まさか……」

「そのまさかだと思います。早苗ちゃんが良く話してくれていた沢渡典彰さんがあなただつたなんて。確かに話に聞いた通り電信柱みたいに背が高くて目つきがちよつと悪いんですけど。可笑しなもんですね。でも、私はあなたを許せませんから」

「そうですか。あなたが早苗の従妹の未来さんでしたか。どうりで良く似ていると思いました」

「早苗なんて呼び捨てにしないでください！」

未来さんが憎しみを露わにして声を荒げた。

「かーちゃん、腹へつた」

「ノン、はやく帰ろう」

「歩きながら話しませんか？」

俺と未来さんが立ち止まつているのにしづれを切らしつて聖司と昂が声を掛けて来てくれた。

それは俺にとつてありがたい助け舟だった。

「どうして早苗ちゃんに会いに来てくれなかつたんですか？」

「言い訳にしか聞こえないと思いますが。あの事故から半年間の記憶が俺には無いんです。実はあの電車には師と仰いでいた先輩も乗つていて彼女と同じように帰らぬ人になりました。母から聞いた話ですが精神的な事から来る一時的な記憶喪失だつたと」

「大切なものを失つたショックで……」

「はい、半年ほどして記憶が戻つた時には既に取り返しのつかない

事になつていましたよ。彼女の両親からは罵声を浴びせられ線香すらあげる事も許されず。彼女が眠つている場所を知つたのは1年くらい前の事です。会社でも自分が開拓した営業先は全て同僚に引き継がれていました。昴と出会つまではそれこそ営業部のお荷物扱いですよ」

「私、何も知らなくて。ただ早苗ちゃんの婚約者が最後のお別れにも来ないつて教えられて悔しくて」

「そう思われても仕方がない事です。全ては俺自身の弱さが引き起こした事ですから」

「昴ちゃんと会つまではつて言つていましたよね」

「ええ、昴と暮らすようになつてちゃんとしたなんて今更ながら思いまして。まあ再起動つて感じですかね」

「大丈夫です。昴ちゃんを見ていればあなたがどれだけ頑張つてゐるか良く判ります。親は子どもの鏡なんです。それに聖司も昴ちゃんと仲良くしてもらつていいみたいだし」

「それはお互い様ですよ。昴は島育ちだからこっちの事は良く知らない事が多いくらいですけど色々と教えてもらつていいみたいで」

「ええ？ 聖司にですか？ あんなに落ち着きがなくつて手を焼いているのに」

少しだけど彼女の空気が和らいでいくを感じる。

その落ち着きのない原因は父親にあるのではないかと思つたが、それは俺が口を出して良い様な事じゃないと飲み込んだ。

ただ、彼女が早苗の従妹だと判つた今は何かあれば力になりたいと思つた。

それが多少なりとも罪滅ぼしなればと。

「せいじ君、お母さんきれいだね」

「ええ、家じや。へそつむわこばばあだだ」

「もう、聖司ー。」

「また、げつよしひだね」

「おつ

家の近所で未来さんと聖両と別れる。

あの時もこの先で出くわしたのだから彼女たちの家も近所なのだろう。

「ノン、せいじ君のおかあさんしつているの？」

「ああ、昂が熱を出した時に助けてくれたんだよ。聖両のお母さん
だって言つのは今日わかつたけどな」

「ええ、おれいしないと」

「子どもがそんな事を気にしなくて良いの。俺がちやんと書つたら
「ら」

「ああ、せいじ君のおかあさんきれいだもんね」

「あんな、あの人は結婚しているだろ」

「あつ、そうだ。でも、せいじ君おとつせんせらいだつて。ときど
きぶたれるつていつてたよ」

「せうか、あいつも大変なんだな」

週末、俺は昂を両親に預けて都内のギャラリーの前に来ていた。
親父とお袋に行つてくると啖呵を切つたものの、これ田の前にする
と流石に腰が引けてくる。

それに昂には何で休みの日にスース姿なのか突つ込まれてしまった。

「ねえ、ノン。デートなの？」

「でーと？ そんな言葉どこで覚えて来るんだ？」

「保育園だよ。みーちゃんのおかあさんとおとつせんせがデートした
んだつて」

「あんな、意味が分かつて使つてているのか？」

「ええ、男の子と女の子がいつしょにでかけるのをトートつてゆつ
んでしょ」

「まあ、広い意味じゃまちがつてねえけど」

「ノンにはかのじょいないの？ けつこんしないの？」

「いねえし、そんな予定はありません」

「なんだつまんないの」

「つまんない言うな！」

むきになつて いると お袋に 子ども 相手に と 寄められ てしまつた。

昂に 言わ れると 何故だか マジで 凹む。

それ に 万が一 に でも 彼女 が 出来 たら そつする んだろ う、俺。

モノトーン だつた俺 の 家 は 徐々に 昂カラ ー で 浸食 され つ つ あつた。

今じ ゃ 台所 に は 可愛ら し い グラス や 食器 が あり。

昔 の 木 の 踏み台 も お袋 が 買つ て き た 可愛ら し い 水色 の 折り畳み式 の 踏み台 に 取つ て 代わ られ。

居間 で すら 昂 が 大好き な 絵本 や 小物 が 増殖 し つ つ ある。

まあ 、 彼女 な て 生き物 が 現れる 気配 な て 皆無 で 心配 な て する 必要 すら 無用 だ。

俺 の 人生 に とつて ギヤラリー な て 無縁 の 場所 だ と 思つ て いた。

そん な俺 が 真つ白な 壁 に 展示 さ れた 写真 を 見て いる。

この ギヤラリー に 展示 さ れて いる 写真 を 摄つた 本人 は 居ない よう だ つた。

俺自身 、 彼女 の 顔 も 知ら ない し ネット で 調べ て も 兄貴 が 残した ファイル に 書いて あつた よう に 写真 を 摄ら れる のが 嫌な のだろ う 本人 の 画像 が 皆無 で 何も 判ら ず 仕舞 い だつた。

しかし 、 こんな 綺麗 な 写真 を 摄る 事 が 出来 る 人 が 昂 の 母親 だ な て どう し ても 思え なかつた。

日本 に は 同姓 同名 な て 何人 いる か すら 判ら ない のだから 人違 い で あつて 欲しい と 願つた。

「へえ 、 なんだか 真つ直ぐ に 訴え かけて くる 写真 だ な」

それは 『 ワラビ 』 と 言つ 題名 が 付け られ た 沖縄 の 子ども の 自然 な 笑顔 を 切り取つた 写真 だつた。

その 時 、 出入り口 の 辺り で 雑誌 か 何か が 落ちる 音 が する。

ギヤラリー で 写真 を 見て いた 数人 が 音 を し た 方 に 視線 を 向ける。

俺 も その 内 の 一 人 だつた。

すると床にパンフレットの様な物が散乱して近くにいた人が拾い集めていた。

そんな事を気に留めないかのように1人の小柄な女性が立ち尽くしていた。

そしてその女性の顔が見る見る歪んで泣きそうになる。

その顔はまるで小笠原に着き船から降りた時に泣きながら走り寄ってきた昴の顔と重なった。

「宗一さん？」

そう聞こえた気がする。

次の瞬間には女性は毅然とした表情になりパンフレットをかき集めている人に『後はお願ひ』と言つて俺に向かつて歩いてきて突然俺の腕を掴んで外に連れ出した。

俺の顔を見て驚き、次にとつた行動から彼女が昴の母親に間違いがないと確信した。

ギヤラリーから少し離れた喫茶店に連れ込まれてしまった。

「『注文は？』

「俺はブレンンド」

「同じ物を」

「畏まりました」

店員が会釈をして下がっていくと彼女が不機嫌そうにいきなり切り出した。

「あなたはいつたい誰なんですか？」

「能登島 宗一の幽霊でも現れたと？ 俺は宗一の双子の弟ですよ

「えつ、弟さん。宗一さんが確かにそんな事を」

「あなたが昴の母親で間違いありませんね」

「は、はい。一応」

「一応って何だ？」

自分がお腹を痛めて昴を産んだのじゃないのか？

「実は今、昴は俺と暮らしています」

「そうですか、で生活費でも出せと」

「そんなつもりはありませんよ」

「それじゃ何で私の前に現れたりしたですか」

「あなたの口ぶりだと兄が亡くなつた事を知つていますよね。昴の事をどう思つて言つんですか？」

「私は島を離れた時点で母親失格だと思つていますし、あの子も私に心を開いてくれなかつたからあの子にも会わない方が良いと、何だろうこの感覚。

違和感と言うか昴がこの人と暮らしていたイメージが全く湧かない。イライラすると言うか無性に腹が立つ、兄貴が書いていた性格に困惑するとはこの事なのかもしれない。

大人の様な発言をしたかと思うと急に子どもじみた事を言い始める。そして時々自分の親指の爪を噛む癖があるようだ。

「昴の事が嫌いなんですか？ 大切じゃないんですか？」

「そんな事を言われても判りません」

見せるべきか悩んでいた昴の写真をテーブルに置いて彼女の前に押しだした。

「これ、最近の昴の写真です。俺の実家で遊んでいる時の
「へえ、大きくなつてる」
もうどうでも良くなつてきた。

こんな人が昴の母親だつたなんてこの場から一刻も早く逃げ出したかった。

昴の事を一番に考え母親の元に返すべきじゃないかと考えていた。しかし、こんな人ならちょっとの事で狼狽えている俺の方がマシに思えてきた。

急速に熱が冷めていくと完全に裏営業モードになつていた。

「あの、一つだけ確認させて下さい。俺が昴と暮らしていくことに異存はないんですね」

「構わないです。私は仕事の為に子どもを投げ出した女ですから」
それは母娘に対する罪悪感が吹き飛んだ瞬間だつた。

女子どもに手をあげる男は人間の肩だと思って生きてきたが、この時ほど目の前の女を張り飛ばしたい衝動を抑えるのが大変だつた。それと同時に俺が昴を育てていこうと決心した瞬間でもあつた。

「最後にお願いしたい事が

「まだ、何があるんですか？ 忙しいのに」

「連絡先だけでも教えて頂けませんか。恐らく2度と会う事も無いと思いますし、子どもを投げ出すような人間に昴を会わせるつもりは毛頭ありません。でも一応あなたが昴を産んだ人ですから」

「判りました、これ

彼女が1枚の名刺を取り出した。

それを受け取り俺の名刺をテーブルの上に置いて伝票を持つて立ち上がつた。

「貴重な時間を浪費させてしまつて申し訳ございませんでした。これで失礼させていただきます」

店内で暴れなかつただけで及第点だらう。

会計を済ませて一刻も早く彼女から離れたかつた。

同じ空気を吸つていると思つただけで嫌悪感を覚え、喫茶店を後にしようとする後ろから2度と聞く事は無いと思つた声がした。

「あの、あの子の苗字はどうなるんですか？」

「はあ？ 昴が望まない限り能登島のままです」

「それじゃ可哀想じやないですか。これから小学校に言つて保護者と違う苗字だつたら虐めに遭うかも」

「俺は昴の事を一番に考えていきたいと思つています。だから昴が望まない限り変えません」

「そんな、まだ6歳の子どもに決めさすなんて」

「もう、6歳ですよ。大人と比べれば語彙が少なく上手く説明する事が出来ないけれど言葉を選んでゆつくりと丁寧に話せば伝わるんです。それに子供なりに心の中では結構難しい事を考えていました

るんです。だから俺は昴の気持ちを尊重したいと思うし大人の考えを押し付ける様な事はしません。子どもは親を選べないですから」

「そう言い切つて駅に向い歩きはじめ振り返る。

彼女は背筋を伸ばして何かを振り切るかのように颯爽と歩く後姿が目に入った。

実家に戻り皆で食事をし昴を風呂に入れて寝かしつける。

台所の冷蔵庫から缶ビールを持つて居間に向かつた。

「ご苦労様。で、どうだったの？　会つて来たんじよ。どんな人だつたの？」

「母さん、そんなに矢継ぎ早に聞いたら典彰が答えられないだろ？」
堪らず機関銃の様に質問攻めにするお袋を親父が制した。

「良く判らないって言うのが本当かな」

「そうよね。大体、あんな可愛い昴ちゃんを置いていく人だもんろくでもない人に決まつているわ」

お袋たちには悪いがあまり詳しい事を話さない方が良い気がした。

「一応、昴の事は心配していると言うか」

「男でも出来て逃げ出したに違いないわ」

「それは違うと思う。多分、俺の勘だけぞ」

「ノリに何が判るの？　本人に聞いた訳じゃないんでしょ」

「まあ、そうだけど。俺だつて営業で飯を食つているんだ。人を見る目はある方だ」

「そうね」

「それと昴の苗字をどうするのか聞かれたよ。小学校に行くよくなつた時に保護者と同じ方が良いんじゃないかなって、そうしないと虐めとかつて」

「それはお母さんもそう思つわよ。だつて女の苗字なんて結婚すれば変わるのだから」

「ええ、そんな物なのか？」

「当然じゃない」

そういう事を彼女も聞いたかったのだろう、まるで子供の様に語彙が足らないのか。

「まあ、兄貴は結婚して男なのに苗字が変わったけどな」

「驚いたのよ、いきなり宗つたら婿養子になつたって言いだしして」

「はあ？ 聞いてなかつたのか？」

「ええ、あんた知つていたの？ 何で教えなかつたの」

「まあ、兄貴もそのつもりだつたんだろ。教えれば反対するだろ」

「当然でしょ」

「向こうの家が猛反対だつたからな、自分の両親にまで反対されたくなかったんだよ」

「あの子は優しいからね」

「悪かったな、優しさのかけらも無くて」

「でも、あんたも丸くなってきたわよね」

「歳だ、歳の所為！」

これ以上この場に居たら次に何を言われるのか目に見える。ビールを一気に煽つて昴が眠つている部屋に向かった。

次から次へ

年末が近づいてくると営業部内も慌ただしくなってくる。

それは何処の会社も同じようなものなのだろう。

そして野田の営業成績は日に見えて伸び始め、それに追随する様に俺の営業成績も上向きに方向修正してきた。

すると見下していた奴等が慌てだし課長からも発破をかけられ導火線に火がついたかのようだ。

中田先輩から見れば俺もまだまだひよっこ扱いされてしまうだろう。

そんなひよっこが今や後輩に仕事を教えている。

何だか笑ってしまう。

そんな俺にはまた一つ悩みが……

「ん？ 昇。今日はびびったんだ？ いつもくつ付いて寝ているお前が」

起きると昇が自分の布団で丸まる様にして寝ている。体を起こして布団に手をつくと冷たいものを感じ布団をめぐると世界地図が布団に書いてあった。

「うお、俺じゃないよな」

すると昇が起きだして俺の顔を睨みつけている。

流石の俺でもどんなに小さくても女の子にお前がしたのかなんて聞けるような心臓は持ち合わせていない。

「汗だな、汗。布団を干すから手伝え」

「汗なのに？」

「汗だからだよ」

渋々、昇が布団からシーツを外すのを手伝った。

ある晩は目を覚ますと昇が着替えをしていて、布団には世界地図が広がっていた。

理由が判らずネットで調べても諸説書かれていて意味が判らず困惑

氣味だつた。

社食でランチを食べていると熊谷さんが俺の前に座つた。

「流石、中田仕込みの沢渡君は違うね。野田君の成績も上向きだし自信が顔に現れてきたよね」

「そうすか？ 元々あいつには力があつたんですよ」

「またまた、謙遜しちゃつて。で、どうよ」

「まあ、ぼちぼちですよ。まだ何もかも始まつたばかりで。そういう言えば熊谷さんちのお子さんつておねしょしますか？」

「うん、まだ小さいからね」

「そうですか。実は昂もするんですよ、最近。本人も気にしているし調べても判らないことだらけで」

「そうだね。子どもつて驚くくらい寝汗をかくけどこの時期には流石に無いわね。その分トイレの回数は増えるけど」

「あつそうか。俺も子どもの頃良く言われてました『寝る前にトイレに行けって』寒さの所為かな」

「着実に沢渡君も親になつてくね」

「まだまだすよ。それに時々夜中に夢を見たのか泣いてい時があるんです。そんな時はなんだか無力に思えて」

「そつか、お互いに大変だね。そんな時は優しく抱きしめてあげな、嫌な事が夢に出て来たのかもしれないから。それにさ、最初から親の人なんて何処にもいらないんだから」

熊谷さんに言われて気付かされる。

親が子どもを育てる様に子どもが親を育て一緒に大きくなつていくんだと。

「そう言えば忘年会はどうするの？」

「無理すね、昂が居るから」

「もしかして煙草も止めてあれから飲みにも行つていないの？」

「ええ、もっぱら家飲みですね」

「ええ、忘年会に参加しようよ。私も子どもを連れて参加するから

る。そ�だ今年から子連れ忘年会にじよつ。私が幹事に提案してお
くから

「それつて熊谷さんが飲みたいだけじゃ」

「良いから良いからね」

熊谷さんが席を立つと入れ替わりに野田と野田の同期の奴が現れた。

「あの、今良いですか?」

「どうした」

「実は営業で困っている奴がいてアドバイスをもらいたらと」

「一応、聞いてやるけどトラブルは自分で何とかしろよ。そうしないと同じ事を繰り返すぞ」

「はい」

最近は野田からの質問も増えたが他の営業から相談されることも増えてきた。

それはきっと良い方向に向いてきてるのだろう。

「昴、寝る前にトイレに行つて来いよ」

「行つたよ」

「あんな、す。あつ」

昴の髪の毛をドライヤーで乾かした後につでに自分の髪の毛もとスイッチを入れた瞬間にブレーカーが落ちたのか家中が真っ暗になった。

元々、爺さんが一人暮らしをしていた家でアンペアが少ないので配線が古くなっているのか大雨が降ると時々落ちる事があつたが気になしで暮らしていた。

昴と暮らし始めて生活が変わつてきているのを感じる。

「ん~ 一度調べてもらつか。昴?」

ブレーカーを上げに行くために立ち上がりつとして昴に声を掛けると無言のまま抱き着いてきた。

「昴、苦しいよ。もう少し離れろ」

「いや!」

首に思いつき抱き着かれたまま携帯の灯りを頼りに玄関先に向かいブレーカーを上げると直ぐに電気がついた。

「お前、暗いのが怖いのか」

「だつて、まつからでひとりはいやだもん」

目の前にいる昴が俺から視線を外して俯き顔が暗くなる。

兄貴は技師として天文台で働いていた、夜中に呼び出されて寝ている昴を置いて出る事があったのかもしれない。

それに近所の人に預けられた時も独りで寝ていた可能性もある。

そんな時に真っ暗な中で目が覚めたらどんなに不安になり心細いだろう。

「大丈夫だよ、俺が居るだら」

「う、うん」

「それとお前、トイレに行つてないだろ？ 俺が使った時のままだつたぞ」

「だつて、こわいんだもん」

「毎日、俺がついて行つてやるから」

「う、うん」

「それとウソも無しだ。おねしょの事も気にするな」

「あ、あれは汗だもん」

「良いから聞け。昴はまだ小さいんだから気にする事は無い。まあ、体は大きいほうだけど可奈は昴より体が小さいけどもう大人の歯が生えてきている。皆と同じなんて事はないんだよ」

「ええ、おどなのはがはえるの？」

「そうだ、子どもの歯が抜けて」

「ええ！ はがぬけるの？」

再び昴の顔が強張った。

次から次へと色んな事が起き、その度に心が少し揺れる。でも、こんな時は俺が落ち着かなきゃいけないんだ。

「ん、体が大人になつていくつて事だよ」

「じゃ、わたしもノンみたいになるの？」

「ならねえよ。やうだな…… 昇は少しづつお姉さんになつていくんだ」

「ほんとうに？ おねえさんになるの？」

「ああ、遅いからトイレに行つて寝るわ」

「トイレにいつてもしちやつたら？」

「乾かすだけだ。昇がおねしょなんてしなければ俺は殆ど布団なんて干さないからな」

「うわあ、ばつちー」

「ばつちー言うな。干してるだろ！」

「えへへ」

昇が笑顔になりその笑顔を見るとホッとする。

小さなボートで昇と2人でこれからも大小様々な色んな波をいくつも越えていくのだろうか。

いつも屈ぱりの静かな海なんてあり得ない。

どこの世界だつて同じようなものだ。

「沢渡さん、最近はびうですか？」

「ああん、変わらねえよ」

「沢渡さんじやなくて昇ちゃんですよ」

昇の事を聞かれる度に営業部の雰囲気が少しづつ柔らかくなつてゐるのを感じる時だ。

家庭持ちの連中が昇の事を気にかけてくれている。

「大変だよ、おねしょしたり夜中に泣いたり」

「そつすよね。でもうちなんか英語を習わすつて嫁が

「はあ？ お前の子つてたしか」

「日本語もまだ覚束ないんです。でも嫁がバイリンガルだつて張り切つちやつて。昇ちゃんには何か習わせないんですか？」

「そう言えば何も考えてないつていうか考え方なかつたつていうのが本当の所かな」

「嫁曰く、習い事は早いうちからが良いらしいですよ

「そう言つもんなのかね」

確かに保育所に迎えに行くと他のお母さん達が色々と話をしているのを聞く事がある。

ピアノだのダンスだの水泳とか。

そう言えれば俺が子どもの頃は習字とか算盤とかあつた気がする。昇に習い事ね、毎日が精一杯なのにこれ以上は無理かも。

正直、他の親はどうしているんだろ？……

すると課長に呼ばれた。

「沢渡君、今ちょっといいかね」

「はい、なんですか？」

「いじじやちよつと」

「はあ」

使つていらない小会議室に連れて行かれてしまつ。

「あの、課長？」

「沢渡君は社内の噂を知つてゐるね」

「ええ、まあ」

それはガラの悪い連中が会社の周りをうろついているらしいこと言つものだつた。

直接、何かをされた訳ではないらしいけど。

「実はね。今日1人の女子社員が私の所に相談しに来てくれてね。どうやら君の事を聞かれたらしんだ」

「はあ？ 僕の事をですか？ また、何で？」

「その子の話では結婚しているのかや家族の事を聞かれたらしい。まあ、その子は怖くなつて逃げ出して何も言わなかつたらしいが」「はつきり言わせてもらえば俺自身にも意味が分かりません。最近変わつたと言つのは昇と暮らし始めた事くらいで。あつ

「何か思い当たる事でもあつたのかね」

「別に」

「彼女には決して口外しないように言つてあるから」

「ありがとうございます。何かあれば直ぐに報告しますので
「頼むよ。君もやる気を出して来てくれた矢先だからね」「
少しだけ気になる事があったが確信があつた訳ではない。
現時点では言うべき事じゃないだろう。

昴を迎えて行くとそこに聖司君のお母さんつまり未来さんが小走りで迎えに来た。

「こんばんは、あれ以来ですね」

「ええ、普段は仕事を中々抜けられなくて」

敢えて何も聞かずに普通に接するのが一番だと思つ。

俺なんかに内輪の話などしてくれるとは到底思えないし、それは仕方がない事なのだと自分に言い聞かせる。

「そう言えば聖司君は何か習い事とかはしていないんですか？　あの。同僚が英語を習わすとか今日言つてまして、他のお母さんなんかも習い事がどうのつて」

全然、普通じゃねえじゃんか俺。

そんな自分が情けない様な恥ずかしい様な。

「うふふ、何も習わせていませんよ。保育園だけで精一杯で」

「あ、うちもす。あの、俺が精一杯で」

何だか急に感じが変わった気がする。

柔らかくなつたかと言うか、壁が亡くなつたと言つべきか。

基本、女人が苦手な俺にとつてこの距離感は嫌な意味じやなくて恥ずかしい。

「それに私の仕事の所為で聖司には我慢ばかりさせつていて、私達が悪いんですけど聖司も無愛想な子に育つてしまつて。中々友達ができなくて。でも、家では元気で明るい昴ちゃんの事を良く話してくれるの」

「で、どんな親なのかですか？」

「すいません。私つたら」

「構わないすよ。俺は親ですら無いですからね」

「そんな事はありません。ちゃんとした家族にしか見えません。うちなんか……」

彼女の瞳に光るもののが浮かんでいる。

グッとくるものを押さえて大人の対応を心がける。

「何かあつたんですか？ 例えば旦那さんの事とかで」

「そうですね。あんな所を見られちゃつたんですものね。隠しても仕方がないですね。実は私の旦那は定職にも就かず毎日の様にお酒とギャンブルに嵌まって、逃げ出す度に見つかってしまって。遠くに逃げれば良いんでしょうけれど聖司の事を考えるとそれが出来なくて」

結婚していくこの人は独りで子供を育て、子どもの事を一番に考えているのがよく判る。

世の中には酒とギャンブルや女に溺れる定番みたいな男は何処にでも存在し家族を苦しめている。

「そうだったんですねか」

「それが今度は話し合いをしようつて言われたんですね

「話し合いですか？」

「ええ、これから先の事をつて」

酒とギャンブルに溺れて奥さんや子供もを感情に任せて平氣で手を上げる様な男が何の話し合いだ？

旦那の直ぐ後ろに黒い影が動いている様な気がする。

大体、俺の姿を見て逃げ出すよつた男が考えつく様な事は、彼女の旦那の事を何も知らない俺にでも判る。

「で、会うんですか？ 会つてどうするんですか？」

「出来れば別れてくれるよ」

「出来ますか？ あの旦那さんを相手に」

「怖いけどするしか。そうしないと前に進めないと」

昂と聖司君を見ると少し前を楽しそうに手をつけないでお喋りをしている。

この世界を壊す訳にはいかない。

「俺も同席させていただけませんか？」

「それじゃ。沢渡さんに迷惑が」

彼女の瞳が不安で揺れている。

それは他人を巻き込みたくないと言つ事なのだらう。

言つべきでないと思つた事を敢えて口にした。

「実は俺の会社の周りをガラの悪い連中がうろついて俺の事を聞いていたそうです」

「それで」

「多分、俺には他に原因が思いつきません。恐らく田那さんは俺が通りすがりの男じゃないと思つて居るのでしょ?」

「そんな、でも」

「それじゃ、もし未来さんと俺が逆の立場だったらどうしますか?」

「昂ちゃんまで、判りました。宜しくお願ひします」

皆まで言つまでも無く理解してくれたようだ。

未来さんが俺に深々と頭を下げた。

2人の前を何も知らないで楽しそうに歩く無邪気な笑顔が唯一の救いだつた。

あの後、連絡先を交換して別れ。

携帯でやり取りをし離婚を本当にするのか確認を取つた。

そして話を詰めていく。

恐らく相手側も用意周到に準備している筈だ。

それに立ち向かうにはこちらもそれなりの準備をしなくてはいけない。

場所と時間の指定、それに離婚するための書類作り。

それらを彼女に聞くと初めて聞いた言葉ばかりで戸惑つて居る様だつた。

当然と言えば当然だらう。

離婚なんて結婚と同じで何度も経験する人なんて殆ど居ないのだから。

俺ですら兄貴が星になり昂と出合つまでそんな事は知らなかつた。養子縁組の仕組み。

親権とは。

それにして至るまでの離婚の手続き等。

何に役立つか判らず漠然としながらも昂が大人になつた時の事を考
えて必死に調べた賜物だった。

神の思し召しか。

兄貴のおかげと言えば良いのか。

流石に今回は昂の友達とは言え男の子を一緒にお袋や親父に預ける
訳にも行かず無理を言つて美紀さんに預かつてもう事にした。

可奈も居る事だし何より昂が一緒なら安心だろう。

そして話し合いが拗れれば相手が暴力に訴え押し切られる可能性も
否定できないと言つより相手は鼻からそのつもりなのかもしない。
こちらも対抗手段を講じなければ未来はないのだろう。

最悪の場合は昂にまで危険が及ぶ事になりかねない。

そんな事は絶対に許される事じゃないし俺が全力で阻止する。

携帯を取り出してこんな時には絶対に手助けしてくれる奴の番号を
コールした。

「尚哉、久しぶり。若い奴の手を借りたい。数人で良いから。それ
とお前はいらないからな」

日時と場所を告げ近いうちに顔を出す事を約束する。

そして、彼女には決して感情的な発言をしない事。

俺に聞かれた事に対して明確に意思表示する事と念を押しておく。
彼女が怯え取り乱せば相手の思つっぽだと付け加えて。

こちらが指定した場所に時間どおりに向かう。

場所は自宅からは遠い郊外のファミレスだった。

駐車場は広いし何より見晴らしが良い。

天気も抜ける様な青空に真っ白い雲が流れている。

未来さんはお迎えの時にしているグレーのパンツスーツ姿でベージ
ュのコートを着てこの間とは違つ色のマフラーをしている。

俺もいつもと同じダークな色合いのスーツだが、弱冠ダークさを

強調してみた。

そして俺の力バンの中には先田の未来さんの診断書や数枚の書類と未来さんの署名捺印済みの離婚届が入っている。未来さんの表情は緊張と恐怖心で強張ったままで仕方がないと言えばそれまでだつた。

「大丈夫ですよ。聖司君のお母さん」

「はい」

「行きましょう」

俺まで緊張していれば話し合いどころではなくなつてしまつ。笑顔で未来さんの肩を叩くと表情が緩やかになつた。

ファミレスにはまだ先方は現れていないようだ。

とりあえず喫煙席に案内してもらひ。

「どうして喫煙席に？」

「禁煙席は、ね」

広い店内の禁煙席を見ると週末と言う事もあって子ども連れの家族がランチを楽しんでいる。

最近はたばこの値上げや健康志向から年々喫煙率は下落していた。それにファミレスでタバコを吸つのは外回りのリーマンが多い、俺もそうだった。

席についてしばらくするとあの晩に未来さんを殴り飛ばして金を持ち出した旦那と田つきの鋭いスーツ姿の男が現れた。

「ホットを4つ」

「ホットコーヒーを4つですね。畏まりました」

店員がハンディーに打ち込みをして復唱しあ辞儀をして下がついく。

「やはり、あなたが一緒でしたか。こちらとしても都合が良い」

それがスーツ姿のいけ好かない男の第一声だつた。

「私は彼女のただの代理人みたいなもんですよ」

敢えて彼女の名前は口にしない。

見るからに裏の影をまとった男は、じらりの口ぶりから2人の関係の近さを探ろうとしている。

「私はこいつ言うものです」

男が差し出した名刺にはコンサルティングやらいろいろな事が書かれているが、それを信用する訳がない。

「私の事はお調べになつたみたいなので名刺を渡すまでは無いでしょう」

「さあ、何の事が判りかねますか」

「彼女の代理人の沢渡と申します。では本題に入りましょうか」のらりくらりと核心を外しながら男が話しを進めていく。
要は旦那に多額の借金がありそれを肩代わりして高給な夜の仕事でもしてはどうかと言う事だつた。

だがその実は彼女の骨の髓までしゃぶりつくのが狙いだろ。

今時にしては珍しい鉄板な話だつた。

いかに相手が小物なのかが良く判る。

しばらくすると喫煙席は見るからに強面のスース姿やジャンパー姿の男達で埋まつていた。

尚哉の奴、数人で良いと言つたのに恐らくお前はいらないと言つた仕打ちがこれなのだろう。

その中には数人だけ見知った顔があるのを確認した。

周りの雰囲気に呑まれて未来さんがハンカチで額の汗を拭つてゐる。見ると手が小さく震えていた。恐らく旦那の横にいる男の仲間だと思つてゐるのだろう。

そつと相手から見えないテーブルの陰で未来さんの手に手を当てる
と驚いた様な顔で俺をちらつと見た。

そしてこちらは相手の戲言を一切無視して一気に核心に向かつて話を切り出した。

「彼女は借金を肩代わりする気など毛頭無いです。今日ここに来たのはそちらの旦那さんと離婚する為に出向いたのです」

旦那を見ると『えつ』と言つ顔をしているがスース姿の男は全く動じていない。

当然、離婚の話になるだろうと踏んでいるのが良く判る。

「そんな事が簡単に出来る訳がないでしょ。ガキじゃあるまいし」「別に構いませんよ。裁判を起こしてもそちらに勝ち目がないのは火を見るより明らかですから。これが先口、あなたが彼女に暴力をふるい病院に行つた時の診断書と医師の所見の証明書のコピーです。それと医師の話では複数回の暴力を受けた形跡があると証つ事で警察にと言われましたが彼女が問題を大きくするのが嫌だと断りました。最近は病院もDVに対しても大変協力的ですから」

本当のところ俺は昂の治療が終わると会計を済ませて病院を後にした。

彼女を診察した医者は恐らく昂を診察した医者と同じだろうが、複数回の暴力をうんぬんと言つ話は聞いていないと証つより聞く事なんて出来る訳がない。

相手を揺さぶる完全なブラフだが隣に座つている未来さんは当然俺の嘘に気付いているだろう。

「貴様は一体何者なんだ？」

「ただのリーマンですよ。まあ営業の仕事柄色々とね。それとこちらの書類は彼女が受けた身体及び精神的苦痛に対する慰謝料の金額と息子さんの養育費についての書類です。確認願いますか？」

旦那の田の前に2枚の書類を差し出すと旦那が書類に田を落とした、恐らく金額を見ているのだろう。

それもこちらの狙い通りだつた。

慰謝料はDVで離婚する際の平均的相場の300万。

そして養育費は月々いくらかではなく金額を大きく見せる為に大学を卒業するまでの総額をわざと記載してある。

「こんなに払えるか！」

「いえ、お支払いただかないと困ります。こちらが裁判を起こせば僅差なくこの金額が確定すると思いますが」

「一体、どこまで」

狼狽える旦那を横目に男にも動搖の色が伺える。
こちらの思惑に一気に嵌めていく。

「私は弁護士でもありませんから。法律等の事を調べるのにも限度がありますので離婚協議書にそちらのサインと判をいただいて公正証書の手続きを取るくらいしか出来ませんから。最初に申し上げたはズですよ。ただの代理人だつて」

相手がど素人だと確信したのだろう男の口元が緩んだ。
それは型に嵌まつた瞬間だつた、お互いに。

「舐めた真似をしてくれるじゃねえか。こんな物に名前なんか書けると思つてんのか？　さつさとこちらの言うとおりにしていれば親子共々痛い目を見なくて済むと言うのに」

「親子共々ですか。見るとそんなあなたにも家族がありそうですね」「何だと俺の女房子どもは関係ネエだつが」

「そうですね、そちらが暴力的に問題を収めようと言つのならこちらにも考えがありますから」

落ちた、男が言わなくとも良い自分の家族の事を口にした。
大きく息をついて男が付き返した書類を両手で整える。
そして左手を軽く上げて手首を軽く振り合図をする。

周りに座っていた強面の男達が騒然とし1人の黒っぽいスーツ姿の男が立ち上がりこちらにゆっくりと歩いてきた。

髪の毛は綺麗に後ろに流しその耳つきは日本刀の様に切れている。

「兄貴、お呼びですか？」

「周りの迷惑になる。表で待つて」

「判りました」

スーツの襟元の金バッジが揺れて男が日本刀の様な目で合図をすると騒然とした男達は波が引くように表に出ていった。

ファミレスの窓から外を見るとピカピカに磨き上げられたスマート張りの高級セダンが数台並んでいた。

それを見た男がガタガタと震えだした。

「た、瀧川がな、なんで」

「おや？ 連中がどこの者がご存知のようですね。俺はあいつ等の元締めと不思議な縁で杯を交わした仲なんだ。俺が言つた『家族』の言葉の意味が判るよな」

その後の話は流れる様に進んだ。

慰謝料や養育費なんて酒とギャンブルに溺れる人間に支払い能力が無いのは一目瞭然で、尚且つ借金を抱えていれば尚更だろ？

それは初めから未来さんに確認はしてあつた。

彼女の願いは旦那の暴力から逃れ、聖司君と2人で静かに暮らす事だけだつた。

離婚届にサイン及び捺印してもらい誓約書を書いてもらひつ。

今後一切、彼女と聖司君に係わらない事。

親権の話も簡単にクリアーして署名捺印させる。

「それじゃあんたに連帯保証人になつてもらおうか」

「な、なんで俺が」

「あんたがこの話を持つてきたんだろう。連帯保証人にならなくても今後何かあれば根絶やしになる事は覚悟しろよ」

俺の言葉に男が力なく連帯保証人の欄に署名捺印した。

これで離婚届を週明けに役所に提出して授受されれば離婚が成立して彼女に静かな暮らしがやつて来る筈だ。

「帰りましょう。未来さん

「は、はい」

ファミレスを出るとあいつらが車の前で待つてているのが見える。

そして後ろから旦那と男が出てきて逃げ出すように車に飛び乗つて走り去つてしまつた。

あの元旦那にはこれから生き地獄が訪れるのは確実だらう。それは自業自得と言うやつだ。

「悪い、ついでに駅まで連れて行つてくれないか」

「うす！」

スーツ姿の男が後部座席のドアを開けて待つてくれる。

「乗った、乗った」

未来さんの背中を押して車に乗るよつに促し俺が乗るとドアが静かに閉められ車が走りだした。

しばらくして駅のロータリーに着き車から降りる。

「尚哉によるしづな。約束通り後から顔を出すから」

「判りました」

男に声を掛けるとその顔に日本刀の様な鋭さなど微塵も感じられない。

走り出す車から数人が笑顔で手を振っている。

後から尚哉達に何を言われるのか容易に想像がつき肩を落とした。未来さんを見ると疲れ切った表情をしているがどことなく清々しいような気がする。

「疲れましたね。大丈夫ですか？」

「本当に驚きぱなしです、あんなに用意周到に準備していたなんて。何で最初から教えてくれなんですか？」

「敵を欺くには身内からつて言うでしょ。常套手段と言つ奴ですよ。暴力に怯えていた未来さんが落ち着き払つていたら相手だつて不審に思つでしょ。でも上手くいつて良かつたです」

「本当に怖かつたんですから。強面の人達に囮まれて、皆さん役者さんかなにかですか？ 演技が上手でしたね」

「あれ？ 聞いていませんでしたか。昔、元締めと不思議な縁で一杯を交わしたつて。あいつらは本業ですよ」

「本業つて？」

「俺に呼ばれて来たのは……組の若頭でつて、未来さん？ うわあ。た、タクシー！」

俺が大きな声で言えないの耳打ちすると未来さんの体から力が抜けて思わず抱きかかえてしまった。

何だかとても柔らかく良い匂いがするがそんな事を気にしている場

合じやなかつた。

彼女をタクシーに乗せ昂と聖司の待つ美紀さんの家に向かつ。

「またかい？」

見覚えのあるタクシーの運転手に笑われてしまつた。

会社の忘年会の日がやってきた。

場所は会社から数駅離れた大きな駅の前だつた。
この駅は私鉄や地下鉄それにJRが乗り入れていて俺もこの駅で乗り換えして会社に行つている。

結構、この駅を利用している社員は多い筈だ。

「沢渡君、今日は当然参加だよね」

「あつ、熊谷さん。昴を迎えてから顔を出します」

「会場はばつちり私が選んだからね」

「ああ、子連れ忘年会会場ですか？」

「そう、皆喜んでくれてたよ。特に女の子はね」

今まで子どもが居る女子社員が参加する事は少なかつた。
それは子どもの面倒を見ないといけない為とそういう場所に子ども

を連れていく事を躊躇つてしまつからだ。

俺自身も実際のところ居酒屋なんかに飲みに行き子連れが居るところに子どもを連れて来る親の気持ちが判らなかつた。

でも、親だつて時にはストレスを発散できる場所が欲しい筈だ。

それでも酔つ払いが居る場所に昴を連れて行くのは正直考えてしまう。

「遅くなりました」

「おお、沢渡い！ 遅いよ」

「うわあ、寄るな酔つ払い。昴が怖がつてゐるだらう」

案の定、昴は俺の脚の後ろに隠れてしまつてゐる。

忘年会会場は人数の割には広い座敷になつていて確かに開いているスペースで子ども達が遊んでいてこれまでにない雰囲気になつてゐる。

子どもたちが来ると云つて誰かがおもちゃなんかを準備してゐた

みたいだ。

ねこ耳のカチューシャや小さなぬいぐるみなどで遊んでいるのが見える。

普段の飲み会には顔を出さない女子社員も楽しそうにグラスを傾けてお喋りに花を咲かせている。

「昴ちゃん、初めまして。うお！ 何？ 何なのこの可愛さ加減は

？ 本当に沢渡君のなの？」

「あの、酔つてます？ 熊谷さん」

「素面よ、失礼ね。お世辞抜きにこんなに可愛い子だなんて思わなかつた。昴ちゃん、じつちにおいて。ほり、沢渡君がエスコートしてあげなきや」

「あい、すんません」

テーブルに着くと俺の直ぐに田の前に生ビールが置かれ乾杯をする。

「お疲れ！」

「うーす」

「昴ちゃんは、オレンジジュースで良いかな？」

「はい、美味しいよ。たくさん食べてね」

「将来、有望だな。俺の息子の嫁さんに」

「コラコラ、沢渡君の顔が引き攣つっているから」

水野課長は別格として家庭持ちの奴等は子どもの扱いが上手いのに気付く。

普段はギャルっぽい格好をしている女子が昴に料理を取り分けてくれている。

何だか目から鱗つて感じだ。

それは昴が居なければ判らなかつた事だらけだつた。

昴はと言えば一頃り料理を食べて小さな子ども達と遊んでいる。凄く微笑ましい姿に目に映る。

「おーい、沢渡君。お父さんの顔になつてるよ

「いや、なんだか保育園でもあんな風に遊んでいるのかなって」「そつか、普段はあんまり保育所の生活つて見ることが無いもんね。

でも、昂ちゃんは小さい子が好きみたいだね」「好きと言つた昂は小さな島で育つたからだと思います。島じや大きな子が小さな子の面倒を見るのが当たり前みたいなんだ。現に

俺が島に行つた時もそうでしたから」「でも、お父さんが急に居なくなつて寂しくないのかな」「それは寂しいと思いますよ。まして昂の父親と俺は瓜二つだし」「そつか、でも昂ちゃんを見ているとそんな事を感じさせない沢渡君はもつと凄いとおもうよ」

「俺なんかまだまだすよ。戸惑つ事ばかりで周りに助けられて。でもお蔭で視野が広くなつた気がします」

「よし！ それじゃ、その広がつた視野でじやんじやん成績を伸ばしなさい」

「熊谷さんには敵わないな」

俺の背中をバシバシと叩いて他の席に移動してしまつた。宴もたけなわになつてゐる、昂に声を掛けてから席を外す。

「昂、便所に言つて来るからな」

「もう、トイレつて言つて。ノンのばか」

「すんまそん」

「あはは、沢渡が昂ちゃんに怒られてやんのー」

「つるへー！」

同僚にからかわられ睨みつけると周りがどつと沸いた。そんな事すら少し前ならあり得ない事だつた。

トイレを済ませ会場に戻ると会場の奥の方に暗雲が立ち込めていた。見るからに土砂降りの雨が降りそつた。

「何だよ、沢渡ばかり」

「そつだな、ちょっとばかり成績が上がつたからつて学校にもこんな奴らが居た気がする。

普段は成績の悪い奴を見下しているのに、そいつが上に上がつてきて注目を浴びると嫌味を言う奴ら。

何も変わらずに大人になってきたんだなと思う。

そしてそんな態度をとる人間を熊谷さんは一番嫌っていた。

「何なの？ あなた達は自分のケツに火が着いたからつていい加減にしなさいよね」

「俺らだつて中田先輩についていれば」

「へえ」 中田君が怖いから厳しいからつて逃げ回っていたのは何処の誰でしたつけ

「それはあいつが」

「それ、本気で言つてんだ。 あんた達」

熊谷さんの口調が変わった。

現役バリバリの頃の熊谷さんの口調だ。

それは女だからなんて言わせない、男になんて絶対に負けないと言う確固とした絶対に折れない真っ直ぐな芯からくるものだ。

それがあるからこそ周りの皆は一日置いていた。

「野田、ちょっと来な」

「は、はい」

熊谷さんに呼ばれ野田が恐る恐る腰を上げて席を立つた。

「あんた達は1日どれくらい営業に回つてているの？」

「アポなしを入れて15くらいですよ。先方と会つてている時間と移動時間を考えたらそんなもんですよ」

「野田、今日は何軒回った？」

「えつと23件です」

「聞いたか？」

「そんな無茶苦茶な」

「1日の目標をこいつらに教えてやれ」

野田が口ごもる様に渋々話をし始める。

「あの一応20件です。最初に回る順番を組んで移動中にも近くにある営業先に連絡を入れて顔をだして、アポが取れなくても出来る

だけ顔を出せつて先輩が。それと田標は無理だと思つても絶対に下げるなつて」

「いい事を教えてやる。中田の出した一日の田標は30だ。お前らはある意味正解だよ、絶対に着いていけないし泣き言を漏らしていただろひつよ。それともひつ沢渡から引き継いだ営業先を返してみるか、あいつに？」

「何で今更そんな事をしなきゃならないんですか！」

「あの事故の後、とりあえず今は代理で良いから沢渡が復帰したら元に戻してくれって言つてきた取引先ばかりなんだ。それを復帰した沢渡が先方に頭を下げてお前に引き継いだんだ。その上に胡坐をかいてきたくせに」

熊谷さんがヒートアップして言わなくとも良い事を暴露してしまつた。

それは俺のためを思つての事だろひナビのままじやーの場が氣まづい雰囲気に呑みこまれてしまつ。

仕方なく昴を呼んでねこ耳のカチューシャをつけてみた。

「おお、黒猫マノンの友達見たいだぞ。昴」

「ほんとう? にゃん」

昴が嬉しがつて手を丸めて猫の真似をしている。

少し色素の薄い昴の髪に茶トラのねこ耳が似合つてないかと言えば似合いすぎるほど似合つてこむ。

『すまん、昴。出しに使つて』心の中で手を合わせ頭を下げる。

「ほり、熊谷さんに見てもらへ」

「うん!」

嬉しそうに熊谷さんに向かつて昴が突進していく。

「進君のお母さん。にゃん」

「きやーねこ耳、超可愛い! 昴ひゃん。抱つひゃせひ。きやー女

の子つて柔らかいし良い匂いがする。よーし飲み直すぞ!」

「熊谷さん、こつち向いて!」

「ああ、
するい私も」

皆が携帯を取り出して昴を抱き上げた熊谷さんをカシャつていた。

「楽しかったね」

「さうだな、肩車してやるうか」

「アーニー、お前は？」

「それじゃあ、まっすぐあるかなことあがぶないよ。てー。」

「あーい」

あの後は扇のおかげで場の雰囲気は一
変、ハリウッド風の「一度見たら二度見
たくなる」映画館へ

۱۰۷

翌朝、一日酔いで俺が昇に叱責される羽目になってしまった

街中はクリスマス一色に染まっている。イルミネーションが光りクリスマスカラーの緑や赤のリボンが風に揺れている。

昴との初めてのクリスマスだと言つてあまり普段と変わらなかつた。

とりあえずクリスマスケーキなるものは予約してありプレゼントも隠してある。

昴を抱っこしながら昴が島に居た頃のアルバムを見ていた。

「これはね。なっちゃんだよ。でね、ここがジョンビーチ

「へえ、綺麗だな」

しかし、何処を見ても母親の影すらない。

いや、待てよ写真を撮るのは好きだつて兄貴は書いていたなつて事はまさか。

「なあ、昴。この昴と兄貴の写真を撮つたのつて誰なんだ？」

「りょうこさん

やつぱり、母親の写真が無い理由を今理解した。

慌てず普通に、あくまで普通にだぞ、俺。

「なあ、りょうこさんつてどんな人だつた？」

「んと、いつもこわいかおしておこつているの。でね、ときどきふねにのつてしまらないところにいくの。パパといつしょがいいのだからりょうこさんはきらいなの」

彼女も昴が心を開いてくれないと言つていた。

「一体なにがあつたんだ？」

昴の問題か、または彼女自身の問題か。

考えられるのは後者の問題だつ事は直ぐに見当がついた。それが不憫で兄貴は……

今となつては知る術も無かつた。

「なあ、昴。今日はクリスマスイブなんだつて、何が食べたい」「チキン！」

「はあ？ チキン？」「

「うん、あげてあるやつ」

「あ、ああ。テレビでやつてる奴か。白いおじさんが出てくる奴」「うん。せいじくんのいえもきょうはチキンって言つてたもん」俺はアジの開きとかサンマの塩焼きつて言われたらどうしようかアクションに困つていてホツと胸を撫で下ろした。

定番のチキンで良いのならお安い御用だつた。

昴と買い物に行き予約したケーキを持って帰つてきた。
テーブルの真ん中にはケーキにフライドチキンが並びサラダや煮魚が一緒に並んでいる。

未来さんも聖司と2人でクリスマスなのだらうか。

春菜はタフガイとデートだらう。

可奈は美紀さんと変わらずなのかな？

親父とお袋はクリスマスつて柄じゃないか。

それぞれの家庭に楽しそうな明りが灯つているのを感じる。

そして今年からは俺の所にも。

しかし、殺風景な家の中だなツリーすら用意してやるのを忘れてしまつていた。

それなのに昴の瞳はキラキラと嬉しそうだ。

「食うか」

「うん！」

「ピンポン！」

「誰だ？ チャイムの音なんて久しづりに聞いたぞ」

小さな古い家なので玄関先で呼べば聞こえないなんて事はまずいない。

だから、俺の家に来る連中はチャイムなど鳴らさずに声を掛ける。

玄関に向かうとすりガラスの向こうに大きな赤い生き物が蠢いているのが見える。

思わず玄関に有つた傘を握りしめ鍵を開ける。

「どちらさま」

「メリーカリスマス！」

「うわあ、何だ？」

俺より背は少し低いが横幅は倍以上もあるサンタクロースが現れた。「だ、誰だ、お前」

メリーカリスマスの声を聞いた昂が出てきてしまった。

「ああ、サンタクロースさんだ。あつ、はるなお姉ちゃん」「えへへ、来ちゃった。典兄、脅かしてゴメン」

「春菜か。と言う事は…… サンタはタフガイか可哀想に」サンタの陰からミースカサンタの格好をした春菜が現れ、俺の言葉を聞いたサンタが目を拭っている。

来てくれた事に感謝はするがタフガイが不憫でならない。

不規則な勤務体制でデートすらままならず折角のクリスマスイブにこんな所にサンタの格好をさせられ連れて来られてしまっている。2人きりでデートのプランでも考えていただろうに春菜に却下されたに違いない。

「ゴメンな、春菜が昂に会いに行くつて言い切ったんだろ」

「……」

「ビールでも飲むか」

「はい」

「サンタクロースが泣くな。しゃんとしる。それと、春菜もつとタフガイを大事にしろよ。折角のイブなんだぞ」

「その言葉をそのまま典兄にお返しします。ツリーも無いイブなんて信じられない。昂ちゃんをもつと大事にしなさい」「すんまそん、来年は」

「来年じゃ遅いの。今年のイブは今日だけなんだから」

「あい」

するとタフガイが大きな体を丸めながら白い袋の中からクリスマスツリーを取り出して組み立て飾りつけを始めた。

「うわあ、クリスマスツリーだ。サンタさんありがと」

「くうつ、話には聞いていたけどめちゃ可愛い。かなり来るかも」「来るじゃないでしょ。昴ちゃんも一緒に飾り付けしよう」

「うん！」

昴マジックと言うべきかタフガイが知らない間に笑顔になつてまんざらでもなさそうな顔をして、昴と春菜の3人で一緒に飾り付けをしている。

すると再びチャイムが鳴った。

「何なんだ今夜は」

玄関に向かうと昴が後ろからついて来て今度は小さな赤い生き物が玄関先で蠢いている。

「今度は誰だ」

「メリークリスマス！」

「親父なのか？」

「あ、おじいちゃんにおばあちゃん」

「昴ちゃん。はい、クリスマスプレゼントだよ」

「うわあ、ありがとう」

「あら、先客が居るの？」

「ああ、大きなサンタと小さなミニスカサンタが来ているよ」「居間に集まると異様な感じがする。

大きなサンタに小さなサンタ。

そしてミニスカサンタまで居る、どんだけ世界中にサンタクロースが居るんだよ。

「馬鹿だね。相手を思いやる気持ちの数だけサンタクロースは居るんだよ」

「それを俺は子どもの頃に聞きたかったよ、お袋」

「あら、 そうだつたの？」

「 そうだつたじや ねえだろ」

「 变ね、 のつぼのサンタさんが居てもおかしくないのにね」

「ええ、 もう1人サンタさんがないの？ おばあちゃん」

「居るはずよ。 ね、 ノリちゃん」

「お袋にちゃん付けで呼ばれたら俺がチキンになるわ！」

小さな家に大きな笑い声が上がった。

「す・ば・る・ちゃん」

「ああ、 可奈ちゃんの声だ」

昴が玄関に飛び出して行き、 小さな小さなミニスカサンタが美紀さんを連れてきた。

「ああ、 サンタクロースがいっぱいだ」

「ごめんなさい典彰君。 可奈がどうしても行くつて聞かなくて」

「 気遣い無用で。 大勢の方が楽しいし、 俺もどうして良いのか判らなかつたから」

「 ありがとう」

皆からクリスマスプレゼントをもらつた昴は大はしゃぎだつた。 プレゼントはダブらない様に前もつて俺の所に皆から連絡が来ていた。

「 それじや」

「 メリークリスマス！」

クラッカーが鳴り、 何もなかつたクリスマスが盛大なクリスマスになつてしまつた。

これも全て昴のおかげなのだろう。

もしかしたら星の上の兄貴からのクリスマスプレゼントなのかもしれない。

翌日、 昴が目を覚ますと枕元にリボンが付けられた大きな黒猫のマノンのぬいぐるみがあつた。

「ノン、おきて。たいへんなの」「あ、何が大変だつて？」

「みてこれ」

昴が嬉しそうにマノンのぬいぐるみを俺の畳の前に突き出している。

「あん？ サンタが来たんだろ」

「どうして、わたしが欲しいものがわかるんだひつ」

「さあな、サンタクロースだからだろ」

「ノンのところにはなにもないね」

「俺の所には来ないよ。俺は大人だもん」

「ええ、おとなになるとサンタさんこないの？」

「ん、ちょっと違うかな。来る人もいるか。でも俺の所には来ないの」

「ええ、ノンがかわいそう」

「可哀想言つな」

「じゃ、わたしがあげる。チユツ」

突然俺の頬に柔らかい何かが当たつた。

頭の中が真っ白になりそのまま布団の上に倒れ込んだ。いつの間にか俺の所にもサンタは来ていた様だつた。

正月は実家に集まるのが沢渡家の習慣になっていた。

兄貴ですら島に転勤してからも必ず正月は戻ってきて美紀さんと可奈を連れて実家に行っていた。

それと春菜に至っては自分の家にこるよりも俺の実家に居る確率の方が高かつた。

そんな場所に例年なら俺の姿は無かつた。

それは正月に出かける奴らの気がしれないからで、それは実家に戻る事ばかりではなかつた。

「今年は帰つて来るんだろうな。昴ちゃんを連れて戻つてきなさいよ」

「ええ、しんどいから良じよ」

「何を言つてゐるの、あんたは本当に親不孝だね」「悪かつたな」

そんな俺が今年に限り実家に向かう電車に乗つていた。

まんまとお袋の策略に嵌まつたからだ。

「ノン、おじいちゃんとおばあちゃんちに行ひ」

「ええ? 正月に?」

「うん、おいしいおまめやおもぢがあるつて」「行きたいのか」「うん」

食べ物に釣られた昴に押し切られてしまつた。

「ノン、みぎだよね」「ああ」

「はやく、はやく」

実家の門が見えてくると昴が俺の手を振り切つて走り出した。

「昴、時々は車が来るんだぞ。走るな」

「はーい、おばあちゃん、おじいちゃん」

「あら、あら。昴ちゃんよく来たね。あら? ノリは

「あそ!」

ため息を付くと昴に指を差されてしまった。

「そんなに嫌ならあんただけ帰りなさい」

「良いのか? 帰つて。知らねえぞ昴に嫌われても」

「そ、それは困るわね」

街よりも数段寒い氣がして居間の炬燵に入り体を丸め暖を取る。街の方が温かく感じるのはヒートアイランド現象の所為だらうか、そんな事を考えていると首筋に冷たい物が押し当てられた。

「うわあ、な、何だ」

「えへへ、ノン。ミカン」

「あのな、心臓が止まるかと思つただろ。最近は情け容赦ないなあ」

昴が俺の横で炬燵に潜り込みミカンの皮をむき始めた。

「ほら、貸せ」

「うん」

蒂の付いた方からミカンの皮をむき始める。

確かにうすると白い奴があんまりくつつかないはずだ。

「ほれ、むけたぞ」

「ありがとう」

「何だか仄々するね」

「何を親父は爺くさい事を言つているんだよ」

「何をつて現に爺ちやんだからね」

「まだまだボウリングなんかして元気なくせに」

「まあ、可奈と昴が大きくなるまではね。そつ言えば昴と可奈は春には小学生だね」

「先の話だよ」

そこにお袋が料理をしていたのか、ひと段落ついたお袋が現れた。

「何を言つているの。ランドセルとかは決めたの?」

「いや、未だだけど」

「あんたね、早くしないとブランド物なんかは無くなっちゃうんだよ」

「ア

「ブランドって普通ので良いだろ?」

「駄目よ、女の子なんだから。最近やたらどんどんランドセルが良いんだい?」

「らんどせる? わかんない」

「もう、ノリがちゃんとしないかい」

「へいへい」

「お父さん、パソコンを持ってきてちょっとだい」

「はあ? パソコン?」

お袋に言われた親父がいそそとノートパソコンを持ってきた。どうして実家にパソコンが?

実際のところ誰が使うんだ?

「お父さんがねボウリング場の予約とかサークルの仲間とかの連絡に使っているの」

「信じられん、携帯すら使こなせてないのよ。この型の古いパソ

コンは何処から?」

「春菜ちゃんが使ってないパソコンがあるからって。全部やつてくれたの」

「まあ、見たところ中身が殆ど空だからネットやメールだけなら十分だと思うけど」

「ほり、ノリ。ランドセルよ、ランドセル」

「へいへい」

ネットを開いて人気のランドセルを調べてみると確かにブランド物が存在するようだ。

俺らの時代は色も赤と黒の2色だけでかなり重かった記憶がある。時代が変わるとこうも変わるものなのかなと実感しきりだ。色もカラフルで無い色は無いんじゃないかなと思える。中には花柄のランドセルまであった。

「最近は色が選べてオリジナルぽい奴まであるのか。ブランド物はつて9万? 原付が買えるぞ」

「うわあ、かわいいのがいっぱいあるね」

そこに美紀さんと可奈がやってきた。

「今年もよろしくお願ひします」

「はい、はい。堅苦しい挨拶は抜きにして楽にしてね」

「昂ちゃん、なにを見ているの?」

「ランドセルだよ」

「わたしも見たい」

「それじゃ、可奈がここに座れ。でこれでこいつを押すんだ。判つたな」

「うん」

横にずれて可奈を座らせ昂にマウスの使い方を教えると直ぐに使いこなし始めた。

いつもながら子ども吸収力には驚かされる。まるで水を吸収するスポンジみたいだ。

「昂ちゃんも小学校なんだね」

「まあ、まだ先ですけどね」

「でも典彰君もすっかり板についてきているみたい」

「それもまだますよ」

結局、昂と可奈のランドセルはお袋達が買ってくれることになり早々と2人に選ばせてネットで注文を済ませてしまった。どんな物が届くかは教えてもらえたかった。

届いてからのお楽しみだそうだ。

喪中と言つ事でお節は無いが煮豆や餅を用意してくれている。

それと兄貴と俺が好きだった豆腐を焼いて甘辛く味付けをしたものがあつた。

「うわあ、懐かしいな」

「あんたが毎年顔を出さないからでしょ。毎年作つて待つてているの

に

「年末年始ぐらいいのんびりをむけてくれよ」

「会社でものんびりしているくせに」

「もう違うよ。お蔭でボーナスもそこそこあつたからな。少しは生命保険の事とか考えないとな」

「あんた、未だそんな事を言つてゐるの?」

「俺だつて忙しいの。色々あんだよ。だけどもつ無茶は出来ないよな、昴が居るんだし」

「そうね、ちやんとしないとね」

「典彰君はちゃんとしていますよ。いつも一番に昴ちゃんの事を考えているし、それにね」

「ああ、あの人は違うから」

「そうなの? うふふ」

美紀さんが言つてゐるのは未来さんの事だらう。

誤解されると困るので釘を刺しておく、お袋が勘ぐつていたが強引に振り切つた。

「ノン、なんだか歯がいたい」

「歯が痛い? どこだ? あーんして」

昴が口を開いて指で奥歯を触つてゐる。

「良く判らないな」

「どれどれ、おばちやんに見せて」

「うん」

美紀さんが俺の代わりに見てくれた。

「虫歯じゃないみたいだけど、一番奥の歯に固い白い物がついてるの。それが歯茎に当たつて赤くなつてゐるみたい」

「ノリ、大丈夫なのかい?」

「俺に聞いても判らないよ。正月明けに歯医者に連れて行くよ。昴、

そんなに痛いのか?」

「ゆつくりかめばへいわ」

「それじゃ、後で歯医者に行こうな」

「う、うん」

まあ、実家に来ればそれでのんびり出来るのだが決まって結婚だの孫だの言わるのがどうにも苦手で遠のいてしまっていた。

つい缶ビールに手が伸びると昂の冷たい視線が注がれる。

「まだ、2本目だ。正月休みなんだから飲ませろ」

「3ぼんまで」

「へ~い」

これではどちらが大人か子どもか判らない。

「そう言えば春菜はどうしたんだ?」

「あら、今年は未だね」

「電話してみるか」

「春菜ちゃんだつて忙しいのよ」

「毎年顔を出していたんだる」

「まあ、顔を出してくなつたらそれはそれで寂しいけれど」「だろ」

春菜に電話すると喪中と云つ事を気にしていたようだ。

直ぐに玄関が開き居間にやつてきた。

「ああ、可奈ちゃん達も来てたんだ。早く来ればよかつた。今年もよろしくね」

何だか普段よりテンションが高い気がするが敢えて聞かない。

春菜ももう子どもではない。

大人になれば大人なりの悩みがあるのだろう。

寄りかかってきた時に手を差し伸べてやれば良い。

クリスマス同様、賑やかになりそうだ。

正月が開けて直ぐに歯医者に行くために半休を取つた。

これから行く歯医者は周りの連中に色々と話を聞いたうえで決めた、子どもに優しい歯医者だと評判の所だった。

しかし、歯科医院に入るとあの特有の匂いがした。

「ノン、いたくない？」

「少しは痛いかもしれないけどずっと痛いまじや嫌だろ」

「う、うん」

「大丈夫だ、俺がついてる」

「昂にそう言つたものの田の前で昂の歯を削られたら見ていられないかもしない。」

誰も一度は経験しているあの痛さが蘇り背中がゾクゾクする。何だか俺の方が緊張してきた。

「6歳臼歯に腐骨が付いているみたいですね」

「腐骨ですか？」

「ええ、顎の骨ですよ」

先生の言葉を聞いただけで血の気が引いていく。

「麻酔をして取り除きましょう」

「お、お願します」

昂が握つている手に力が入る。

先生がピンセットで小さな脱脂綿か何かをつまんで昂の口に入れ薬を塗つてているようだ。

そして治療が始まる。

「取れましたよ」

「は、はい？ 昂、痛くないか？」

「うん、ぜんぜんいたくなかった」

あまりにも呆気なかつたので気が抜けてしまつ。

昂の口の中を見せてもらうと奥歯の歯茎に小さな穴が開いていて少しだけ血が出ているが問題ないと言われてしまつた。

「自然に穴は塞がりますし腫れも引いてくるはずです。それと6歳臼歯はこれから他の乳歯が大人の歯に生え変わる為に非常に大事な歯ですからお父さんがきちんと歯磨きチェックをしてあげてくださいね」

「あの。もしもですよ虫歯になつたりしたら」

「最悪な場合は歯並びが悪くなります。もし時間が御有りになるの

ならこの後に歯磨き教室があるので参加されてみてはいかがですか？

「宜しくお願ひします」

受付で待っていると数組の親子が現れて歯磨き教室が始まった。最初はいかに歯が大切かと言う事を子どもにも判るように絵を見せながら説明してくれる。

そして歯磨きのポイントを細かく教えてもらつた。

「昂ちゃんには虫歯は無いようですから気を付けてあげてくださいね」

「はい」

「ノン、おわりなの？」

「終わりだよ。夜ご飯も少し柔らかい物にしような」

「うん」

その晩から昂の歯磨きチェックが始まった。

昂が磨き終わつた後で磨き残しが無い様に俺が磨いて仕上げをする。何だろ？この感覚はくすぐつた様なそれでいて寂しい様な。今まで感じた事のない感覚だった。

これが普通の親が感じているものと同じなのだろうか。

今はとても愛おしく感じるが成長すれば必ず親から離れていく寂しさを同時に感じてしまうのかもしだ。

昴と出会って一緒に暮らすよつになつて半年が過ぎよつとしていた。お袋にせつつかれて昴と2人で昴の勉強机もとに学習机を見に来ていた。

「うわあ、かわいいのがいっぱいだね」

「昴が選ぶんだぞ」

「わたしがえらんでいいの？」

「良いよ、だつて昴が使うんだから」

「どれにしようかなあ。まよつちやうね

「時間はいくらでもあるからな」

そして財布の中もいくらか余裕があつた。

それはお袋達が昴のランドセルを買つてくれたからで、ボーナスもそこそこだつたの少しあは貯金してもまだ余力があつた。

目移りしていた昴の動きが止まり机の引き出しを開けたりしている。それは白とピンクを基調とした女の子が好きそうなデザインで、所々にキラキラ光るビーズがあしらわれていた。

どうしても子ども目線で選ぶとこのラインになつてしまつのだろつ。

親達としてみれば長く使える物を選びたいのが信条だらつ。

大人まで……魔法の言葉を口にしてみる。

「なあ、昴。もう少しあ姉さんみたいなやつが良いんじやないか？」

「ええ、おねえさんみたいなやつ？」

「そう、あつちにある白木ぼいのとか

「みてくる」

俺が指差すと昴が一眼散に走り出しうつぐつと後を追いかける。

「走るなよ

「うん」

すると落ち着いた感じの木で作られたシンプルな机の前に昴が立つていた。

「このクローバーのがいいな

「ん？ クローバー？」

見ると背板の真ん中が四葉のクローバー型にくり抜かれていた。引き出しの数や大きさも良い感じだし、大人の俺が手をついて揺らしてもしっかりとしたつくりになっている。

それだけに値段もそれなりにだけど中学・高校と使えたら安い買い物なのだろう。

「これで良いのか？」

「うん、これがいい！」

「しかし、クローバー大好きだな」

「うん」

店員を呼ぶと取り寄せの商品で少し時間がかかると言われてしまうが、昂が選んだものが一番良いのは変わらないので購入を決める。この時期の商品なのだから小学校の入学までには届くだろう。

「アジ、サンマ、クローバー。アジ、アジ、サンマ、クローバー」昂が嬉しがってあの歌を歌つていて、クローバーが増えている。

それは俺の実家に行つた時に四葉のクローバーを見つけた時からだつた。

「昂、はやく帰らないとあがが始まるぞ」

「ええ、ノンいまなんじ？」

俺が時間を言うと俺の手を掴んで引っ張つて歩きだした。

「はやく、おわっちゃんよ」

「へ～い」

急いで家に帰る。

でも何で毎週欠かさずにしなければいけないのかが俺には理解できなかつた。

「ノン。はやくかぎあけて」

「そんなに急かすなよ。ん？」

その時、庭の方から歌が聞こえた気がした。

「庭に誰か来ているのかな。あつ 昴！」

俺の制止も聞かずに寴が庭を覗き込んだ。

「変な人だつたら」

「あ、はるなお姉ちゃん」

「えへへ、来ちゃつた」

庭でしゃがんで何かを覗き込んでいたのは春菜だった。

「ああ、ノン。いそいでいそいで」

「へいへい」

「何をそんなに急いでるの？ あ、トイレでしょ」

「ちがうもん！」

玄関のかぎを開けた瞬間に寴が家の中に飛び込み、テレビのリモコンを手に取つてスイッチを入れてチャンネルを変えてくる。丁度番組が始まった所の様だ。

「ねえ、典兄。何があるの？」

「あれだよ、春菜も見た事がある筈だぞ。みんなといつしょ体操」「みんなといつしょ体操？」

「ノン、はやく！」

春菜に説明をしていると曲が聞こえてきてテレビの前に行き寴の横に並んだ。

曲に合わせて前ならえをして向きを変え同じ動きをする。

寴が手を横にするのを俺がしゃがんで避ける。

今度は俺が手を横にすると寴が頭を抱えてしゃがんだ。そして手を叩き合い、腕をぶつけ合つて深呼吸をする。

「みんなといつしょしたいそ。おわり」

寴の掛け声でホツとため息を付いて腰を下ろすと寴は直ぐに手を洗いに行きうがいを始めた。

「ノンもだよ」

「へへい」

「それじゃ、お姉ちゃんも」

3人並んでうがいを始める。

ガラガラ

コロコロ

カラカラ

3人3様の音がする。

体操をして保育園で言われている帰つたら手洗いとうがいを済ませると昴はテレビを消して絵本を読み始めた。

春菜が勝手知つたる我が家と言つ感じで手際よくお茶を入れてくれて2人でお茶を飲み始めた。

「典兄もすっかりお父さんだね」

「そうか。昴の事はなんとなく判つてきただけど他の子ビもはりょつとなあ」

「でも、昴ちゃんは凄いね。ちゃんとテレビを消して本を読んでる。それに庭のあれつてなあに」

春菜が庭にある小石で丸く囲つてある所を指さした。

「ああ、あれは昴が種を蒔いてるんだよ」

「種？ 何の？」

「桃とか梨とかブドウもあつたかな。最近、昴のお気に入りの八百屋を見つけて時々果物を買って来るとその度に『芽でるかな』って自分で埋めて毎日水をやつてるよ」

「凄いね昴ちゃんつて」

「そうだな。昴は少し何でも自分でしなきやつて言つ気持ちが強い見たいだからな。島で育つた所為か兄貴が忙しく働いていた所為か」

「典兄も忙しそうだもんね」

「あのな、俺はバタバタしているだけだよ。それと来る前に電話くらいいしる」

「だつて、家出してきたんだもん」

「家出？」

「声が大きいよ。昴ちゃんに聞こえちゃうでしょ」

「あのな、6歳児に家出なんて難しい言葉が判る筈ないだろ？」

「まあ……」

それっきり春菜は湯のみを両手で持ったまま俯いて何も言わなくなつてしまつた。

「しょうもない奴だな。しばらくここに居る。どうせ俺の所に来たと言つ事はタフガイは勤務なんだ」「うん、他の基地で訓練だつて。こんな時には傍に居てよね、馬鹿」

「で、家には？」

「置手紙してきた。しばらく帰らないつて」

「そつか、仕方がない晩飯の買い物にでも行くか」「うん。昴ちゃん、3人でお買い物に行こう」

「ええ、3にんで」

「そうだよ」

「いく！」

駅前のスーパーに向かう。

近くにもスーパーがあるのだが品揃えが全く違うし、駅前の方が近くに色々な店があるので都合が様くこの界隈の人はたいてい駅前まで足を延ばしている。

自宅から歩いて15分ほどなので運動にも丁度いいかもしねり。

スーパーの籠を持ち何にするか考えながら歩くが何も浮かんで来なかつた。

いつもなら昴に何が食べたいか（主菜はほほ魚）を聞いて決めるのだが今ここに昴はない。

春菜と2人で店内を探検に行つてしまつた。

そして主婦もどきの格好で主婦が毎日頭を悩ませる事と同じ事を考えていた。

後ろの方から昴の声がした。

「はるなお姉ちゃん。どうしたの？」

不思議に思い振り返ると春菜が慌てふためいて俺に向かつて昴の手を引きながら向かってきた。

「何をそんなに慌ててるんだ?」

「あ、あの、ね」

「落ち着いて話せ。幽霊か何かでも見たのか?」

「そ、それそれ」

「アホ、未だ外は明るいんだぞ」

「だ、だつて」

「沢渡さん」

聞き覚えのある声があると春菜の体が角材みたいに硬直してギリギリと音を立てながら振り返った。

「ああ、未来さん」

「この間は本当にありがとうございました。おかげさまで無事に「そうですかそれは良かつたですね」

何故だか凄く輝いて見える。

それは身の回りが落ち着いて安心して過いでせるからなのだろうか。何はともあれ一段落と言う事なのだろう。

「ああ、ノリ。けつこんしたのか?」

「するか!」といつは従妹の春菜だ

未来さんの後ろから顔を出した聖司が大声でとんでもない事を叫び、それを打ち消すくらいの声で否定すると周りの視線を浴び失笑されてしまう。

「ノン、はずかしい」

「す、昴まで……」

昴にまで冷ややかな視線を浴びせられている。

「あ、あなたがもしかして妹分の春菜ちゃん? 私つてそんなに似ているのかしら。だから私の顔を見て逃げ出したのね」

頭が落ちてしまうのではないかと思うくらいブンブン音を立てて春菜が頭を縦に振っている

「あんな、春菜。頼むから恥ずかしい事をしないでくれ。お前ももういい大人なんだから」

「私は加賀谷 早苗の従妹にあたる入江未来 いりえみらい です」

「ええ、早苗さんが話してたそつくりな従妹つて」

「私です。そう言えば沢渡さんも私の顔を初めて見た時に驚いた顔をしてましたもんね」

「すんません」

未来さんが笑いながらそんな事を言つて。
思わず頭を搔いてしまった。

すると未来さんが春菜に何かを耳打ちしている。

「典兄ですか？ 私の正義のヒーローです」

「かーちゃん、めし」

「はいはい。それでは失礼します。昴ちゃん、バイバイ

「バイバイ。せいじくんまたね」

「おう」

未来さんが頭を下げ聖司と一緒に歩き出した。
昴が腰の所で恥ずかしそうに手を振っている。

「綺麗な人だね。早苗さんにそつくりで」

「何が言たくて、誰が正義のヒーローなんだ？」

「別に」

「彼女はそんなんじやないよ。田那と離婚したばかりだよ」

「そうだったんだ。それにしても未来さんってスタイルが良いんだね。子どもが居るなんて信じられない」

「そうか？ 普通じやないのか？」

「もう、典兄は女の人の事になると鈍感なんだから。女の目は鋭いもんなんです。間違いない子どもを産む前と同じ体型を維持しているね」

「俺の事は放つておけ。それより誰かさんは甘酸っぱいやつ見たいだぞ」

「え、ええ！」

俺が昴を見ると春菜が驚いてしゃがみ込み昴の肩に手を置いた。

「昴ちゃん、あの男の子の事が好きなの？」

「うん、すき。はしるのはやいから」

「うわあ、今時の子つて典兄の頃と大違いだね。誰かさんなんて好きな子の背中に虫を入れて苛めてたもんね」

「男は大体似たようなもんだ」

「そうなのかなあ」

「タフガイに聞いてみる」

「え、う、うん」

俺が彼氏の事に触れると途端に春菜の顔が曇つた。

今夜は長くなりそうだ。

「典兄の肉じゃがが食べたい」

「肉だな、よし！」

春菜の一言に思わずガツツポーズをしてしまった。

「まるでお肉を食べさせてもらつてない子どもみたい」

「肉ねえ～」

遠い視線になつてしまつ。

「まあ、昼は極力肉系で行くけどな。夜のメインは魚だからな」

「ええ、ずつと」

「まあ、毎日？」

「信じられない健康体じゃん」

「やっぱ肉だよな」

「おさかながいい」

「行くか」

「うん～」

スーパーで買い物を済ませ駅前商店街の昂御用達の魚屋にむかつ。

と、遠くから店主が手を振つているのが見える。

「どんだけお得意さんなの？」

「まあな」

「おつ、今日も可愛いね昂ちゃん。今晚はどれこする」

「きょうはどりの子にしようかな」

昴が氷の上に綺麗に並べられた魚達を真剣な表情で見ていく。

「あの子!」

「鰯かい? 痞れるね昴ちゃんの田利きには。今日一番の上物だよ」

「それじゃ 3切れね」

「ええ、あ、昴ちゃん、誰?」

店主が俺の横にいる春菜に気付き俺に聞かずには昴に小声で聞いていた。

「あのね、はるなお姉ちゃん」

「ええ、お姉ちゃん? 若いのに大した」

「従妹です」

「なるほどね」

拳を掌に落とす店主を見て春菜が横でクスクス笑っている。

昴御用達だから来るけど1人じゃ絶対に来たくない店ナンバー1になつた。

春菜が娘に見える俺つて……

家に帰り夕食の準備をする。

七輪に火を入れその間に魚の下「しらえをする。酒・しょうゆ・みりんと魚屋でもらつた柚子の輪切りを入れたタレに鰯を漬け込む。

その間に肉じゃがを作り始める。

「鰯はどうなるの?」

「幽庵焼きだな」

「へえ、典兄つて料理出来るんだ」

「まあな、独り暮らしは半端無いくらい長いからな」横では踏み台に乗つて昴がサラダを千切つている。

「昴ちゃんもお手伝いするんだ」

「うん、ノンがしてもいいって」

「へえ、上手だね」

「えへへ、ノンはもつとじょうずだよ。ノンのつくった『はんおい』しこよ」

春菜に鍋を任せ七輪で鰯を焼き始める。しばらくすると春菜が声を掛け始めた。

「典兄、出来たよ。そつちは？」

「もう少しかな」

何度もタレを付けながら裏返す。

縁側には良い匂いが立ち込めていた。

「寒いから中に入つてろ」

「う、うん。グリルで焼けば良いのに」

「そこ」の魚のプリンセスがそんな事を許すと思つか?

「本当に昂ちゃんが一番なんだね」

「当たり前だろ?」

「そつか」

春菜が呆氣なく部屋に戻つていくのを思わず田で追つてしまひ。

「うわあ、焦げた!」

「いただきます」

3人で手を合わせて「」飯を頂く。

食事時はテレビをけして必ず家族で話をしながら食事をする。それが昂流と言つた兄貴の流儀だつた。

「おいしいね」

「うわあ、本当に美味しい」

「あんな」

「だつてグリルだつて同じだと思つていたんだもん」

「まあ、遠火の直火で焼くからな。ふつくらと焼き上がるんだよ」

「へえ~」

春菜が感心しきりで鰯を口に運んでいた。

「ノリ、これもおいしいね」

「あのね昂ちゃん。典兄の肉じゃがは絶品なんだよ」

「そうなの?」

「うん、これを食べたら他の肉じゃがなんて食べられなくなつたりや

うから

「褒め過ぎだ。何も出ないぞ」

「私は食に關して嘘は付きません」

「まつ、良いだろ」

「うわあ、反応薄つ！」

わいわいと食事をして春菜が昴を風呂に入れてくれた。
お蔭で久しぶりにゆっくり風呂に浸かれた。

俺が出てぐると昴は眠そうな顔をしていた。

「はるなお姉ちゃん、おやすみなしゃい」

「うん、おやすみ」

部屋で昴を寝かしつける。

昴が寝てからもしばらく傍に横になつて春菜の事を考えていた。

「寝た？」

「ああ、昴の机を買いに行つたから疲れたんだる」

「典兄もご苦労様」

「そんないいそうな物じゃないよ。俺のは

「それが普通なんだね」

「それと家に電話しておいたからな」

「何でそんな事をするのよ。折角……」

「折角なんだ？両親に心配かければお前はそれで良いのか？」

「だつて」

春菜が頬を膨らませ不服そうな顔をして俺を見上げている。

「それにおじさんやおばさんが俺の事をなんで信用してくれている
と思つ」

「そつか、そうだよね。何かあつた時は必ず典兄が父さんか母さん
に連絡してくれたもんね」

昴を寝かしつけて部屋の戻ると春菜は台所の入り口に腰を下ろして
いた。

まだ炭が燻つてゐる七輪を持ってきて炭を突つつくと直ぐに赤くな

つた。

何も無いよりは少し暖かいだろ？

七輪が田の前にあるのだからと冷蔵庫からシシャモを取り出して網の上に並べると香ばしい匂いが立ち込める。

仕舞つてあつた日本酒をグラスに注いで春菜の前に突き出す。

「私は……」

「良いから、氷を入れるか？」

「いらない。典兄は日本酒のロツクなの？ 氷っぽくなっちゃうよ」

「良い酒は氷を入れても美味いんだよ」

「あれ、凄くこの日本酒つて喉越しが良いよ」

「良い酒だつて言つただろ。課長からもらつた極上ものだよ」

「そうなんだ」

春菜と俺の間に沈黙が流れる。

何も春菜が言わなければ俺にはどうしてやる事も出来ないし、俺からはどうしたんだとは聞かない。

自分の中では答えが出ている筈だ。

それでもどうしようもない事の方が多い。

「美味しい物なんて時々少しだけで良いんだよ。人生だつてそんな物だ。時々感じる幸せがあるから歩いていける。常に美味しい物を食べ続ければ更に上のモノを望む。今まで美味しいと感じていた物に慣れてしまう。幸せだつてそう、慣れてしまえばそれが平坦な日常になつてしまつ。そして失つた時にしか気付くことが出来ない。美味しかつたんだ、幸せだつたんだと。爺さんの受け売りだ」

「典兄……」

「おじさんとおばさんにタフガイとの結婚を反対されたな」

「どうしてそんな事？」

「正月に紹介したんだろ。でも両親は良い顔をしなかつた、違うか

？」

「お見通しなんだ」

その後の言葉を飲み込んだ。

横に座る春菜の瞳からは光るもののが止めどなく溢れ出していた。

「何がいけないの？ 何の仕事なら安全なの？ 海自は危険だからつて、もしもの事があつたらって。そんな所に嫁には出せないって。私…… 典兄…… 悔しくて、何も言い返せない自分が悔しくて……」

春菜が俺の胸に顔を埋めて泣き崩れてしまった。

今は優しく抱きしめる事しか出来ない。

どれくらい泣いていただらう。しばらくすると「フツ」と春菜が顔を上げた。

「何だか泣いたらすつきりした」

「そうか、明日俺がおじさんに話をしてみるよ

「ありがとう」

細い指で春菜が涙を拭っている。

すると後ろの引き戸が開いて昂が眠そうに目を擦りながら起きてきてしまった。

「ノン、おしつ」

「ほいほい

昂を後押しする様にトイレに連れて行く。

戻ってきて春菜の横に座ると昂が部屋に戻ろうとしなかった。

「昂、寝ないと起きられないぞ」

昂が首を横に振つて愚図り始めてしまった。

「仕方がないな、ここに来い

「うん」

昂を抱つこして足の間に座らせると俺の方に顔を向けて丸くなり寝息を立てだした。

「うふふ、昂ちゃんの寝顔つて可愛い。それにどれだけ典兄を信頼しているのかが良く判る」

「まあ、俺は夫にも父親にもなつたことが無からな。でも何とかなるもんだって思うよ。まだまだこれからだけどな」

「大丈夫、典兄なら」

「その自信はド「からくるんだ？」

「あつ、もし彼女が出来たらバツイチでもないのに子連れ結婚になるのか」

「あのな春菜それだけは言わないでくれって言つよつ昂の事で精一杯で彼女とかなんて考えられねえよ」

「うわあ、30にして枯れちゃつてる」

「それに昂と飯食つてた方が楽しいしな」

「既に終わつてるよ」

「枯れてるとか終わつてるって言つな」

「だつて昂ちゃんが成人したら典兄は」

「……泣きそだから言わないでくれ」

久しぶりの春菜とのお喋りは夜更けまで続いた。まるで高校時代に戻つた様だつた。

「ノン、おきて。けいたいがなつてるよ」

「あい。頭痛つ、飲み過ぎた」

「けいたい」

「はいよ」

昂が目の前に突き出している携帯を見ると春菜の親父さんからだつた。

大きく息を吸つてから携帯を受けとり通話ボタンを押した。

「おはようございます。春菜ですか？ ここに居ますよ。多分まだ帰らないと思います。どうしてつて言われても原因はおじさん達が一番判つているんでしょ。僕の話を聞いてからもう一度考えてください。早苗は会社員だつたのに電車事故に遭つて帰つてきませんでした。兄貴は技師だつたのに足場の下敷きに遭い帰らない人になりました。海自は危険な所ですか？ サラリーマンなら安全なんですか？ どんな仕事をしていても先の事なんて誰にも判らないんです。だからこそ今の幸せを大切にして歩いていくんじゃないんですか？ このまま彼のもとに行き春菜が帰つてこなくても良いんですね。

今の僕ならそうさせます。春菜には愛する人と幸せになつて欲しい
から」「

電話口の向こうでは春菜の親父さんが黙つている。
そしてもう一度会つからと言つてくれた。

一息ついて携帯を切つた。

「春菜、タフガイに電話してもう一度おじさんとおばさんに会わせ
ろ。あいつだつてそう簡単にお前を手放すよつた男じゃないだろ。
思うがままに前に着き進め」

「うん！ ありがと！」

春菜は一頻り泣いた。

それは昨夜の悔しい涙とは明らかに違つはずだ。
俺はそう信じてる。

「やっぱり典兄は私の正義のヒーローだよ」

そう言い残して一段と輝きの増した笑顔で帰つて行つた。

太刀魚

やつと昂の保育所に慣れたと思つた端からお袋にやいやい言われ小学校に上がる準備をさせられ。

1月には就学通知書なるものが届き入学説明会と物品購入の案内が書かれていた。

そして半休を取つて昂の入学説明会に行いつとした矢先に大事な取引先から電話が入つた。

こんな時に限つて野田は見当たらなかつた。

「くそ、野田の奴。じょき倒してやるからな」

駅から保育所まで全力疾走を余儀なくされた。

「すうー はーー すうー はーー 昂ゴメン、遅れた」

「おそいや、みんないつちやつたよ」

「ノリ、かーちゃんが」

「は? 未来さんもまだなのか?」

「うん」

そこにタクシーが滑り込んでドアが開き未来さんが叫んでいた。

「沢渡さん、早く子ども達を」

「は、はい。急いで乗れ!」

「はーい」「うおー」

未来さんが乗つてきたタクシーに乗り込み一息ついた。

「助かりました」

「もう、ノリもタクシーでくればいいのに」

「ソリー」

学区内の小学校の正門に着き急ぎ足で説明会に向かう。

昂と聖司の新入生は先生達と上級生が出迎えてくれた。

保護者は色々な書類を受け取り延々と説明を受ける。

まるで長い社長の訓示を聞いているようだが聞き逃さない様に周り

はメモを取りながら集中している。

そんな中には余裕綽々としている人が居るが恐らく上の子が既に小学校に通っているのだろう。

「ええ、登校では集団登校・集団下校を実施しておりまして……俺らが小学生の頃には登校時は上級生と集団登校していたが帰りはバラバラだった記憶がある。

そして安全と言う言葉が多用されている。

何度もとなく学校で起きた事件がニュースで取沙汰され問題になり学校側もそれに配慮しての事なのだろう。

人を信じる事よりも人を疑う事から教える学校とはどんなものなのだろう。

それほどに犯罪が多様化していると言つ事なのだろうか。

持ち物すべてに名前を、ただし登校時に見えないとこりこりって厄介極まりない。

それと学童保育の申し込みもか。

小学校は早く終わるし昇だけで留守番なんてさせられない。俺が心配でしようがなくつて仕事が手に着かないだろう。

予防接種つて母子手帳のあれを書けばいいんだよな。

相変わらずの手探り状態で気持ちが落ちてくる。

必要と思われる所だけ聞き逃さないようにする、大体は配られた書類を読み上げているのと変わらないだろう。

「それでは体育館で学用品の販売をいたします」

それを聞いた瞬間に全てが終わつた気がしてしまった。

「長かったです」

「まあ、無駄な会議より幾分ましでしょう」

「そうですね」

「あつそだ、予防接種つて母子手帳ので良いんですねよね」

「はい」

「ありがとうございます。何だか毎回の様に手探り状態で」

「子育てなんて皆同じだと思いますよ。特に1人目の子は「そうですね。最初から親の人なんていないんですもんね」「うふふ、そうですね。まるで沢渡さんって子育ての達人みたい」「いやいや、そんなもんぢやないですよ。両親に助けられ。兄貴の奥さんに教えられ。幼馴染に励まされ。なんとかやつとです」「私も沢渡さんのおかげで聖司と心機一転です。これからも宜しくお願ひします」

「とんでもないです。こちらこそ宜しくお願ひします」未来さんに頭を下げられると何だか困ると言つた照れてしまふ。それは決して彼女に似てゐるからと言つものではないのがはつきり自覚できる。

体育館に行くとそこでは大量の学用品が販売されている。見ただけで帰りたくなるが昂の為だと言い聞かせた。

「かな」

「えつ、名前シールですか?」

「ええ、大小様々なサイズのシールに可愛いイラストと名前をプリントしてくれるらしいです、会社で教えてもらつたんです」

「そんな物があるんですね」

「まあ、手書きに越した事は無いんでしょうけど張るだけでも時間が掛るから悩み所です」

「そうですね。私も欲しいかも」

「それじゃ一緒に発注しておきます。何か聖司君の好きな物があれば」

「昂ちゃんはどんなものが?」

「四葉のクローバーですかね。他にはアジとかサンマとかは無いだろうし」

「アジとサンマですか?」

「ええ、あいつチビなのに魚が大好きで毎晩魚です」

「聖司はお肉オンリーですね」

「俺も基本は肉ですけどね。並びますか」

「はい」

一通り買い揃え終わる頃には両手で抱えるほどの荷物になっていた。自分が子どもの頃の事なんて想像もつかないお袋もこんなに大変な思いをしていたのか？

「想像以上の数だな」

「すいません、聖司の分まで」

「気にしないでください。仕事柄荷物を運ぶのは慣れていますので、すると前から昴と聖司君が歩いてくるのが見えた。

「ノン…」

「あ、ノリとかーちゃん」

「もう典彰さんでしょ」

「ええ、ノリがノリで良いって」

「駄目です」

未来さんが聖司を怒っている。

「あ、構わないですよ。ノリって呼ばれた方が気が楽だし俺は気にしませんから」

「でも……」

「ノリで良いです。沢渡つて苗字でサルワタリって言われて喧嘩した事があつて」

「そりなんですか」

「ええ、だから未来さんもノリで構わないす」

「え、ええ。典彰さんで良いですか？」

「はい」

改めて未来さんに下の名前で言わるとケツの辺りが「こわばゆい」とすると昴と聖司が同時に話し始めた。

「あんな、同時に喋るな。俺は聖徳太子じゃないんだ」

「しようとくたいし？」

「なんだそれ、食いもんか？」

聖司の言葉に未来さんがこめかみを押さえている、胸中をお察しし

ます。

「食いもんじやねえよ。小学校の社会で勉強するはずだ。偉い人で10人が一度に喋る事を全て判つたつて言われてるんだ。俺は2人でも無理だ」

「かーちゃん、昴のうちにあそびにいつてもいいか?」「ええ、これからじや遅くなるから駄目です」

「いいじゃんか、けち」

「あんな聖司。お母さんにそんな事を言つた。男は女を守る為に生まれて来るんだ。だから力も強いんだぞ。それとうちなら構いませんよ。どうせ昴と飯を食うだけですから」

「ノン、せいじくんがあそびにきてもいいの?」「良いよ、昴の大事な友達なんだろ」

「うん!」

「それじゃお言葉に甘えて」

「せいじくん、いつしょに」「はんたべよつ」

「いいのか?」「

「だいじょうだよ、ね。ノン」

「そこまで甘えられません」

「未来さん、子どもが楽しいと思う事が最優先じゃないんでしょ言うか」

「はあ、重ね重ね宜しくお願ひします。聖司、一度帰るわよ」

「ええ、めんどくせえな」

「今日のうちの飯はカレーだからな」

昴がそわそわしながら待ちわびている。

俺の家族以外がこの家に来ることは滅多にないしましてや昴の友達が遊びに来るのは今日が初めてなのだから昴の気持ちが良く判る。未来さんと聖司は買い物までして来てくれた。

「お邪魔します」

「ああ構わずに上がつて下さい。狭苦しい所ですけど」

「そんな事は無いです。つちは団地ですから使い勝手が悪くて」「せいじくん、あそぼ」

「お、おひ」

聖司が少し緊張していくて笑ってしまう。

昴に手を引かれて聖司が持つてきたゲームをして2人で遊んでいる。「今日はありがとうございます。私の仕事の所為で聖司には我慢させっぱなしで、いつもしてお友達の家に遊びに行かせてやれなくて」「俺も一緒ですよ。でも昴がどう感じているかは別だと思いたいです」

しばらくすると昴の少し怒った様な声が聞こえた。

「せいじくん、それはノンのおじいちゃんの大事だからさわっちゃダメ」

「ええ、なんでだよ」

「聖司、人の家の物を勝手に触らないの」

「うへ、ガミガミかよ」

「あら、これって」

聖司が触ろうとしていたのは昴も興味を示したアンプとレコードプレーヤーだった。

男子だから機械に興味を示すのは俺自身が一番わかる。俺も良く爺ちゃんに叱られた。

「典彰さん、お爺ちゃんの大事つて。まだ綺麗だし」

「ああ、それは爺さんが残してくれたレコードを聞きたくて俺が買つた奴です」

「レコードですか？ 懐かしいです」

未来さんが俺らと同じ世代だと感じじる。

今の子はレコードすら見た事も無い子の方が多いだろう、昴もそうだった。

「何か聞いてみますか？ ジャズとかボサノバとか」

「それじゃボサノバを」

押入れを開けるとそこには沢山のレコードがラックに入っている。その中から一枚を取り出してプレーヤーにセットする。

ボタンを押すとプレーヤーのアームが静かに動き出す。

4人で思わず目で追いつまう。

ジリジリと音がして曲が流れ始めアンプの真空管が優しい光を放つている。

「いいか、レコードを聴いている時は静かにするんだぞ。それに聖司が暴れたらこの家は古いんだから潰れるかも知れないからな」

「う、うん」

聖司が首をブンブンと縦に振っている。

「せいじく、ほんをよもう」

「うん」

これで少しは大人しくなるだろ?」

「うふふ、典彰さんって子どもの扱いが上手ですね」

「そうですか? まあ義姉さんの所の可奈とはよく遊んでましたから。でも、他の子はちょっと苦手です」

「まあ、最近は大人子どもの親御さんも多いから。でも綺麗な音ですね艶があつて」

「でしょ……」

俺のうんちくを未来さんは嫌な顔をせずに聞いてくれる。うんちくと言つても爺さんに聞かされた事が殆どでそれに色を付けただけの話なのだが。

「昂、始めるぞ」

「うん!」

「あの何を?」

「そろそろ飯の準備を」

「それなら私も」

台所はそれほど広くないし未来さんはお姫さんなのだからと言いつと押し切られてしまった。

台所で俺と未来さんと昴が立っている。

狭いし近い……

普段は昴と2人なのであまり気にしなかつたが俺と肩が触れる距離に未来さんが立っていて何だか良い匂いがする。

「あの、今日はカレーだつて聞いたのでポテトサラダでもと思つて」「あ、はい。鍋はここで調味料はつて、ああ

「もう、ノンは。」」」だよ」

「ありがとう、昴ちゃん」

俺が鍋を落としそうに慌てて掴むと昴がフオローしてくれた。

「それと昴ちゃんお魚が好きだつて聞いたのでこんな物を」

「おつ、太刀魚じゃないですか」

「うわあ、綺麗なお魚だね。美味しそう」

とても身が厚く綺麗な銀色をしている。

太刀魚は塩焼きに限ると俺の心が叫んでいる。

俺以上に昴の目が輝いている。

「ノン!」

「おう! 昴、炭!」

「はーい」

昴が台所を飛び出して行く。

突然何が始まつたのか判らず未来さんがオロオロしていた。

「ノン、炭」

「よし!」

昴が持つてきた木炭を入れた炭熾し器をコンロに掛け縁側に七輪を準備する。

そして太刀魚に粗塩を振りかける。

「今時、七輪つて典彰さんつてお爺ちゃんみたい」

「そうですか? でもガスより断然七輪の方が美味しいと思つし」

「さあ、私はポテトサラダでも」

未来さんがジャガイモを取り出しているので昴に良い事を教えてやると耳打ちする。

「ノン、ほんとう？」

「俺は嘘をつかん！」

炭が熾きたのを見て七輪に移し火を安定させる。

台所を覗くと俺に言われたとおり昴が自分の包丁でジャガイモにぐるりと切れ込みを入れている。

それを未来さんが不思議な顔をしながら昴と同じようにしてジャガイモを鍋に入れ湯がき始めた。

俺は太刀魚を七輪で焼き始める。

台所からは楽しそうな声が聞こえてきて何だかこんな感じが本当の家庭なのかと思つてしまつ。

そう言えば昴の母親は……

彼女からは家庭の温かさと言つか母親らしさと言つものを感じられずそれが違和感の正体なのかもしれない。

そんな事を考えていると未来さんが呼ぶ声がした。

「聖司、ちょっと魚を見ておいてくれないか？」

「ええ、どうすんだよ」

「猫が来たら追い払うだけで良いから」

「わかった、めんどくせえな」

「面倒言つな。お前らの晩飯だろ」

「ええ、おれさかなきらいだもん」

「そんな事を言つてると昴に嫌われんぞ」

「うつ」

聖司が俯いてしまつ。

その表情から聖司も昴の事を悪く思つていながら伺える。

「あの。だしの素とか」

「ああ、味噌汁ですか。出汁は冷蔵庫の中に」

「ええ？ 冷蔵庫ですか？」

「あ、俺んちは粉末の使わないんでもっぱらこれです」

俺が冷蔵庫から取り出したのはお茶などを冷やしておくクーラーポ

ツトだつた。

その中には鰹節と昆布を切つた物を出汁パックに詰めて水に漬けてあり良い感じの出汁が出来上がっている。

出汁を鍋に注ぎ火にかけイリコを一掴み鍋に放り込んだ。

中火でゆっくり沸かし湧いたらアクを取りイリコを取り出した。

「あら？ 何だか簡単ですね」

「まあ、粉末より手間はかかりますけどね。お袋が煩くって昂にはちゃんとした物を食べさせりつて」

「あの、作り方を」

「ノリ！ こげる」

聖司の声で慌てて七輪の太刀魚をひっくり返す。

焦げてはいないうだ。ただ魚の脂が落ちて火が上がつたので聖司が驚いたのだろう。

「凄い、昂ちゃん！」

今度は台所から未来さんの驚く声が聞こえてきた。

「ノン、みんなでたべるとおいしいね」

「そうだな」

4人で食卓を囲む。

傍から見れば家族団らんに見えるのだろうか。

まあ、俺と未来さんじや釣り合いが取れていらないのは誰が見ても判るだろう。

「あの、出汁は」

「ああ、前の晩にカツオ節と昆布をパックに入れて水に漬けて置くだけです。出汁を冷蔵しておけば一日くらいは普通に使えますよ。それと残つたイリコや出汁を取つたやつはまとめて冷凍しておいて後でふりかけやつくだ煮にしています」

未来さんがメモ帳に俺の説明をメモしながら真剣な顔で聞いている。

「凄いですね」

「いや、捨てたら昂にもの凄い勢いで怒られて渋々です。でもカルシウムも摂れるし昂の体の事を考えると苦じゃないんですね」

「それにしても典彰さんってお料理が上手なんですね」

「ああ、大学の頃は居酒屋のキッチンでバイト三昧でしたから。その親父が厳しい人で色々と教わりましたよ。そんな事が役に立つとは思つてもみませんでした」

「それとこのカレー……」

未来さんがスプーンに乗つてゐるしらたきを不思議そうに見ている。「ああ、すんません。実は残り物の肉じゃがにカレーのルーを入れた手抜き料理です」

「ええ、肉じゃがだつたんですか?」

「まあ、昴と2人じゃ残るし飽きるんで」

「それとジャガイモの皮があんなに簡単に?けるなんて思つてもみませんでした。昴ちゃんは『ノンは魔法使いだから』なんて言つし」

「ああ、あれは裏技のテレビ番組で知つただけで」

「へえ、テレビ番組で」

「ええ、ニュースでやる事故とかは昴が怖がつたりするんで消去法で選ぶと動物とか裏ワザとかの番組になるんです。それで」「もしかして」

「たぶん、兄貴の事がトラウマになつてゐるんだと思います」

「本当に今日はありがとう御座います。聖司のあんなに楽しそうな顔を見たのは久しぶりで」

「まあ、昴も喜んでいますし。時々は遊びに来てください」

「今日は無理を言つて会社に半休をもらつてよかつたと思います」
俺のトラウマと言う言葉に未来さんは話題を変えてくれた。
それでも未来さんの言葉に嘘は無いと思つ。

この人も今までもこれからも独りで頑張つて行くのだから。
いつか彼女の横にも……今は考えるのを止めよう。

聖司も昴に教わりながら太刀魚に挑戦している。

まあ、殆どの骨は俺が取つたし太刀魚は食べやすい魚だと思つ。
半分は昴に嫌われたくないのが聖司の顔に見え隠れする。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1172y/>

アジとサンマとクローバー

2011年11月20日11時30分発行